

愛宕下Ⅱ遺跡発掘調査報告書

序

陸前高田市は、豊かな自然のもと、海に川に、そして北上山系の山々から四季折々多くの恩恵を受けて発展してまいりました。市内には、沿岸部の縄文時代の多くの貝塚をはじめ中世期の城館跡など 260 か所余りに及ぶ遺跡が所在しております。このような文化遺産を保護・保存し後世に伝え活用していくことが私たちの責務でもあります。一方、豊かな地域づくりや市勢の発展に必要な公共事業や社会資本整備が必要であることも事実です。しかし一度破壊された遺跡は二度と元には戻りません。陸前高田市教育委員会では、これら開発事業及び東日本大震災後の様々な復興事業と貴重な遺跡の保護の両立を図るために、関係機関と事前の協議を行い消滅する遺跡について発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、一般国道 4 5 号改築工事及び今泉地区被災市街地復興土地区画整理事業に伴い実施した愛宕下Ⅱ遺跡の発掘調査成果を収録したものです。一般国道 4 5 号改築工事は、岩手県・宮城県にかけての沿岸部、なかでも被災地域を結ぶ重要な復興道路として、完成が待望されています。また、今泉地区被災市街地復興土地区画整理事業は、復旧・復興に不可欠な高台移転事業として、竣工が急がれています。

今回の調査では、北海道地方の影響を受けた続縄文時代の出土品が発見されたことをはじめ、平安時代の集落跡が確認されたという成果が得られました。また、縄文時代の土器も出土しています。陸前高田市のみならず、気仙地域の縄文時代から古代を知るうえにおいて、大変意義深いことと言えます。

本書が、地域の方々をはじめ学術研究、教育活動などに広く活用され、ひいては文化財保護思想の普及啓蒙に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました岩手県教育委員会をはじめ、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

陸前高田市教育委員会

教育長 山田市雄

例 言

1. 本報告書は、岩手県陸前高田市気仙町字愛宕下地内に所在する愛宕下Ⅱ遺跡の発掘調査結果をとりまとめたものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、一般国道45号改築工事及び今泉地区被災市街地復興土地地区画整理事業に伴う発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会の指導を受け、事業者と陸前高田市教育委員会との協議を経て、陸前高田市教育委員会が発掘調査を実施した。
3. 野外調査期間と面積は、以下のとおりである。
調査期間：平成26年4月8日～10月15日
調査面積：1,470 m²
4. 室内整理について、平成26年度の報告書原稿の執筆・編集は西岡誠司・阿部敬生(神戸市教育委員会派遣)が行い、平成27年度の編集は後藤円(当市教育委員会)が行った。
5. 火山灰同定については、株式会社加速器分析研究所に委託した。
6. 基準杭の設置、基準点測量、水準測量については、有限会社さくら設計に委託した。
7. ラジコンヘリによる航空写真撮影は、株式会社タックエンジニアリングに委託した。
8. 石器・土錘・鉄滓の実測図化については、株式会社ラングに委託した。
9. 野外調査及び本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った(順不同、敬称略、所属・職名は当時)。
石野博信(兵庫県立考古博物館館長)、禰宜田佳男(文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官)、近江俊秀(文化庁文化財部記念物課文化財調査官)、越政樹(復興庁岩手復興局参事官補佐)、青木絵美(復興庁岩手復興局参事官補佐)、松下洋介(岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課総括課長)、菅常久(岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課上席文化財専門員)、半澤武彦(岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課文化財専門員)、村木敬((公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター文化財専門員)、八木光則(陸前高田市文化財調査委員)、深井明比呂(兵庫県立考古博物館事業部長)
10. 刻書土器に関しては、次の方々から、ご指導・ご助言を賜った(順不同、敬称略、所属・職名は当時)。
平川南(大学共同利用法人人間文化研究機構理事)、石川日出志(明治大学文学部教授)、佐藤信(東京大学大学院人文社会系研究科文学部教授)、七海雅人(東北学院大学文学部歴史学科教授)、八木光則(陸前高田市文化財調査委員)、畠山恵美子(明治大学古代学研究所)
11. また、後北式土器に関しては、次の方々から、参考文献資料のご提供をはじめ、数々のご指導・ご助言を賜った。(順不同、敬称略、所属・職名は当時)。
菊池俊彦(北海道大学名誉教授)、小林克(秋田県埋蔵文化財センター副所長)、松田宏介(室蘭市教育委員会教育部生涯学習課文化振興学芸員)、藤沢敦(東北大学総合学術博物館教授)、園部真幸(江別市郷土資料館学芸員)、佐藤智雄(大船渡市教育委員会生涯学習課主査：函館市教育委員会より派遣)、佐藤剛((公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター文化財専門員：(公財)

北海道埋蔵文化財センターより派遣)、大坂拓(宮城県教育庁文化財保護課技師)、芳賀英実(石巻市教育委員会生涯学習課文化財グループ主幹)、村本周三((公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター:北海道教育委員会文化財・博物館課より派遣)

12. 野外調査においては、陸前高田市都市計画局市街地整備課、UR 都市機構をはじめ、工事関係者の方々に、ご協力をいただいた。
13. 掲載した土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖」によった。
14. 発掘調査記録および出土遺物は、陸前高田市教育委員会において保管している。
15. 本発掘調査の成果について、この間に発表・報告してきたが、本報告書をもって最終的な報告とする。

目次

序

例言

I 調査に至る経過	2
1 調査の経緯	
2 調査体制	
3 現地調査について	
II 遺跡の立地と環境	5
1 遺跡の位置	
2 地理・地形的環境	
3 基本層序	
4 周辺の遺跡	
III 調査と整理の方法	9
1 測量基準点の設置	
2 調査区の設定	
3 表土除去、遺構検出・掘削	
4 遺構記号・遺構番号	
5 記録作成	
IV 調査成果	16
1 第1遺構面	
2 縄文時代から古墳時代の遺構と遺物	
V 総括	57
1 愛宕下II遺跡出土の後北式土器について	
2 S I 01 出土の土製支脚について	
附編 陸前高田市愛宕下II遺跡のテフラ分析	67
報告書抄録	94

表目次

第1表	周辺の遺跡	8	第4表	出土遺物(須恵器・土師器)	50
第2表	検出遺構	25	第5表	出土遺物(土製品)	55
第3表	出土遺物(縄文土器・ 続縄文土器・弥生土器)	49	第6表	出土遺物(石器)	55
			第7表	出土遺物(鉄滓)	56

図版目次

第1図	遺跡の位置	1	第22図	遺構外出土遺物(2)	35
第2図	周辺の地質	6	第23図	遺構外出土遺物(3)	36
第3図	周辺の遺跡	8	第24図	遺構外出土遺物(4)	37
第4図	調査区位置図	11	第25図	遺構外出土遺物(5)	38
第5図	調査区平面図	12	第26図	遺構外出土遺物(6)	39
第6図	調査区第1遺構面平面図	14	第27図	遺構外出土遺物(7)	40
第7図	調査区東壁土層断面図	19	第28図	遺構外出土遺物(8)	41
第8図	調査区西壁土層断面図	20	第29図	遺構外出土遺物(9)	42
第9図	SI01(1)	21	第30図	遺構外出土遺物(10)	43
第10図	SI01(2)	22	第31図	遺構外出土遺物(11)	44
第11図	SI02	23	第32図	遺構外出土遺物(12)	45
第12図	SI03・SL101	24	第33図	遺構外出土遺物(13)	46
第13図	SI01出土遺物(1)	26	第34図	遺構外出土遺物(14)	47
第14図	SI01出土遺物(2)	27	第35図	遺構外出土遺物(15)	48
第15図	SI01出土遺物(3)	28	図36	東北地方における北海道系土器 の分布状況	57
第16図	SI01出土遺物(4)	29	図37	後北C2-D式土器の変遷	58
第17図	SI01出土遺物(5)	30	図38	土製支脚の形式分類	60
第18図	SI01・SI03出土遺物	31	図39	土製支脚の分布状況	61
第19図	SI02・SI03・SK107出土遺物	32	図40	岩手県内における土製支脚 が確認された遺跡	62
第20図	SX102・SX103・SX201・SP108 出土遺物	33	図41	岩手県内出土の土製支脚	63
第21図	遺構外出土遺物(1)	34			

写真図版目次

写真図版1	愛宕下II遺跡・刻書土器	72	写真図版11	SI01出土遺物(1)	82
写真図版2	遺跡周辺の状況	73	写真図版12	SI01出土遺物(2)	83
写真図版3	調査地	74	写真図版13	SI01・SI02・SX201出土遺物	84
写真図版4	調査区土層断面	75	写真図版14	SI03・SK107・SX103出土遺物	85
写真図版5	調査区土層断面・第1遺構面	76	写真図版15	SX102・SP108・遺構外出土遺物(1)	86
写真図版6	第1遺構面・SI01	77	写真図版16	遺構外出土遺物(2)	87
写真図版7	SI01・SI02	78	写真図版17	遺構外出土遺物(3)	88
写真図版8	SI03・SL101	79	写真図版18	遺構外出土遺物(4)	89
写真図版9	SK101・SK102・SK103 SK107・SX103・SX201 SP108・十和田a火山灰	80	写真図版19	遺構外出土遺物(5)	90
写真図版10	第2面	81	写真図版20	遺構外出土遺物(6)	91
			写真図版21	遺構外出土遺物(7)	92
			写真図版22	遺構外出土遺物(8)	93



第1図 遺跡の位置

I 調査に至る経過

1 調査の経緯

愛宕下Ⅱ遺跡発掘調査は、一般国道45号改築工事三陸沿岸道路(唐桑高田道路)及び今泉地区被災市街地復興土地区画整理事業に伴い当遺跡の記録保存を目的として実施された。

一般国道45号改築工事三陸沿岸道路の事業に伴い、岩手県教育委員会により陸前高田市内の遺跡分布調査が行われた。その結果について、平成24年2月24日付教生第1342号「埋蔵文化財の分布調査について(回答)」が岩手県教育委員会生涯学習文化課総括課長より国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所長へ、また同じ内容の通知が陸前高田市教育委員会教育長へあった。この回答の中で、市内気仙町字愛宕下地内の一地区が遺跡の「可能性あり④」と記載された。

また、三陸沿岸道路計画路線の気仙町内を通る区間と隣接して陸前高田市(都市計画課)でも今泉地区被災市街地復興土地区画整理事業が計画されていた。この土地区画整理事業と隣接する三陸沿岸道路の区間については、土地区画整理事業と合わせて陸前高田市が行うこととなった。気仙町字愛宕下地内の遺跡の「可能性あり④」とされた地区もこの範囲に入っていた。

そこで、平成25年7月1日付陸高都第121号「予定地における埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)」により陸前高田市長から陸前高田市教育委員会教育長へ試掘調査の依頼があった。陸前高田市教育委員会では人員不足であったため、平成25年7月1日付陸高教生第289号「予定地における埋蔵文化財の試掘調査の協力について(依頼)」により、陸前高田市教育委員会教育長より岩手県教育委員会教育長へ気仙町字愛宕下地内の試掘調査の協力を要請した。その後、平成25年7月29日、30日に岩手県教育委員会が同地区の試掘調査を行い、平成25年8月12日付教生第740号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により陸前高田市教育委員会教育長へ試掘調査結果の回答があった。

平成25年8月26日に、南三陸国道事務所、岩手県教育委員会、陸前高田市、陸前高田市教育委員会の各担当者により協議が行われ、岩手県教育委員会の試掘調査結果により①380㎡の範囲について発掘調査が必要であること、②現況山林部分については樹木伐採後に試掘調査が必要であること、が確認された。

なお、山林部分については、平成26年1月9日に陸前高田市教育委員会が試掘調査を行い、その調査結果を平成26年1月20日付陸高教生第695号「公共事業における埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により陸前高田市長へ回答した。

平成26年3月26日付陸高都第657-1号「埋蔵文化財発掘の届出について」(通知)が陸前高田市長より岩手県教育委員会教育長へあり、平成26年4月1日付教生第4-1号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について(勧告)」により岩手県教育委員会教育長より陸前高田市長へ愛宕下Ⅱ遺跡の発掘調査実施の勧告があった。

岩手県教育委員会、陸前高田市都市計画課、陸前高田市教育委員会との協議により、陸前高田市教育委員会が愛宕下Ⅱ遺跡の発掘調査を行うこととなった。

なお、「愛宕下」という字名は、陸前高田市矢作町内にもあり縄文時代の遺跡が所在する。その字名に倣って、愛宕下遺跡(NF55-2025)と命名していた。そこで、矢作町所在の愛宕下遺跡

(NF55-2025) を愛宕下Ⅰ遺跡(NF55-2025)とし、気仙町所在の当遺跡を愛宕下Ⅱ遺跡(NF66-2358)とした。その遺跡登録について、平成25年8月22日付陸高都第351号「遺跡発見の通知について」を陸前高田市教育委員会教育長より岩手県教育委員会教育長へ提出し、また「岩手県遺跡情報検索システム(平成25年度データ)」に掲載された。

2 調査体制

調査主体	陸前高田市教育委員会					
教育長	山田市雄					
総括	大久保裕明	(教育次長兼生涯学習課長)				
事務局	高橋一成	(同課生涯学習課長補佐)				
	吉田志真	(同課生涯学習係長)				
	桐木亮	(同課主任主事・京都市教育委員会より派遣)				
	曳地隆元	(同課学芸員)				
調査員	西岡誠司	(同課主査・神戸市教育委員会より派遣)				
	阿部敬生	(同課主査・神戸市教育委員会より派遣)				
	加藤隆也	(同課主査・福岡市教育委員会より派遣)				
	遠藤勝博	(同課嘱託員・発掘調査員)				
	後藤円	(同課嘱託員・発掘調査員)				
発掘作業員	阿部亘	荒木コギク	荒木美智代	和泉明子	和泉静明	伊勢谷和雄
	梅木良子	及川亜紗美	及川恵美子	近江伸子	大和田健子	大和田武喜
	小笠原なな	菅野貴恵	菅野トシエ	菅野奈穂美	菅野由美子	
	後藤美知香	金野由紀夫	佐々木栄子	佐々木のり子	佐々木美佳	
	佐々木道子	佐々木由里	佐藤キヨ子	佐藤美代子	菅原とみ子	
	鈴木廣一	鈴木貞子	高橋景奈	高橋由美	千葉晃子	戸羽さおり
	戸羽由美	中野恵美子	新沼理香	畑野義久	堀口桂子	三嶋登喜子
	村上恵代子	村上奈穂子	村上紀子	村上実枝	村上由美子	安居トミ子
	山谷富助	横澤桐子	吉田友和	吉田のり子		
整理作業員	和泉静明	及川亜紗美	及川恵美子	菅野貴恵	菅野由美子	後藤美知香
	佐々木栄子	佐々木道子	菅原とみ子	鈴木貞子	高橋景奈	戸羽由美
	畑野義久	三嶋登喜子	村上奈穂子	村上紀子	村上由美子	山谷富助
	横澤桐子					

3 現地調査について

発掘調査地は、岩手県陸前高田市気仙町字愛宕下50-2、50-3、50-4である。調査着手前の現況は山林であるが、調査予定範囲周辺については、樹木の伐採及び下草の除草等は、概ね完了していた。現地調査は、平成26年4月8日～10月15日に実施した。

4月8日 陸前高田市都市計画課及び工事関係者と、現地で調査範囲の確認、調査方法に関する打ち合わせ等を行った後、重機による掘削作業を開始した

4月14日 コンテナハウス・仮設トイレを搬入・設置した

4月21日 発掘作業員を雇用し、本格的な発掘調査作業を始めた

重機掘削後、人力により遺物包含層を掘削し、平安時代の遺構面(第1遺構面)の検出を開始した。当初は、調査対象面積を三陸沿岸道路工事予定地内の約380㎡として調査を開始したが、進捗するにつれて、遺物包含層が西側、東側、南側の三方向に広がる可能性が生じてきた。

5月7日 発掘調査の必要な範囲を確定するために、西側、東側、南側に拡張トレンチを設定して確認調査を実施した

確認調査の結果、発掘調査面積は、三陸沿岸道路工事予定地内に止まらず、今泉地区土地区画整理事業地内にかけて、1,470㎡に拡張することとなった。調査面積は拡大したが、当初の調査予定期限である9月30日を遵守するために、作業員を増員した。

当初、重機掘削・人力掘削による掘削土は、調査区の東側及び南側に積み上げ、重機でかき上げながら整形していた。しかしながら、調査区を拡張することとなり、掘削土が置ききれなくなったため、11トンダンプで工事予定地内の別の場所に移動し、仮置きした。

5月8日 西側及び南側について、拡張部分の重機による表土掘削を開始した

5月13日 東側拡張部分の表土掘削を開始した。表土掘削後、人力により遺物包含層の掘下げ・遺構面検出・精査、遺構検出・掘下げを行った

その後の協議で、当初埋戻しは、当教育委員会が実施する予定ではなかったが、埋戻し作業も含めた発掘調査期限が10月中旬ということに変更になった。

6月25日 基準点測量・水準点測量及び10mメッシュの基準杭設置が完了した

第1遺構面の調査完了後、第2面までの間層については、遺物がほとんど出土しないため、重機により掘下げた。また、第2面の調査完了後、調査区中央付近に東西方向の試掘トレンチを4か所設定し、人力により掘削したが、遺構・遺物は確認されなかった。

10月2日 実測・写真撮影等の現地記録作業を完了した

10月7日 調査区の埋め戻し作業及びコンテナハウス・調査用資材等の撤収作業を始めた

10月15日 発掘調査のすべてを終了した

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置

愛宕下Ⅱ遺跡は、岩手県陸前高田市気仙町字愛宕下地内に所在する。また北上山地から広田湾に流れる気仙川河口から西岸に沿った平坦地に字町、字的場等の旧市街があり、さらにその西側が丘陵となっている。本遺跡は、その丘陵の沢地形を幾分入った標高約18～30mの東向きの緩やかな斜面地に位置する。現状は植林による林地及び畑地である。やや南の海岸沿いには、長部地区が所在する。

2 地理・地形的環境

陸前高田市は、古生界(古生代の地層)の氷上山崗岩から成る氷上山(標高874.7m)とその西側に広がる主に中生界(中生代の地層)の花崗岩から成る丘陵、さらにその南側の丘陵麓に形成された陸前高田平野より成り立つ。

陸前高田平野は、南北約2km、東西約2.5kmで、気仙川及びその旧河道、さらに東部の浜田川によって形成された三角州平野である。

陸前高田平野は、かつての深く刻まれた溪谷に砂や礫が厚く堆積し、その上に形成された沖積層である。陸前高田平野の地下約40～20mの所に基礎となる岩盤があり、この上に基底礫岩層、シルト(砂と粘土の中間の細かさを有する土)を含む砂岩層、泥質層、砂層、沖積陸成層の順に堆積している。

陸前高田平野の西側(気仙川の流路に対応する)の地下は、約40mの谷が刻まれ、東側(浜田川の流路に対応する)の地下には約20mの谷が刻まれており、これに海成沖積層が堆積し、この上に陸前高田平野が形成されている。この谷をつくっている基盤岩は、中生代の砂岩、礫岩、花崗岩及び古生代の粘板岩、石灰岩などから成っている。

西側の気仙川に対応する埋没谷の底には、約10mの厚さで砂礫層があり、下の基盤となる岩を覆っている。この上にシルトをわずかに含む砂層が見られる。層の厚さは厚い所で約10m、海生の貝殻片を多く含み、海面が上昇してきた時の堆積物と考えられる。

さらに、この上にシルトを主とする中部泥層が約11mの厚さで堆積している。

この中部泥層のさらに上部には、上部砂層と呼ばれる貝殻片を含む砂(シルト砂層)が5～10mの厚さで堆積している。

この上部砂層の上面には地下4～6mほどの浅い谷が刻まれ、その上に黒褐色有機質シルトが堆積している。本層は、河床の砂が運ばれてできた陸成の堆積層と考えられる。

愛宕下Ⅱ遺跡は、このように形成された陸前高田平野の西端であり、西側に広がる丘陵の麓近くに位置する。

(陸前高田市史編集委員会編 『陸前高田市史 第2巻 地質・考古編』 1995)



新生代 第四紀完新世		(扇状地堆積物、海岸平野堆積物、他)	古生代		叶倉層、薄衣層(泥岩、粘板岩及び泥岩砂岩互層)
第四紀更新世		高清水層、滝沢層、折居層、他			叶倉層、薄衣層(石灰岩及び泥岩)
中生代 前期白亜紀		岩脈類(ひん岩、花崗閃緑斑岩など)	前期ペルム紀		坂本沢層、錦織層(泥岩、粘板岩及び砂岩)
		気仙川深成岩体(角閃石黒雲母花崗閃緑岩、他)			坂本沢層、錦織層(石灰岩)
		広田深成岩体(角閃石黒雲母花崗岩、他)	石炭紀		鬼丸層、長岩層
前-中期三畳紀		稲井層群伊里前層	オルドビス紀?		日頃市層、尻高沢層、有住層、大平層
		稲井層群風越層			水上花崗岩類
		稲井層群大磯層及び大沢層			壺の沢変成岩類
古生代 後期ペルム紀		登米層中・下部、大籠層			実在断層
中期ペルム紀		叶倉層、薄衣層(礫岩及び砂岩)			

20万分の1地質図幅「一関」・産業技術総合研究所地質調査総合センターより作成

第2図 周辺の地質

3 基本層序

調査区の南北及び東西で土層の堆積状況が異なっているが、調査区北東部における基本土層は、下記のとおりである。

- (1) 褐灰色砂質土：10Y R6/1（表土層）
- (2) 灰褐色礫混じり粘質土：7.5Y R5/2（盛土層）
- (3) 灰褐色礫混じり粘質土：7.5Y R4/2
- (4) 褐灰色礫混じり粘質土：7.5Y R4/1（平安時代の遺物包含層）
- (5) にぶい黄褐色礫混じり粘質土：10Y R5/3（平安時代の整地層）
- (6) 褐色礫混じり粘質土：10Y R4/4
- (7) 暗褐色礫混じり粘質土：7.5Y R3/3（縄文時代～古墳時代の遺物包含層）
- (8) にぶい黄褐色礫混じり粘質土：10Y R5/4（地山の流出土）
- (9) 黄褐色礫混じり粘質土：10Y R5/6（地山）

一方、調査区南西部における基本土層は、下記のとおりである。

- (1) 盛土・攪乱層
- (2) 褐灰色砂質土：10Y R6/1（表土層）
- (3) 褐灰色砂質土：10Y R5/1
- (4) 褐灰色砂質土：7.5Y R6/1
- (5) 褐灰色砂質土：7.5Y R5/1
- (6) 暗褐色礫混じり粘質土：10Y R3/4（縄文時代～古墳時代の遺物包含層）
- (7) にぶい黄橙色砂礫土(礫を多く含む)：10Y R6/3（地山）

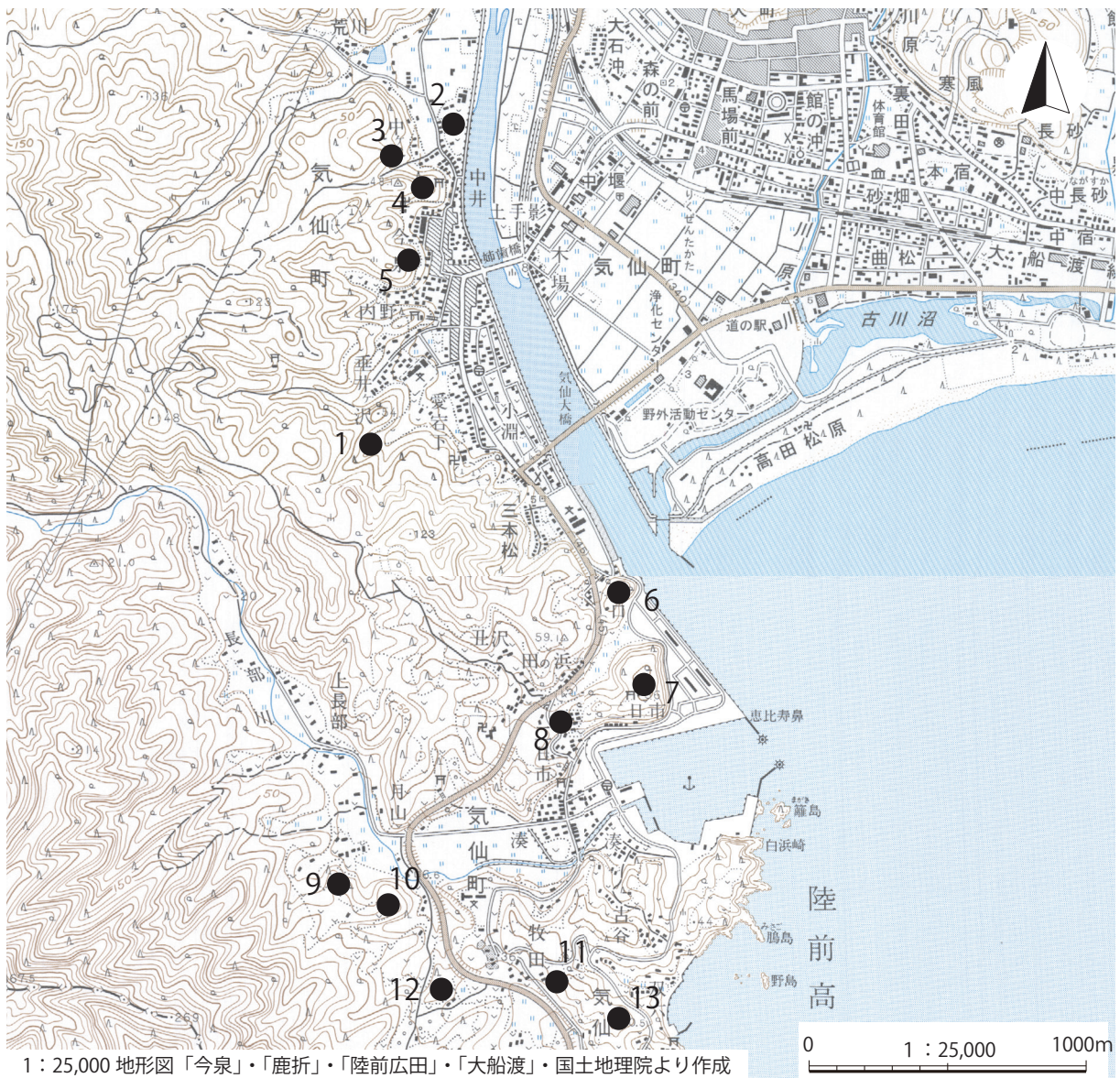
なお、上記調査区北東部の土層は第7図調査区東壁土層断面図の土層に対応する。たとえば、調査区北東部の(1)層は第7図の1層に対応し、調査区北東部の(8)層は第7図の8層に対応する。また、第3～7表出土遺物の出土地点に記入された土層は上記調査区北東部及び第7図の土層に対応する。つまり、第3～7表出土遺物の出土地点に4層と記入されている場合、それは上記調査区北東部の(4)層、第7図の4層に対応する。

4 周辺の遺跡

愛宕下Ⅱ遺跡周辺には、主に丘陵先端部にいくつかの遺跡が点在する。南の方には海岸近くの台地上に二日市貝塚、牧田貝塚の貝塚遺跡が所在する。牧田貝塚では、1970年に陸前高田市教育委員会により保存を目的とした発掘調査が行われ、縄文時代前期の遺跡であることが確認された。また1994年に岩手県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われ縄文時代前期と推定される竪穴住居が見つかった。また、中世の遺跡として、北の方に廻館、東館、館ヶ脇館、南の方に二日市館、上長部館が所在する。一方、気仙川を挟んで対岸の陸前高田平野では遺跡は確認されていないが、陸前高田平野周辺の丘陵上や台地上に多くの遺跡が散在する。

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
1	NF66-2358	愛宕下Ⅱ	散布地	縄文、弥生 古代	竪穴住居、縄文土器、石器 弥生土器、須恵器、土師器	気仙町字愛宕下	H25新規
2	NF67-1020	中井	散布地		鉄製品	気仙町字中井	H25試掘
3	NF66-1349	廻館	城館跡			気仙町字中ヶ谷	詳細不明
4	NF66-1358	東館(今泉古館)	城館跡	中世	空堀、腰郭	気仙町字町裏	
5	NF66-1388	館ヶ脇館	城館跡	中世	空堀	気仙町字内野	
6	NF77-0006	川口	散布地	縄文	縄文土器(前期)	気仙町字川口	
7	NF77-0037	二日市館	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀、二の郭	気仙町字二日市	
8	NF77-0054	二日市貝塚	貝塚	縄文	縄文土器、貝片	気仙町字二日市	
9	NF76-1315	牧田貝塚	貝塚	縄文、平安	集落跡、土坑、土器、石器 土師器	気仙町字牧田	S45調査 H6調査
10	NF77-1033	上長部館	城館跡	中世	空堀	気仙町字牧田	
11	NF77-1044	水上Ⅰ	散布地		土器	気仙町字水上	
12	NF77-1050	水上Ⅱ		縄文	落穴	気仙町字水上	
13	NF77-1066	双六塚	祭祀跡			気仙町字双六	



第3図 周辺の遺跡

Ⅲ 調査と整理の方法

1. 測量基準点の設置

測量基準点は、第1遺構面の遺構検出後、有限会社さくら設計に委託した。調査区北側及び南側に、3級基準点を計2点設置した。得られた座標値（世界測地系）と水準値は、以下のとおりである。

3T-1 : (X=-110,196.307、Y=67,535.684) 標高：24.912m

3T-2 : (X=-110,241.751、Y=67,510.123) 標高：23.865m

これらの基準点を基にして、10mメッシュの基準杭を調査区周辺に設置した。

2. 調査区の設定

調査区内の地区名については、基準杭によるグリッド分けした名称ではなく、拡張前の調査区を「中央部」とし、それぞれの拡張部分について、西側を「西拡張部」、南側を「南拡張部」、東側を「東拡張部」と呼称することとした。さらに細かい地点については、「中央部西側」、「南拡張部東側」というような表現を用いることとした。

調査区「中央部」は、竪穴住居S I 01を囲む4本の試掘トレンチ内と竪穴住居S I 02周辺がおよその範囲である。その西側を「西拡張部」、南側を「南拡張部」、東側を「東拡張部」とした。

3. 表土除去、遺構検出・掘削

表土除去 バックホウを使用し、掘削した。また、遺物包含層までの間層、及び第1遺構面から第2面までの間層についても、バックホウを使用し、掘削した。

遺構検出・掘削 遺物包含層の掘削、遺構面や遺構の検出作業は、すべて人力である。遺構の掘削作業についても、人力である。なお、小土坑・ピットは基本的に埋土を半裁して断面観察・記録を行った後に完掘した。

また、第1遺構面においては、遺構が確認されたため、「第1遺構面」と呼称するが、第2面においては、遺構が確認されなかったため、「第2遺構面」ではなく、「第2面」と呼称することとする。

4. 遺構記号・遺構番号

遺構記号については、文化庁文化財部記念物課発行の『発掘調査のてびき』に準拠した。例えば、「SD→溝」、「SI→竪穴建物」、「SK→土坑・貯蔵穴・落とし穴」、「SL→炉・カマド」、「SP→柱穴・ピット」、「SX→その他の遺構」、「NR→自然流路」とした。但し、「SI」については、「竪穴建物」ではなく、「竪穴住居」と記述することとした。

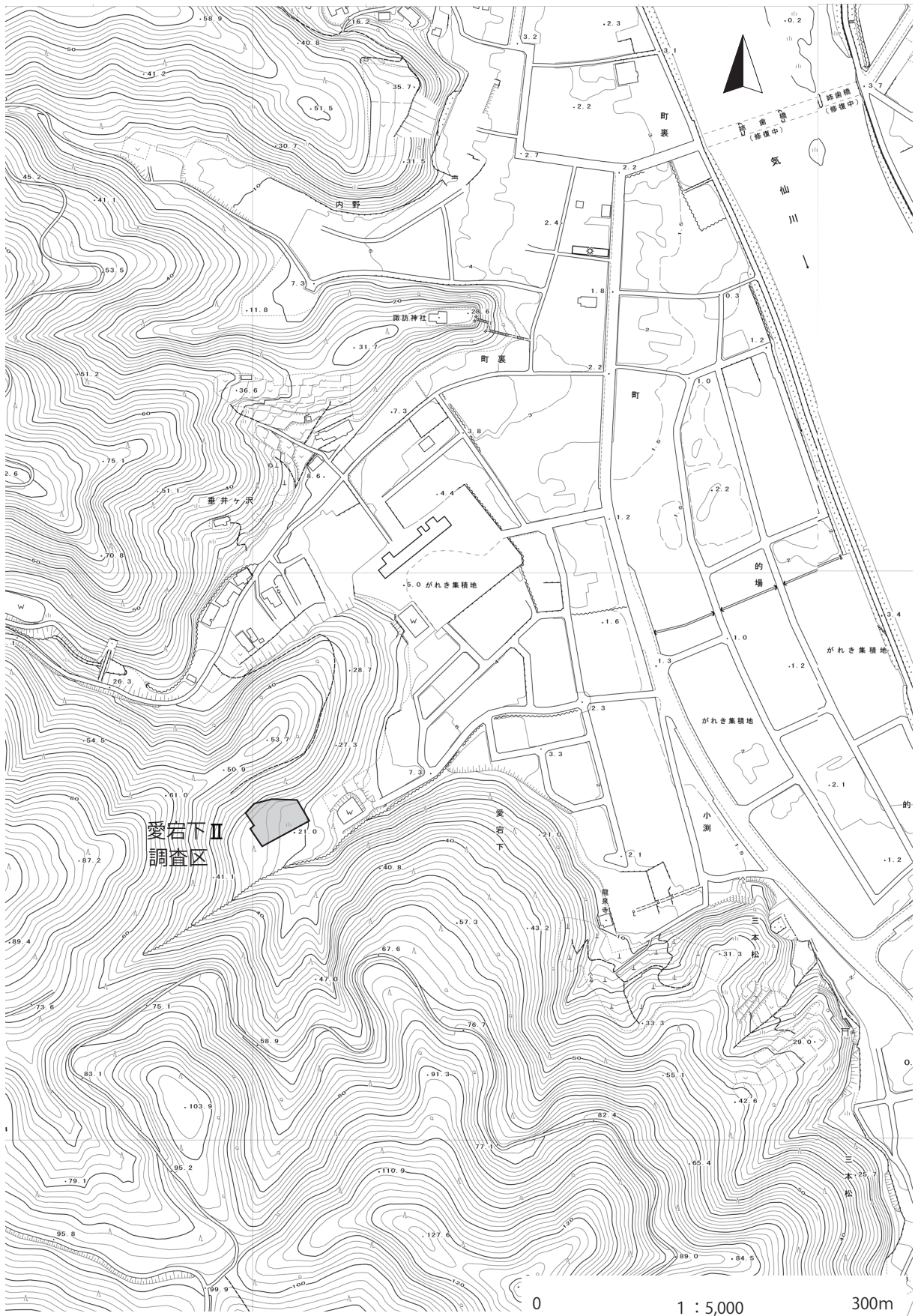
また、遺構番号については、竪穴住居は、検出した順番に、「SI01・SI02・SI03」とした。土坑と小土坑、柱穴・ピット、落ち込み等については、地区に関係なく種別ごとに通し番号を付けた。第1遺構面で検出したものは、100番台、第2面で検出したものは、200番台とした。例えば、第1遺構面の柱穴・ピットについては、「SP101～」、第2面の落ち込みについては、

「S X201～」とした。

5. 記録作成（写真・図面）

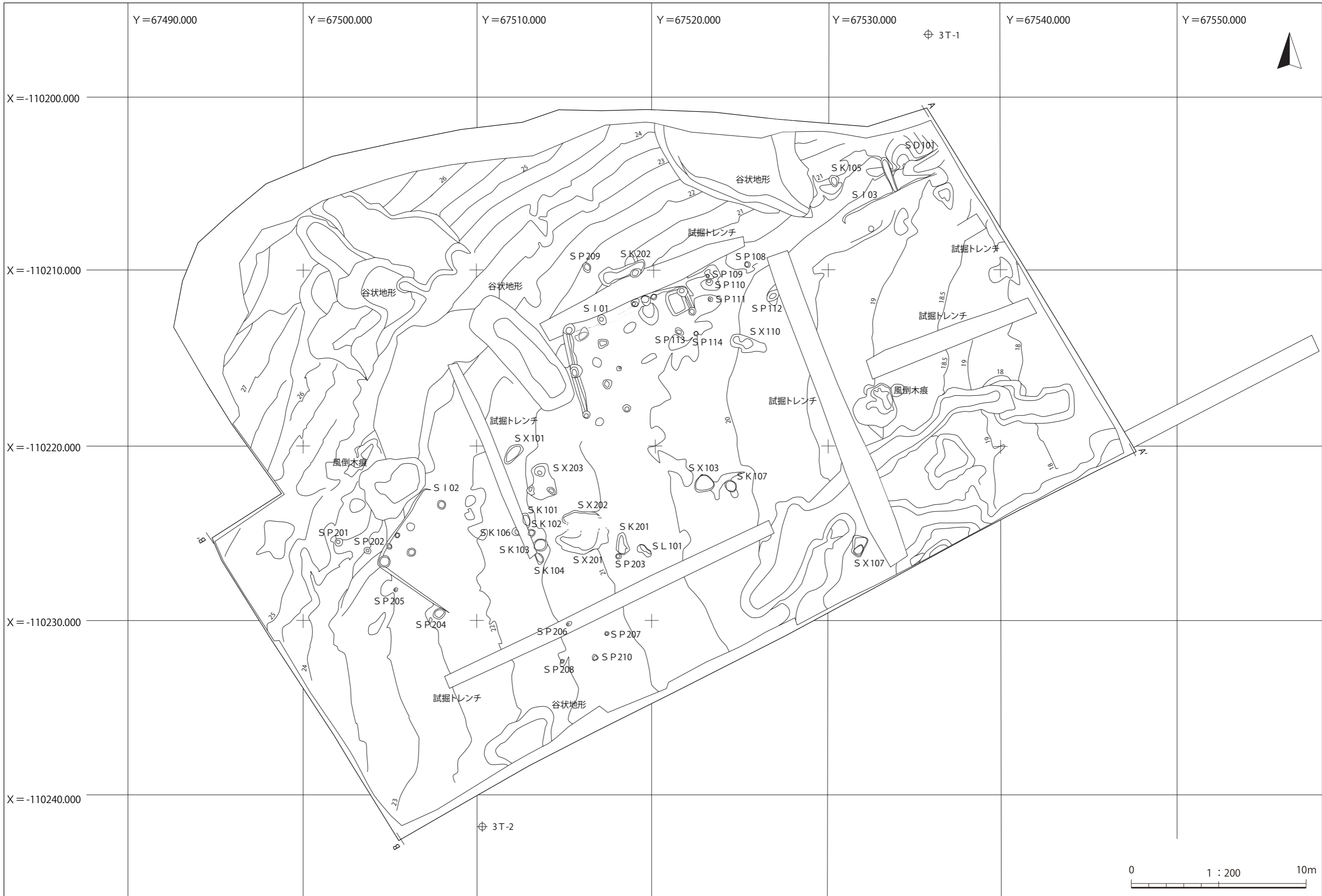
調査区全体図及び遺構平面図については、縮尺 20 分の 1 を基本として、遺構実測支援システム『遺構くん』を使用し、ノートパソコンに記録した。また、調査区断面図及び遺構断面図については、縮尺 20 分の 1 を基本として、手書きによる実測図作成を行った。

遺構全景・断面及び遺物出土状況等の写真撮影については、デジタル一眼レフカメラと 35mm フィルム一眼レフカメラ(モノクロ・リバーサル)、コンパクトデジタルカメラによる撮影を行った。また、第 1 遺構面の全景写真撮影については、脚立を使用し、地上からデジタル一眼レフカメラ及び 35mm フィルム一眼レフカメラ、コンパクトデジタルカメラによる撮影を行った。さらに、第 2 面の全景写真撮影については、ラジコンヘリを使用した航空写真撮影を、株式会社タックエンジニアリングに委託した。航空写真撮影後に、脚立を使用し、地上からの撮影も行った。



1 : 2,500 災害復興計画基図 X-NF 67-3・66-4・国土地理院より作成

第4図 調査区位置図



第5図 調査区平面図



第6図 調査区第1遺構面平面図

IV 調査成果

1. 第1遺構面～平安時代の遺構面～

現況地表面の約0.5～1mで、平安時代の遺構面を検出した(第6図、写真図版5・6)。

調査区の北側においては、地山面(にぶい黄褐色礫混じり粘質土:10YR5/3)で遺構を検出したが、調査区南側では、整地層(黄褐色礫混じり粘質土層:10YR5/6)の上面で確認した。かなり大規模に斜面地を造成し、平坦な地形を作るために、削り取った地山の土を盛って、整地したと考えられる。

整地された遺構面の約20cm上の地層において、灰白色火山灰を検出した。火山灰の成分等进行分析した結果、10世紀初め頃に、十和田湖の火山が噴火した際に、降り注いだ火山灰(十和田a火山灰)であることが判明した。

この年代については、『扶桑略記』という文献史料の記述等に基づいて、延喜15年(西暦915年)とする説が最も有力である。

十和田a火山灰は、調査区の中央付近で確認され、南北6.0m、東西6.0mの範囲に広がっており、2～5cmの厚さで堆積していた。検出状況から見て、直接、検出面に降灰したものではなく、二次堆積である可能性が高い(写真図版9)。

十和田湖から、愛宕下Ⅱ遺跡までは、直線距離で約170km離れている。なお、十和田a火山灰は、南方約300kmまで広がっており、東北地方一円に降り注いでいたことが確認されている。

平安時代の遺構面(第1遺構面)の時期は、この十和田a火山灰よりも、下層になるため、少し古い時代の9世紀末～10世紀初頭と考えられる。

この第1遺構面で検出した遺構は、竪穴住居3棟、焼土坑1基、土坑7基、溝状遺構1か所、柱穴・ピット7基である。

竪穴住居(SI01・SI02・SI03)は、いずれも丘陵の南斜面(標高約20～23m)に作られている。平面形は3棟とも方形で、南側は失われていた。

(1) SI01(第9図、第10図、写真図版6・7)

SI01は、調査区のほぼ中央で検出した方形の竪穴住居である。東西7.5m×南北5.5m以上、深さ10～50cmで、一辺の規模が7.5m程度であると推定される。周溝内において柱穴を検出したが、床面で確認されなかったため、支柱穴に関しては、不明である。周溝内に柱を構築する大壁造りの住居である可能性も考えられるが、現時点で確証はない。

北壁の中央よりやや東側で、石組みのカマドを検出した。「カマド」とは、土や石等で造った煮炊きをするための施設で、通常は、竪穴住居の壁面に接して作られていることが多く、住居の内側には、火を焚いた場所である「焚口」が見られ、住居の外側には、煙を排出するための「煙道」や「煙出し」が作られる。カマドから北側に、煙道が1.5m以上伸びており、煙出し部分は、赤く焼けていた。

SI01では、床面付近や覆土の中から多くの土器や石器等が出土している。中でも、特筆すべきものとして、住居内の床面付近から、底部外面にヘラで文字を刻んだ土器「刻書土器」が1

点出土している。刻まれた文字については、「正月女?(むつきめ?)」である可能性が考えられる。「正月女」だとすれば、人名である可能性が高いが、該当する人名については、現在のところ明らかにできていない。器種としては、口縁部を欠いているが、椀状を呈する土師器の坏であると考えられる。

その他、土師器坏・甕・耳皿・須恵器甕・土錘等が出土している。

また、カマド周辺で、土製支脚が1点出土している。この土製支脚は、円筒状で中空の形状をしており、直径約10cmで、上部は欠けているが、現存高で約18cmである。土製支脚については、後述の総括のところで、詳細に検討することとする。

(2) S I 02(第11図、写真図版7)

S I 02は、調査区東側で検出した方形の竪穴住居である。S I 01の南西約10mに位置している。東西5.3m以上×南北5.1m以上、深さ5~30cmで、一辺の規模が6m程度であると推定される。北壁の中央付近で、カマドを検出したが、焚口付近に焼土がわずかに残っていた程度で、袖部や煙道部分は、後世のかく乱によって削られていた。南側は削平されているため、支柱穴は、北側の2本しか検出されなかったが、4本であると推定される。

(3) S I 03(第12図、写真図版8)

S I 03は、調査区西側で検出した方形の竪穴住居である。S I 01の東北東約9.7mに位置している。東西6m以上×南北1.7m以上、深さ5~50cmで、一辺の規模が7m程度であると推定される。北壁の中央付近で、カマドを検出した。焚口から北側に約2.1m、幅約25~40cmの煙道が伸びている。支柱穴は4本と推定される。

出土遺物より、いずれの竪穴住居も、9世紀末~10世紀初頭頃に作られた可能性が高いと考えられる。

S I 01~S I 03の3棟の竪穴住居を比較すると、規模としては、S I 01とS I 03が、一辺約7mでほぼ同規模であるが、S I 02は、一辺6m程度で、やや小型の竪穴住居になる可能性が高い。

S I 02は、煙道部分が削平されているため、全容は不明であるが、3棟それぞれに、カマドの構造が異なっている。S I 01は、焚口部分が石組みの構造になっている。S I 03は、煙道部分が長く伸びている。S I 02については、煙道部分はあまり長く伸びないと推測される。

(4) S L 101(第12図、写真図版8)

S L 101は、調査区の中央部南側において検出した焼土坑である。南北80cm、東西50cm、深さ25cm(掘方30cm)で、南側が著しく焼けて赤変しており、埋土内から、炭や鉄滓が出土している。鉄滓は第1遺構面や遺物包含層内からも多く出土し(第34・35図、写真図版22)、また遺物包含層から「ふいご」の羽口も数点出土していること(第30図193・194、写真図版20・193~195)から、集落内において、小規模な小鍛冶が行われていたと考えられる。

「ふいご」とは、鉄やガラスを作る時に、炉の中に空気を送りこむための装置のことである。また、炉に差し込む送風管の先の部分を「羽口」と呼んでいる。つまり、ふいごの羽口と鉄滓が見つかることから、小鍛冶が行われたことがわかる。

2. 縄文時代から古墳時代の遺構と遺物

第1遺構面から、地山面まで掘り下げて、精査を行ったが、自然の落ち込みが確認されただけで、人為的な遺構が検出されなかった(写真図版10)。また、第1遺構面検出中、及び第2面までの掘り下げの途中で、縄文時代から古墳時代の土器・石器等が出土している。

出土遺物の中で注目されるものとして、続縄文時代の土器が1点出土している(第23図30、写真図版16・30)。続縄文土器については、後述の総括のところで、詳細に検討することとする。

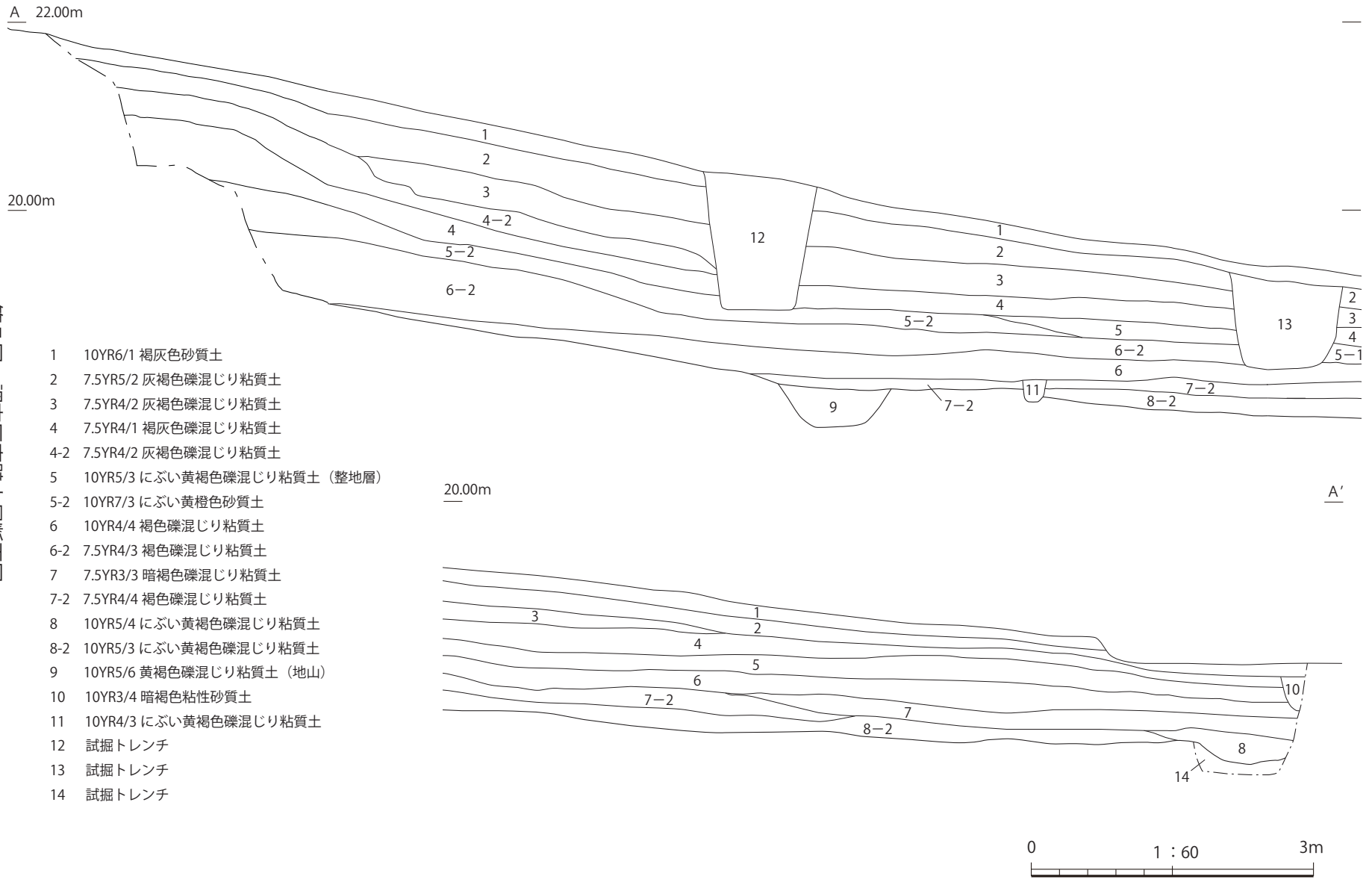
その他の出土遺物としては、縄文土器・弥生土器・石器等がある。

縄文土器は、いずれも深鉢の破片であるが、胎土に植物繊維を含み、外面に羽状縄文やループ文を施文したもの(第20図4、写真図版14・4)や外面にS字状連鎖沈文を施文したもの(第22図16・20、写真図版15・16、写真図版16・20)等が見られる。

弥生土器は、弥生時代終末～古墳時代初頭頃と考えられる深鉢(第23図31、写真図版17・31)が出土している。この深鉢(甕と呼称すべきかもしれないが)は、口縁部が、ゆるやかに外反し、外面には、沈線及び交互刺突文を施文している。体部上半は、横位方向の縄文を施文しており、体部下半は、縦位方向の縄文を施文している。いわゆる「赤穴式」に比定されると考えられる。今回掲載しなかったが、別個体と考えられる交互刺突文を施文した口縁部の破片を数点確認している。

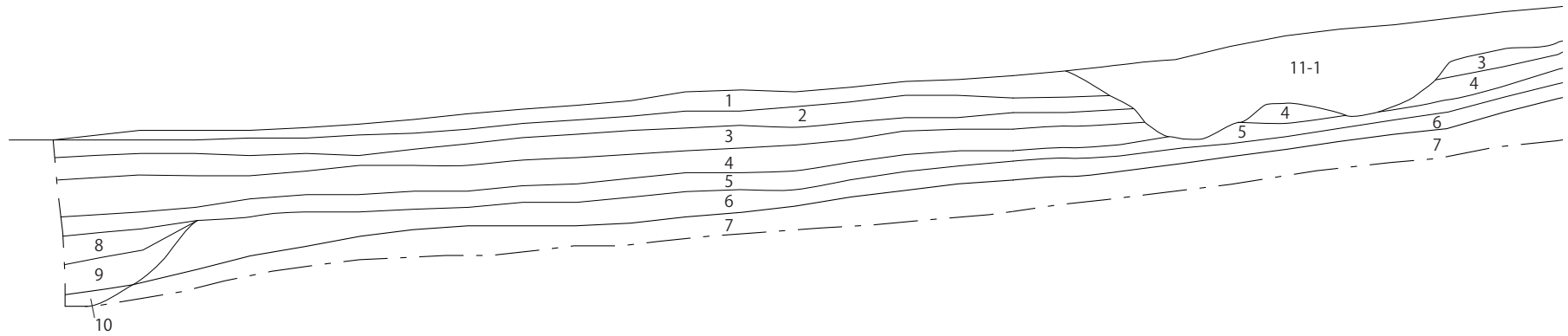
石器としては、石鏃、石匙、スクレーパー、環状石斧、磨石、凹石、石皿、剥片等がある。石鏃の中に、アメリカ式石鏃が1点出土している(第31図241、写真図版20・241)。このアメリカ式石鏃は、全長が1.5cmと小型で、チャート製と考えられる。基部は、逆T字状を呈しているが、抉り部分の屈曲は、緩やかで、切れ込みもやや鈍く、シャープ感に欠ける。

第7図 調査区東壁土層断面図



- 1 10YR6/1 褐灰色砂質土
- 2 7.5YR5/2 灰褐色礫混じり粘質土
- 3 7.5YR4/2 灰褐色礫混じり粘質土
- 4 7.5YR4/1 褐灰色礫混じり粘質土
- 4-2 7.5YR4/2 灰褐色礫混じり粘質土
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質土 (整地層)
- 5-2 10YR7/3 にぶい黄褐色砂質土
- 6 10YR4/4 褐色礫混じり粘質土
- 6-2 7.5YR4/3 褐色礫混じり粘質土
- 7 7.5YR3/3 暗褐色礫混じり粘質土
- 7-2 7.5YR4/4 褐色礫混じり粘質土
- 8 10YR5/4 にぶい黄褐色礫混じり粘質土
- 8-2 10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質土
- 9 10YR5/6 黄褐色礫混じり粘質土 (地山)
- 10 10YR3/4 暗褐色粘性砂質土
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質土
- 12 試掘トレンチ
- 13 試掘トレンチ
- 14 試掘トレンチ

B 26.00m

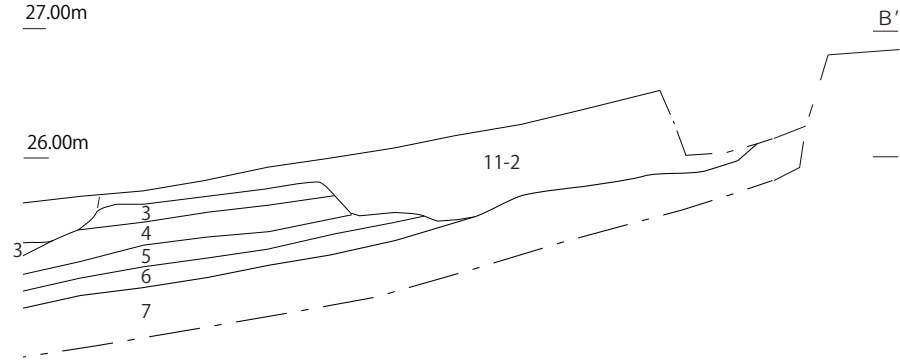


第8図 調査区西壁土層断面図

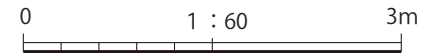
- 1 盛土、攪乱
- 2 10YR6/1 褐灰色表土
- 3 10YR5/1 褐灰色砂質土
- 4 7.5YR6/1 褐灰色砂質土
- 5 7.5YR5/1 褐灰色砂質土
- 6 10YR3/4 暗褐色礫混じり粘質土
- 7 10YR6/3 にぶい黄橙色礫混じり粘質土 (地山)
- 8 5YR1/1 オリーブ黒色角礫混じり砂質土
- 9 2.5Y6/4 にぶい黄色砂礫土 (角礫+粗砂)
- 10 10YR7/4 にぶい黄橙色砂礫土 (角礫+粗砂)
- 11-1 木の根、攪乱
- 11-2 攪乱

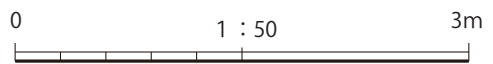
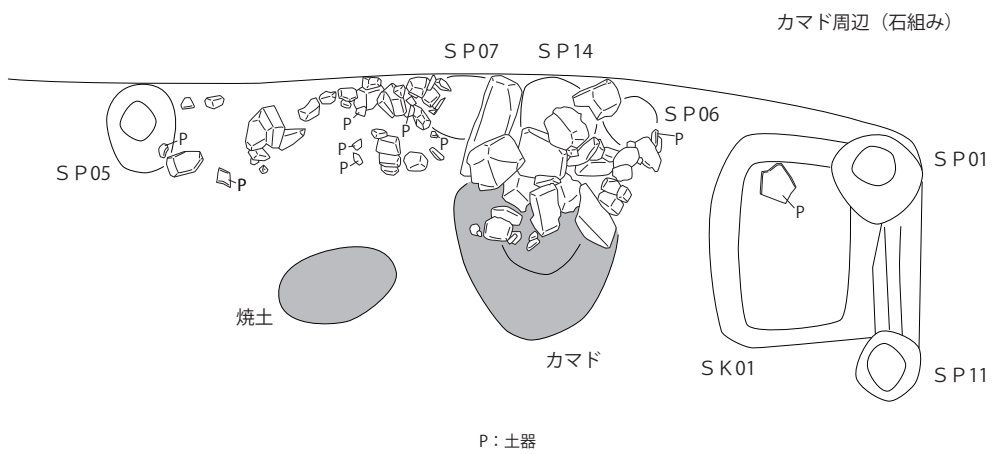
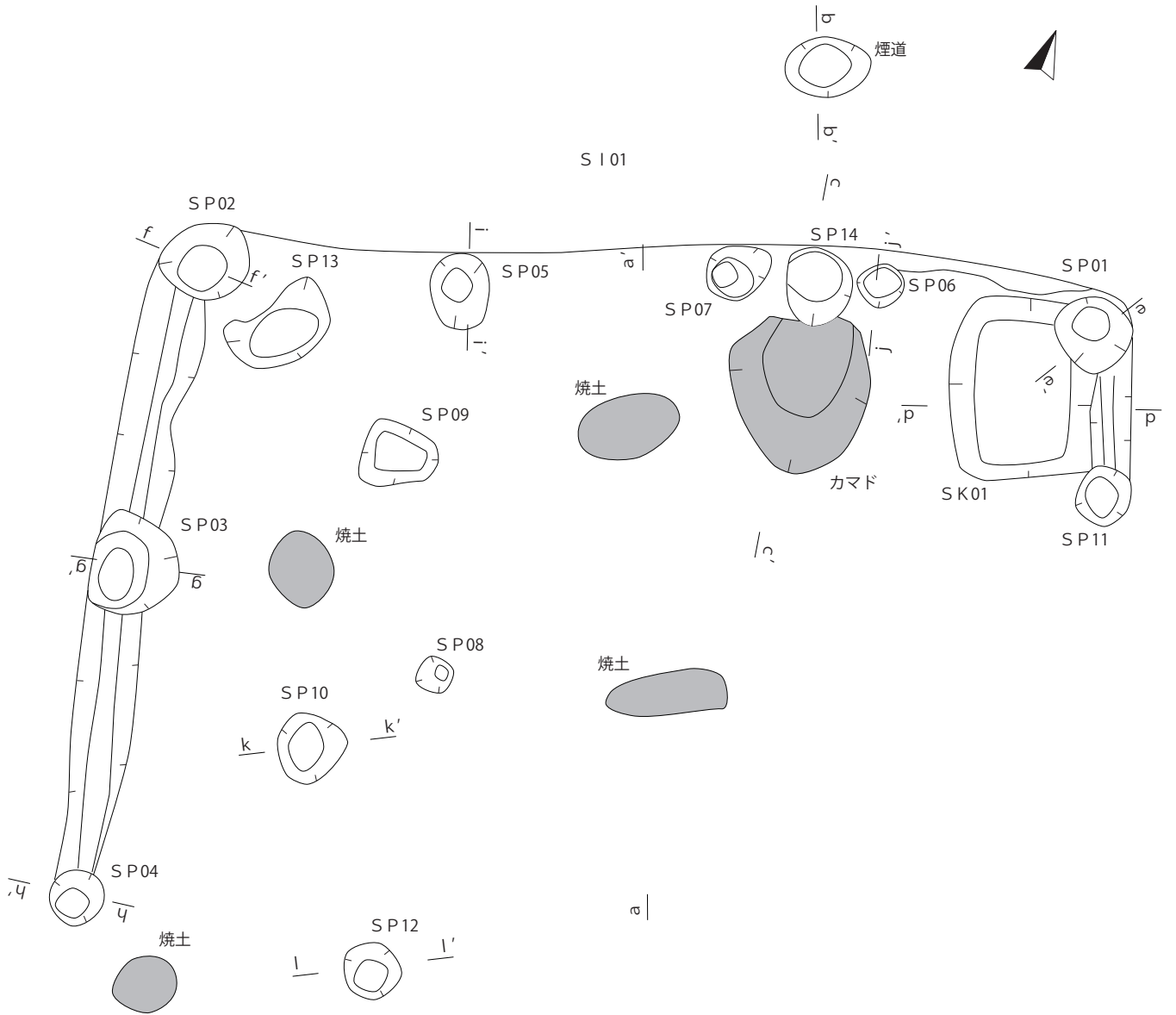
27.00m

26.00m

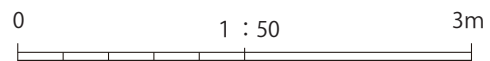
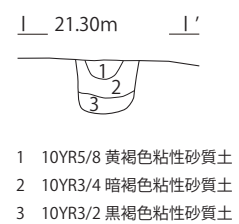
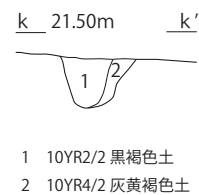
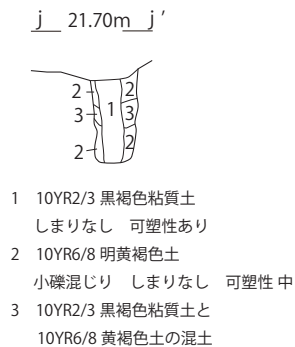
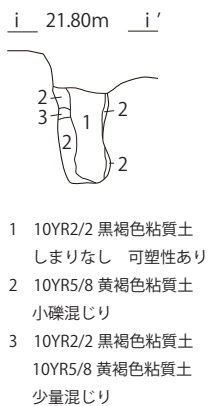
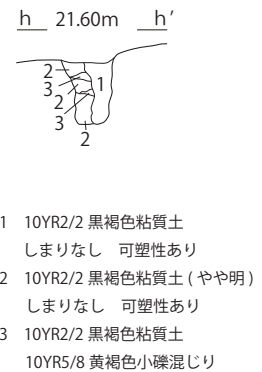
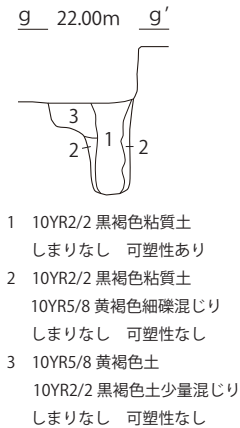
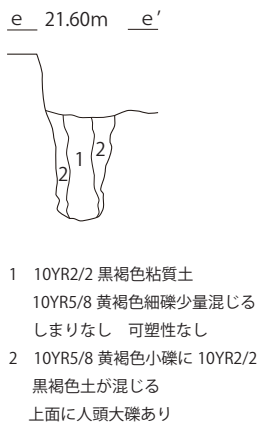
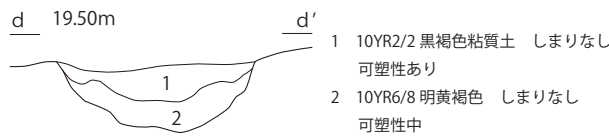
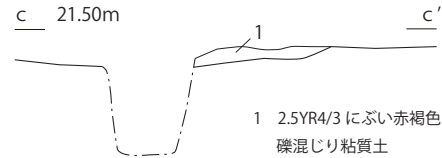
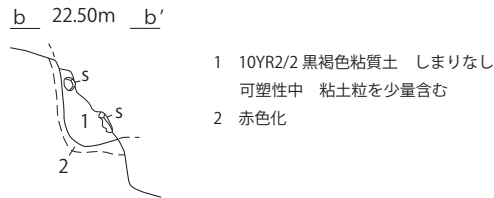
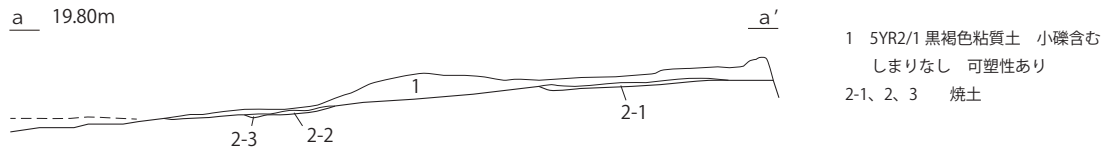


B'

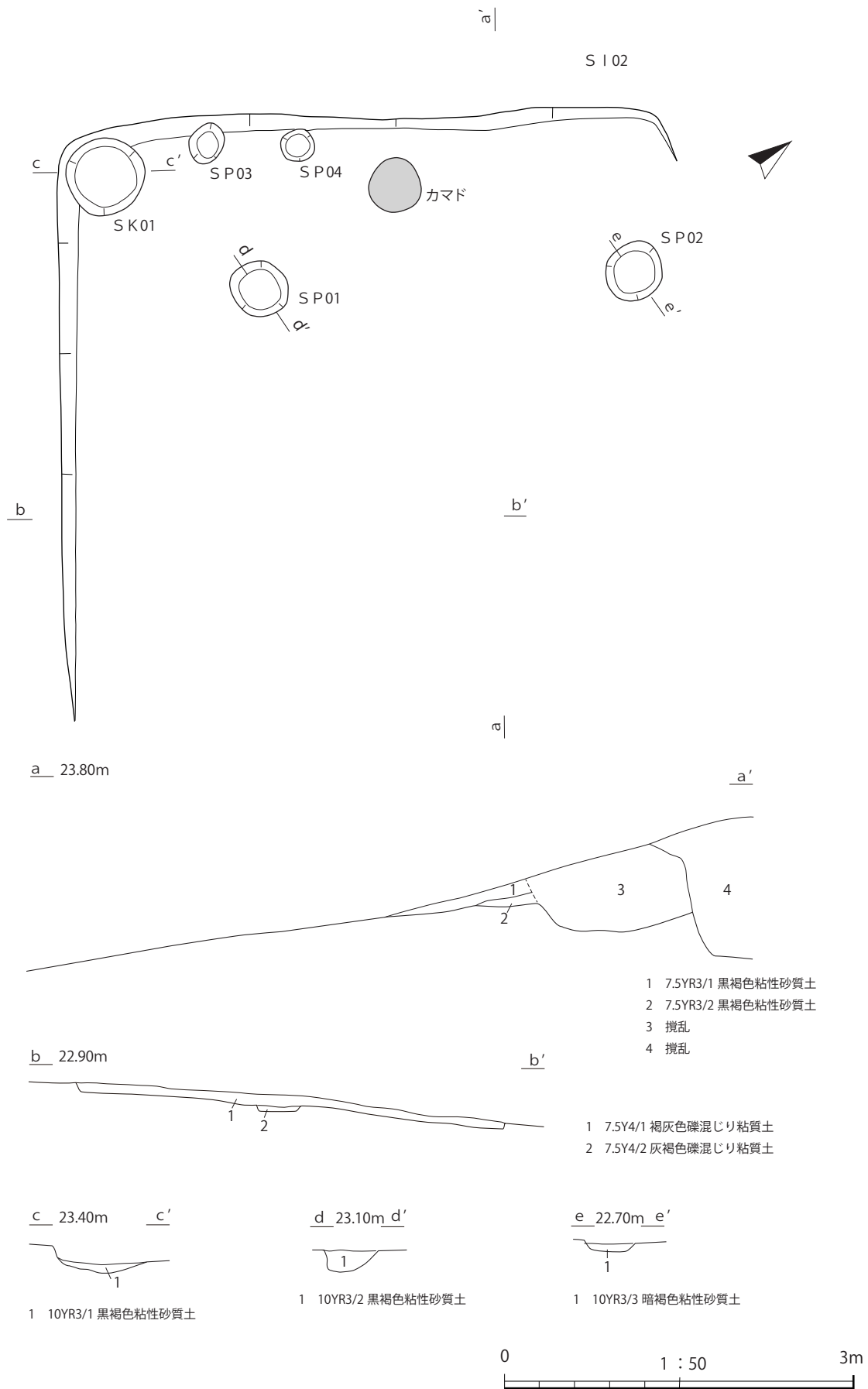




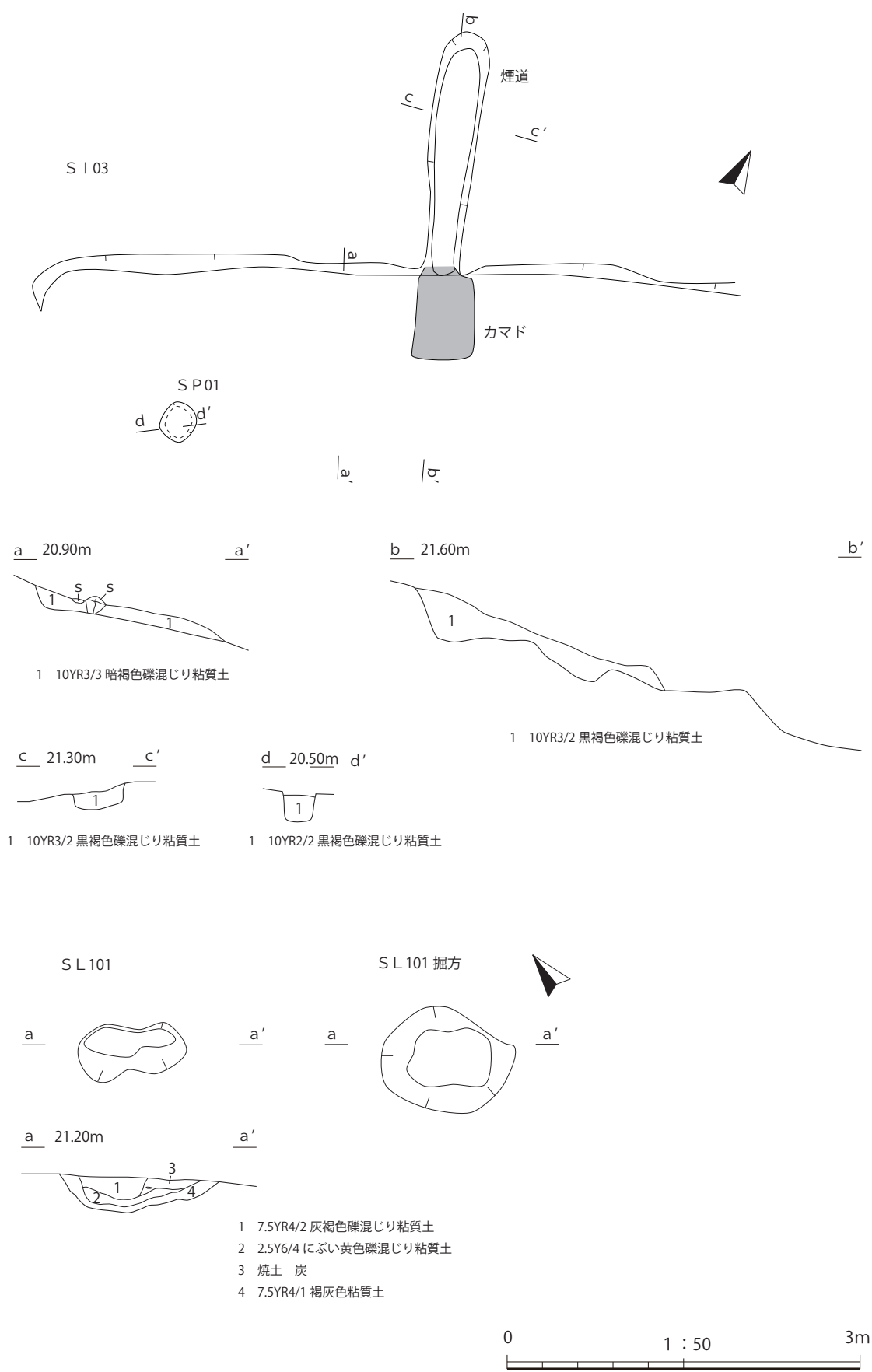
第9図 S101 (1)



第10図 S I 01 (2)



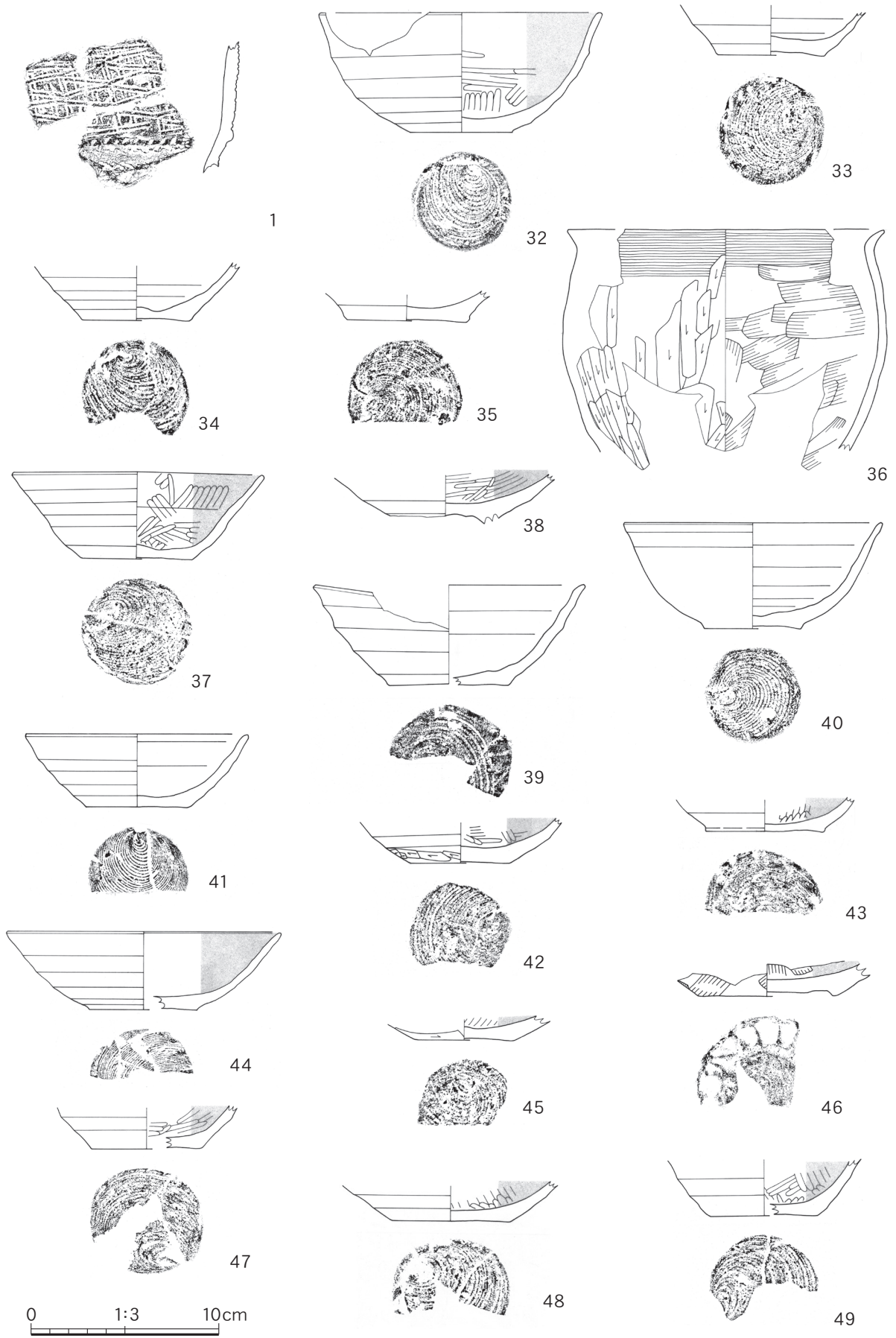
第 11 図 S I 02



第 12 図 S I 03・S L 101

第2表 検出遺構

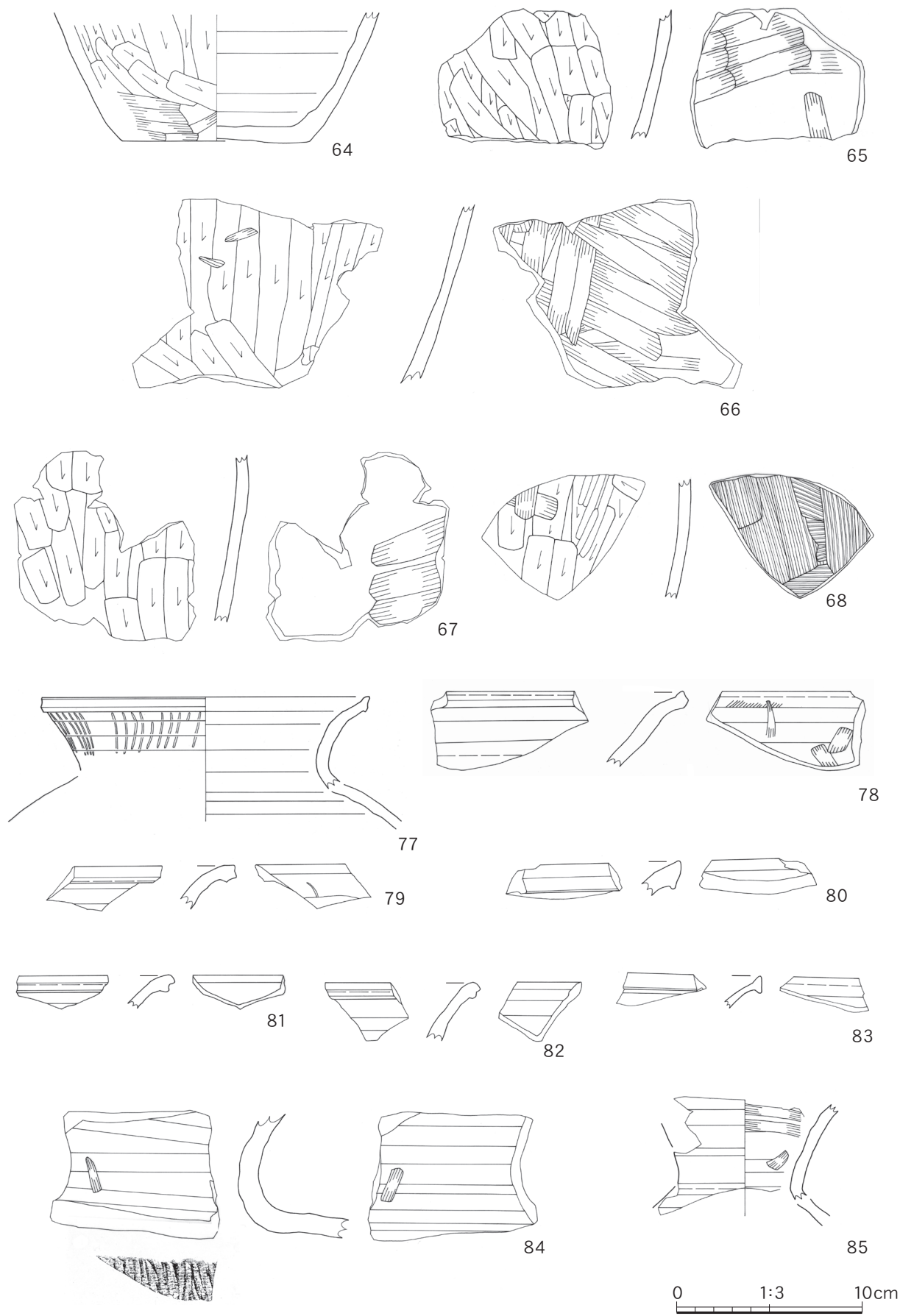
遺構	大きさ (m)	深さ (cm)	土層	形	備考
S I 01 全体	7.50×5.50	50	2層	方形	
カマド	(1.16×1.10)	10	1層	不整楕円形	
煙道	0.44×0.68	56	1~2層	楕円形	煙出し部分
S P 01	0.65×0.60	70	柱痕 (径20)	やや円形	
S P 02	0.70×0.63	72	柱痕 (径17)	やや円形	
S P 03	0.70×0.80	61	柱痕 (径18)	やや円形	
S P 04	0.40×0.42	42	柱痕 (径11)	円形	
S P 05	0.60×0.50	64	柱痕 (径19)	楕円形	
S P 06	0.36×0.38	58	柱痕 (径12)	円形	
S P 07	0.55×0.40	やや深い	—	やや不整楕円形	
S P 08	0.28×0.30	24	1層	楕円形	
S P 09	0.48×0.52	—	—	方形	
S P 10	0.48×0.54	34	やや柱痕 (径16)	やや楕円形	
S P 11	0.45×0.42	—	—	楕円形	
S P 12	0.46×0.45	35	3層	円形	
S P 13	0.82×0.52	—	—	不整楕円形	
S P 14	0.60×0.50	65	—	楕円形	
S K 01	1.10×1.40	27	1層	方形形	
焼土①	0.80×0.50	—	—	楕円形	
焼土②	0.60×0.50	—	—	楕円形	
焼土③	0.95×0.35	—	—	不整長楕円形	
焼土④	0.60×0.40	—	—	楕円形	
S I 02 全体	5.30×5.10	30	2層	方形	
カマド	(0.50×0.45)	—	—	楕円形	
S P 01	0.50×0.46	18	1層	円形	
S P 02	0.48×0.50	6	1層	円形	
S P 03	0.35×0.30	—	—	楕円形	
S P 04	0.30×0.30	—	—	円形	
S K 01	0.67×0.70	10	1層	円形	
S I 03 全体	6.0×1.70	50	1層	方形	
カマド	(0.70×0.50)	—	—	やや楕円形	
煙道	2.10-0.40 (長さ-幅)	22(c-c'), 46(煙出し)	1層	溝状	
S P 01	0.30×0.35	24	1層	ほぼ円形	
S L 101	0.50×0.80	25	3層	不整楕円形	
S L 101掘方	1.16×0.90	30	1層	不整楕円形	
S D 101	2.45-1.10 (長さ-幅)	6~10	1層	—	
S K 101	0.90×0.35	24	1層	楕円形	
S K 102	0.50×0.40	16	1層	楕円形	
S K 103	0.72×0.80	14	1層	やや楕円形	
S K 104	0.40×0.70	8	1層	楕円形	
S K 105	0.70×0.58	9	1層	やや楕円形	
S K 106	0.50×0.35	—	—	ほぼ楕円形	
S K 107	0.70×0.64	14	1層	楕円形	
S K 201	1.25×0.8	12	1層	不整楕円形	
S K 202	0.75 (一部1.0) ×2.76	8	1層	不整楕円形	
S P 108	0.37×0.34	26	1層	楕円形	
S P 109	0.20×0.20	9	1層	円形	
S P 110	0.40×0.40	42	1層	円形	
S P 111	0.30×0.25	24	1層	楕円形	
S P 112	0.85×0.55	—	—	やや不整楕円形	
S P 113	0.55×0.35	—	—	やや不整楕円形	
S P 114	0.26×0.28	22	1層	ほぼ円形	
S P 201	0.44×0.42	22	1層	ほぼ円形	
S P 202	0.40×0.38	16	1層	楕円形	
S P 203	0.30×0.30	10	1層	円形	
S P 204	0.70×0.60	14	1層	楕円形	
S P 205	0.25×0.22	12	1層	ほぼ円形	
S P 206	0.32×0.25	14	1層	楕円形	
S P 207	0.25×0.25	12	1層	円形	
S P 208	0.25×0.20	14	1層	やや楕円形	
S P 209	0.60×0.45	28	1層	楕円形	
S P 210	0.32×0.32	18	1層	不整円形	
S P 211	0.1×0.2 (長さ-幅)	—	—	半円形	
S X 101	1.36×0.70	15	2層	やや不整楕円形	
S X 103	1.06×1.10	やや浅い	—	不整円形	
S X 107	1.16×0.90	16	2層	長方形	
S X 110	2.15×0.94	44	1層	不整長楕円形	
S X 201	3.00×1.30	39	1層	不整楕円形	
S X 202	0.40×2.15	10	1層	不整楕円形	
S X 203	2.00×1.70	30	1層	不整楕円形	



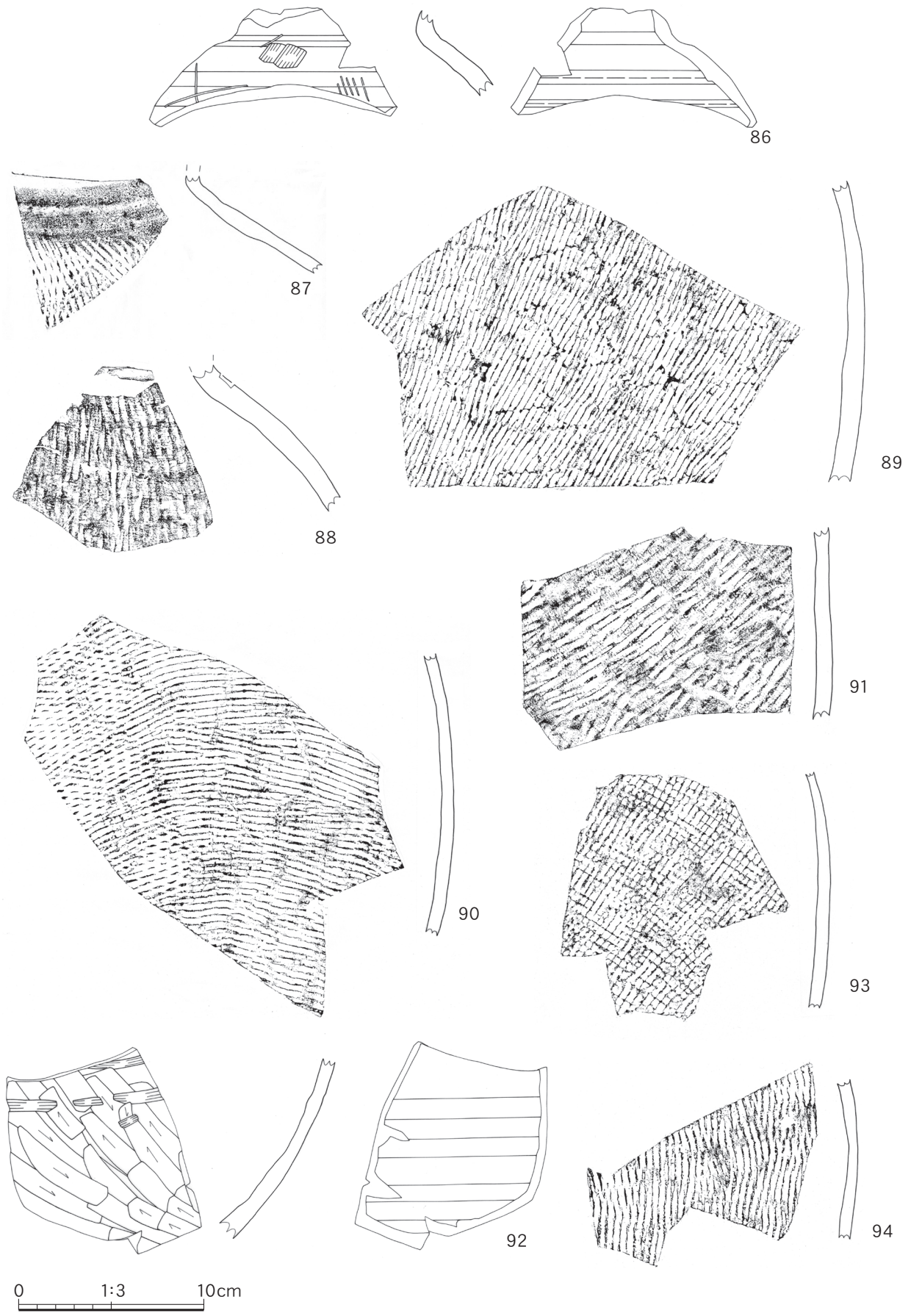
第13图 S I 01 出土遺物 (1)



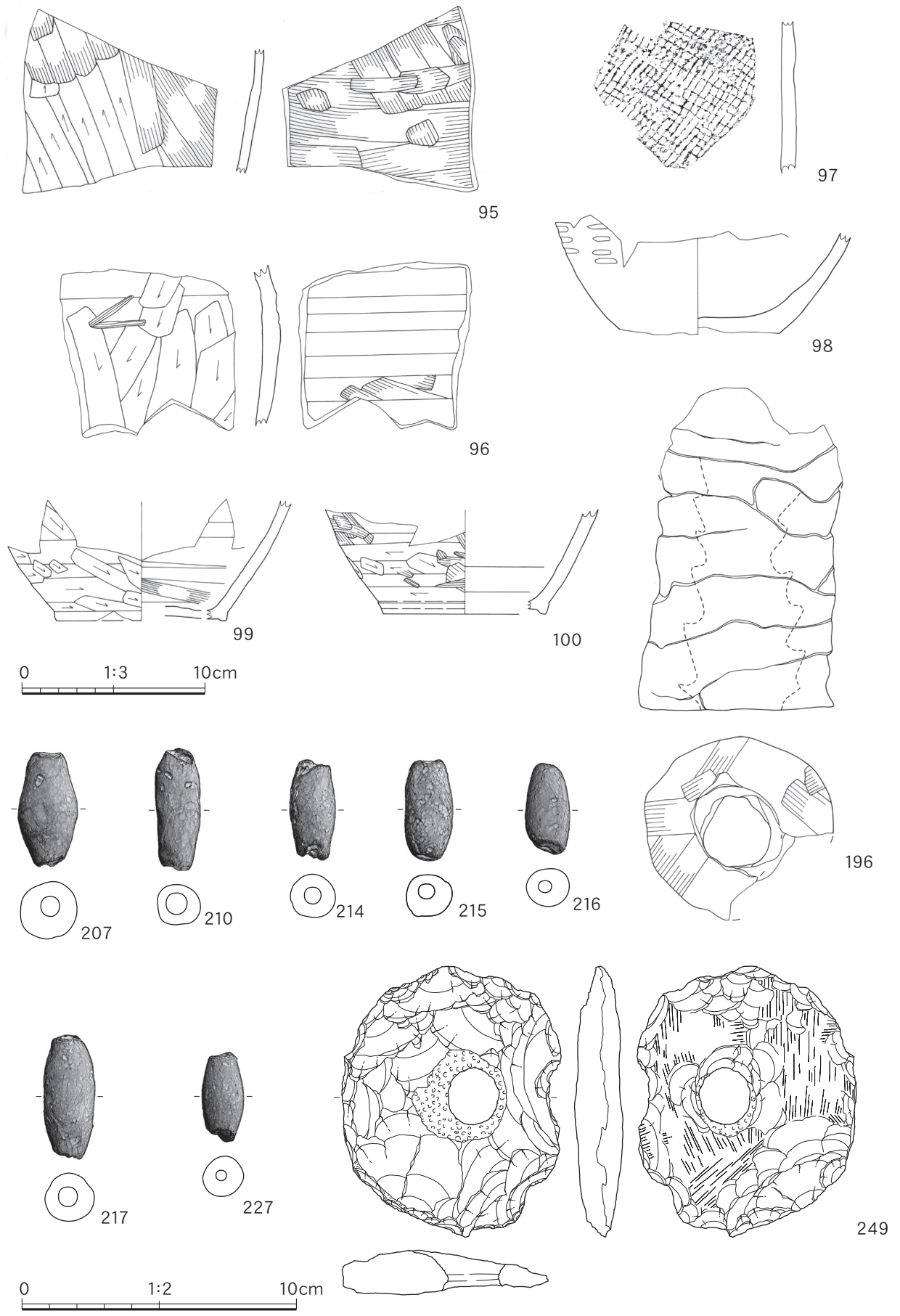
第14图 S I 01 出土遺物 (2)



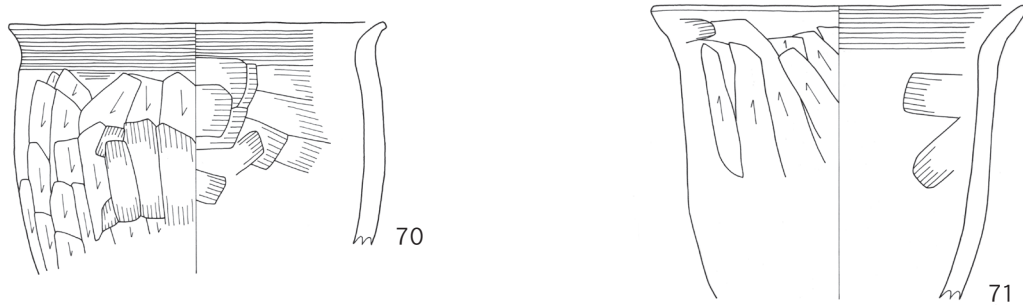
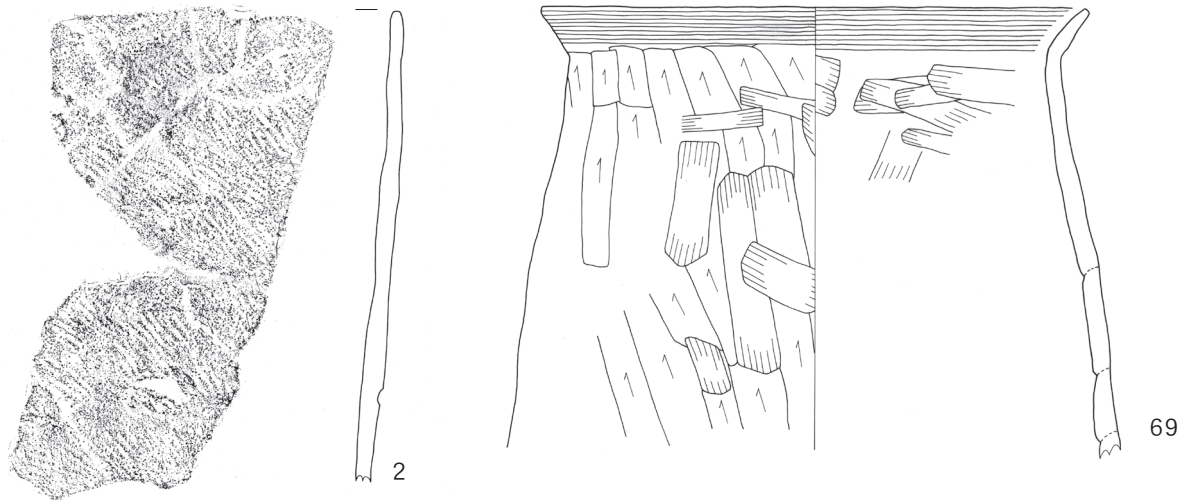
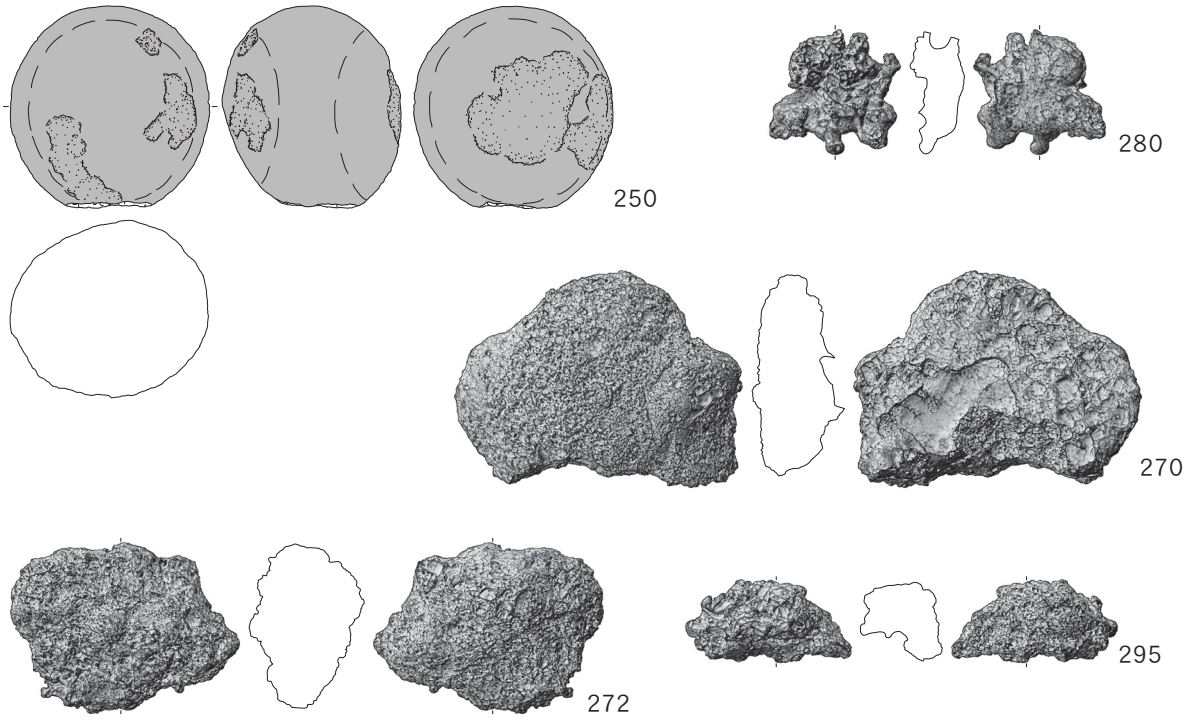
第15圖 S I 01 出土遺物 (3)



第16圖 S I 01 出土遺物 (4)



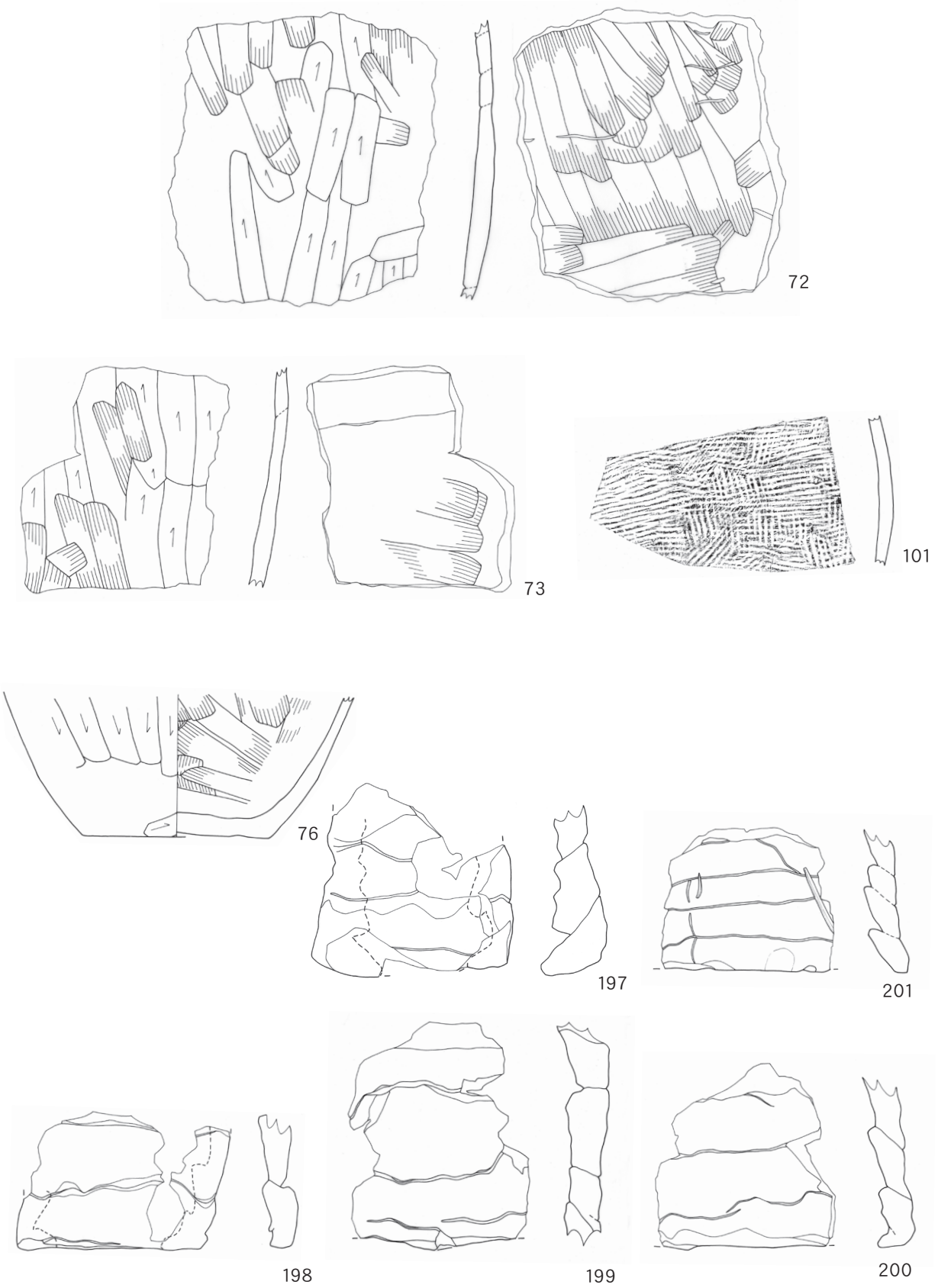
第17圖 S I 01 出土遺物 (5)



0 1:3 10cm 250:SI01 2. 69. 70. 71:SI03

0 1:4 20cm 270. 272. 280. 295:SI01

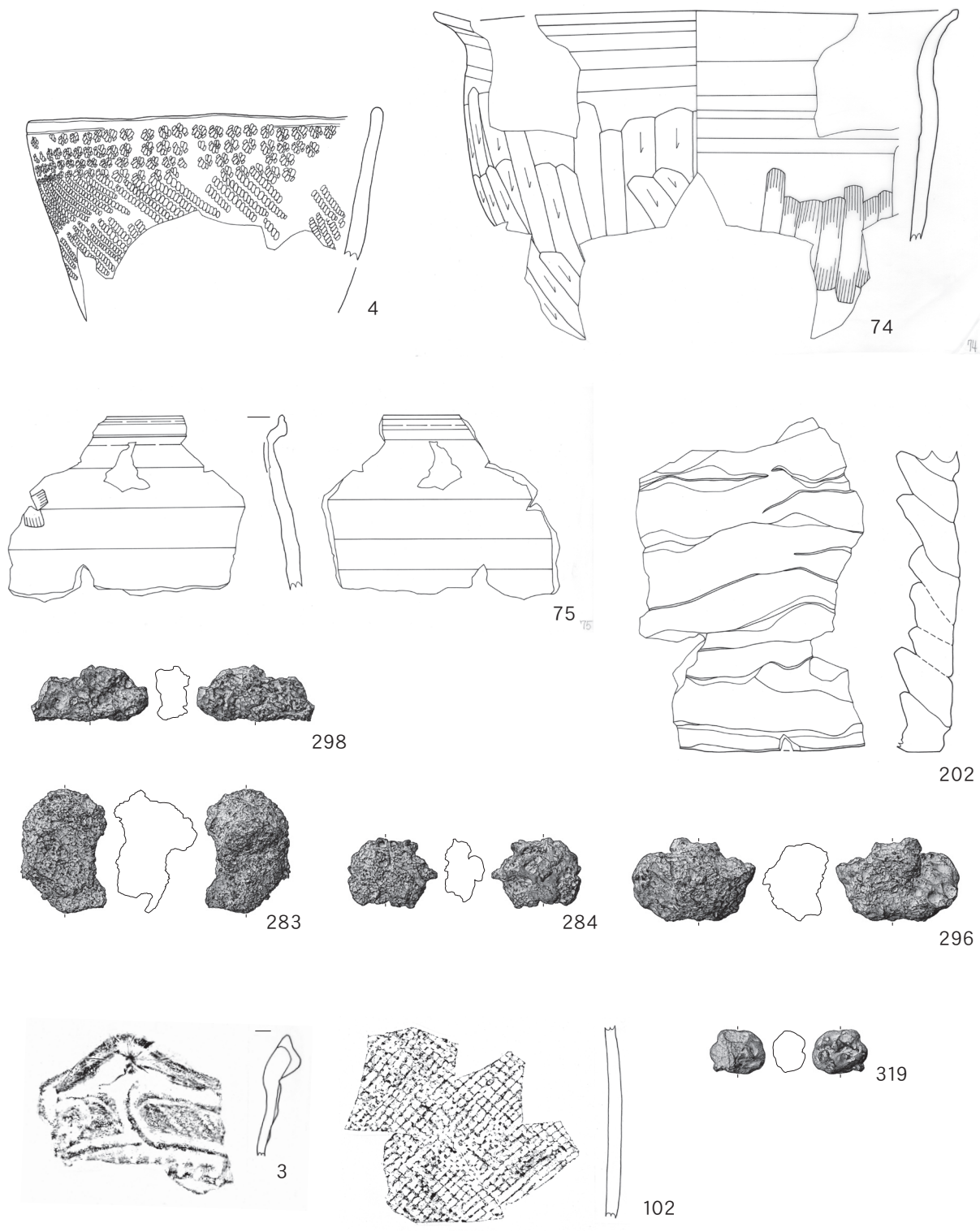
第 18 図 S I 01 ・ S I 03 出土遺物



72. 73:SI03
 101:SI02
 76. 197~201:SK107

0 1:3 10cm

第19圖 SI 02・SI 03・SK 107 出土遺物

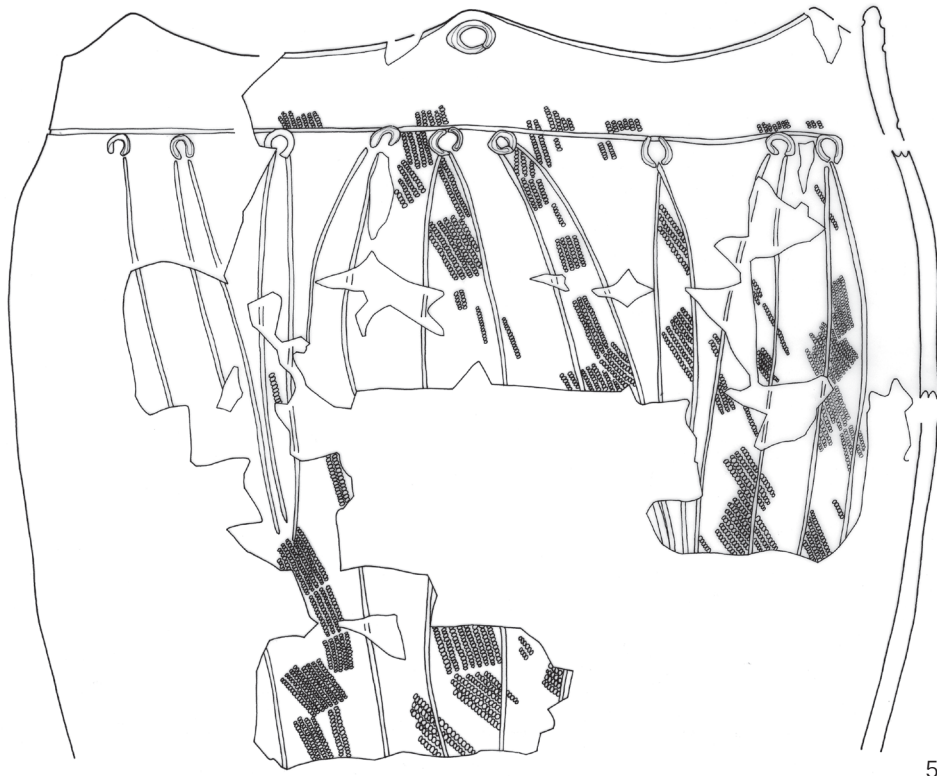


4. 74. 75. 202. 298: SX103
 283. 284. 296: SX102
 3: SX201
 102. 319: SP108

3. 4. 74. 75. 102. 202 0 1:3 10cm

283. 284. 296. 298. 319 0 1:4 20cm

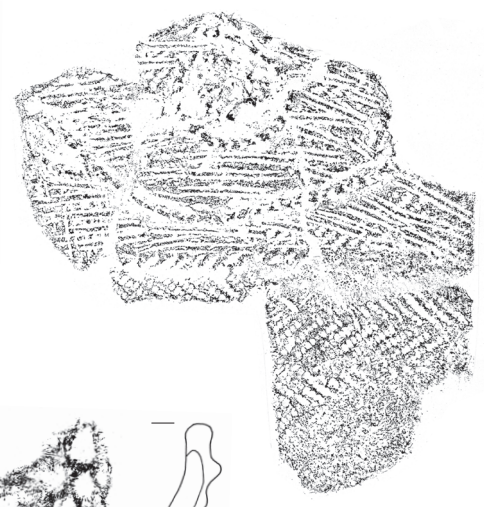
第 20 図 SX 102・SX 103・SX 201・SP 108 出土遺物



5



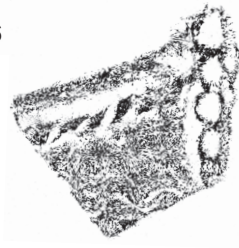
6



7



8



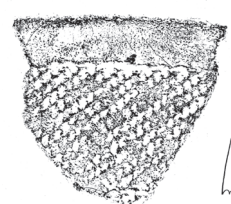
9



10



11

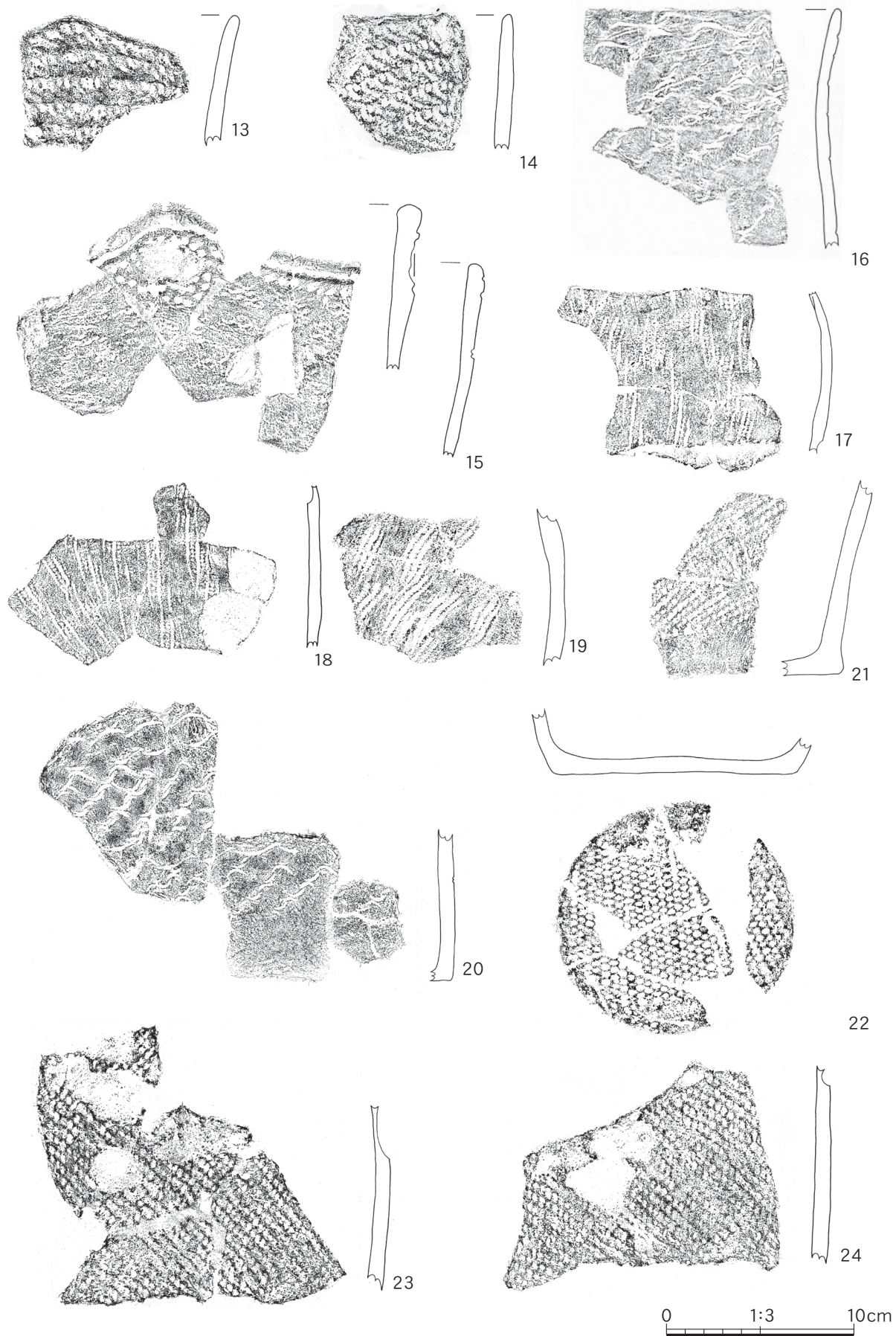


12

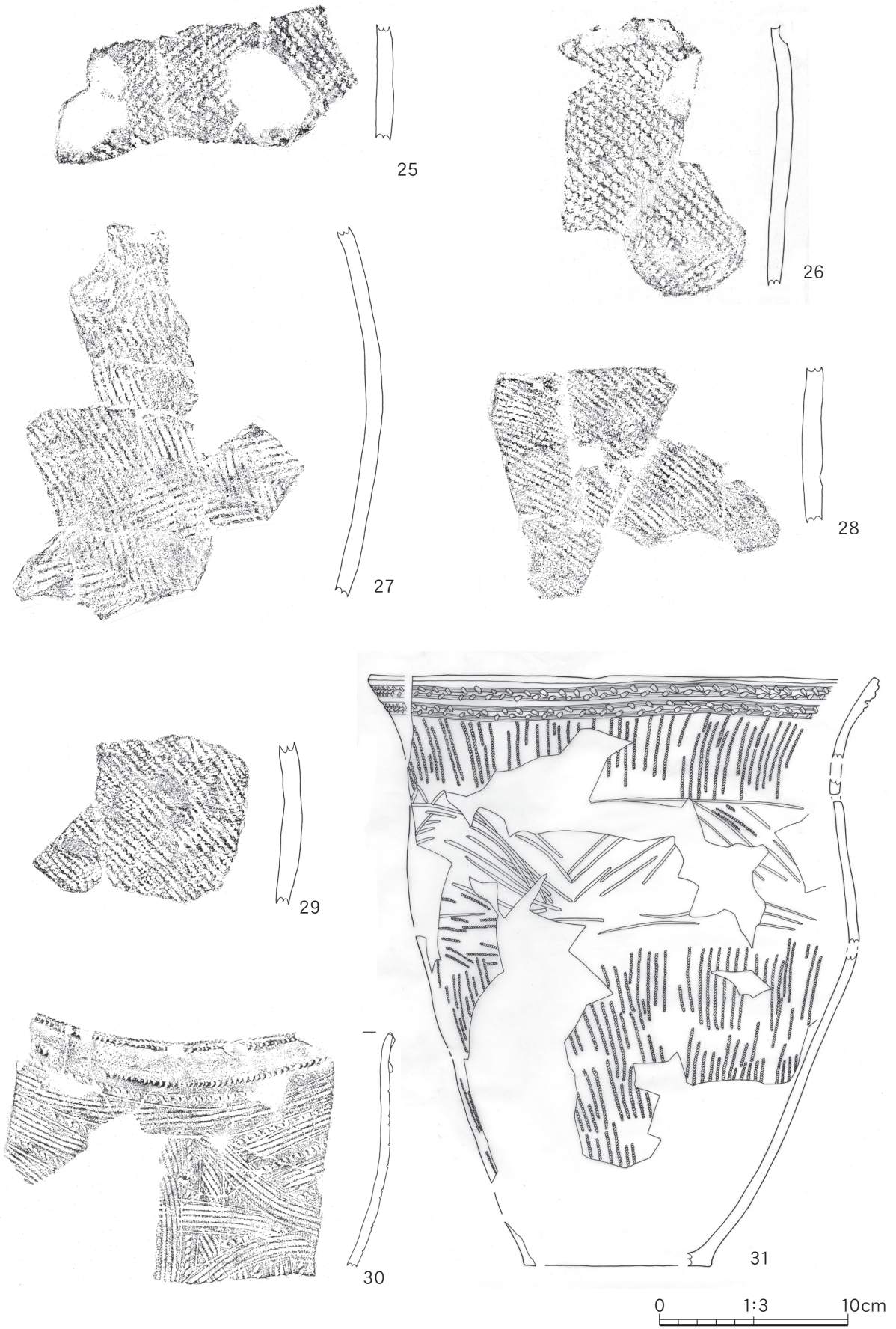
0 1:4 20cm

0 1:3 10cm

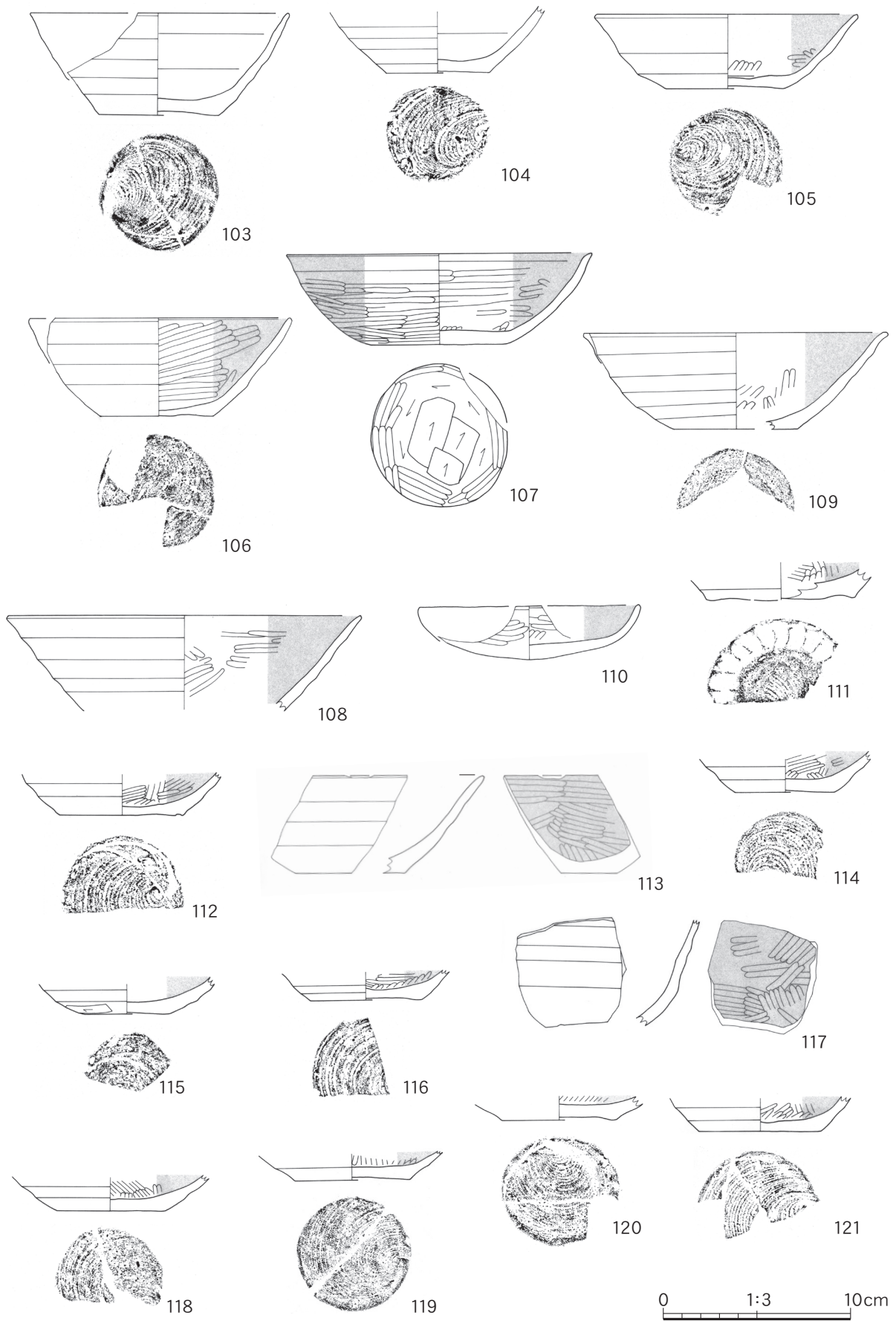
第 21 図 遺構外出土遺物 (1)



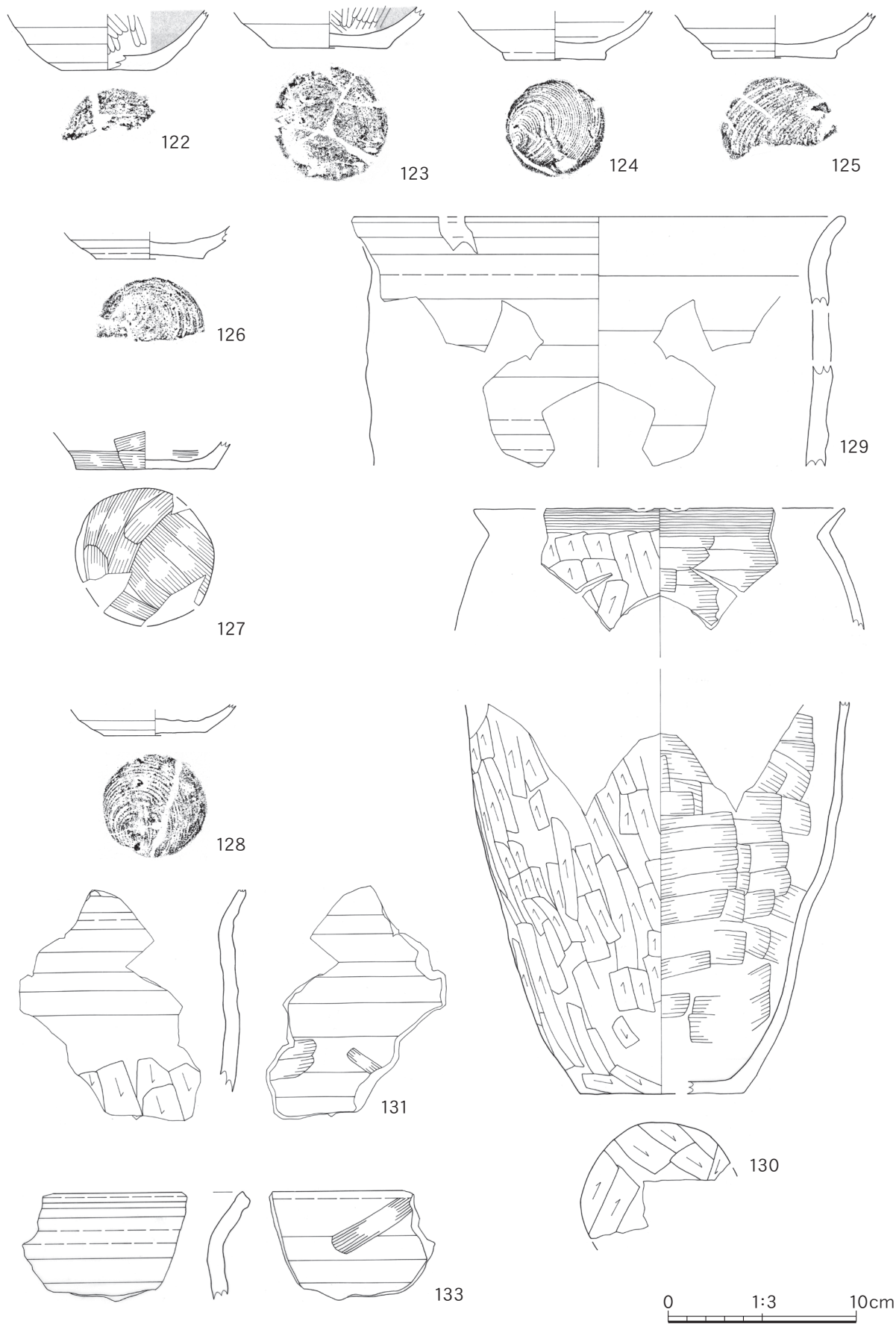
第 22 図 遺構外出土遺物 (2)



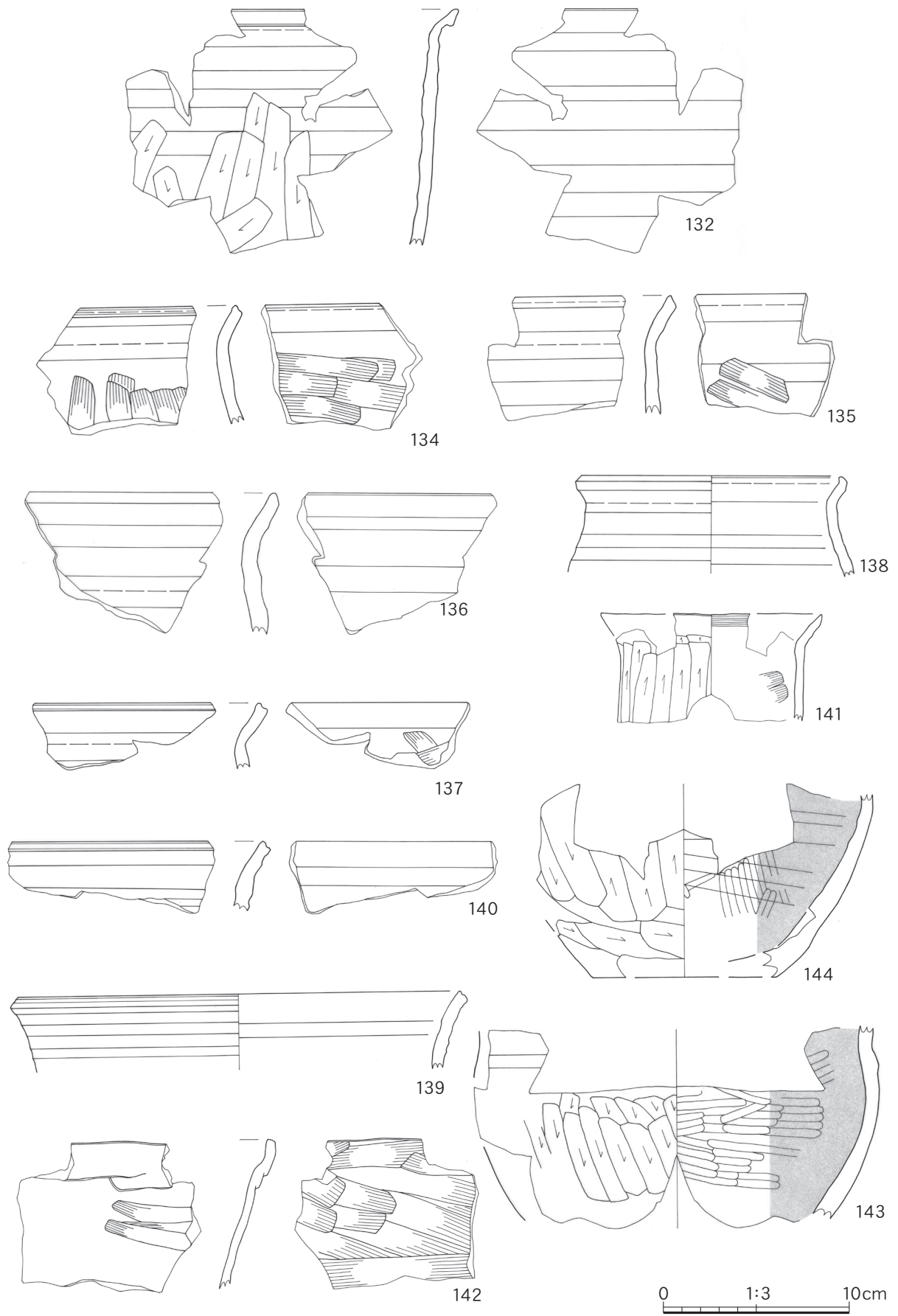
第 23 図 遺構外出土遺物 (3)



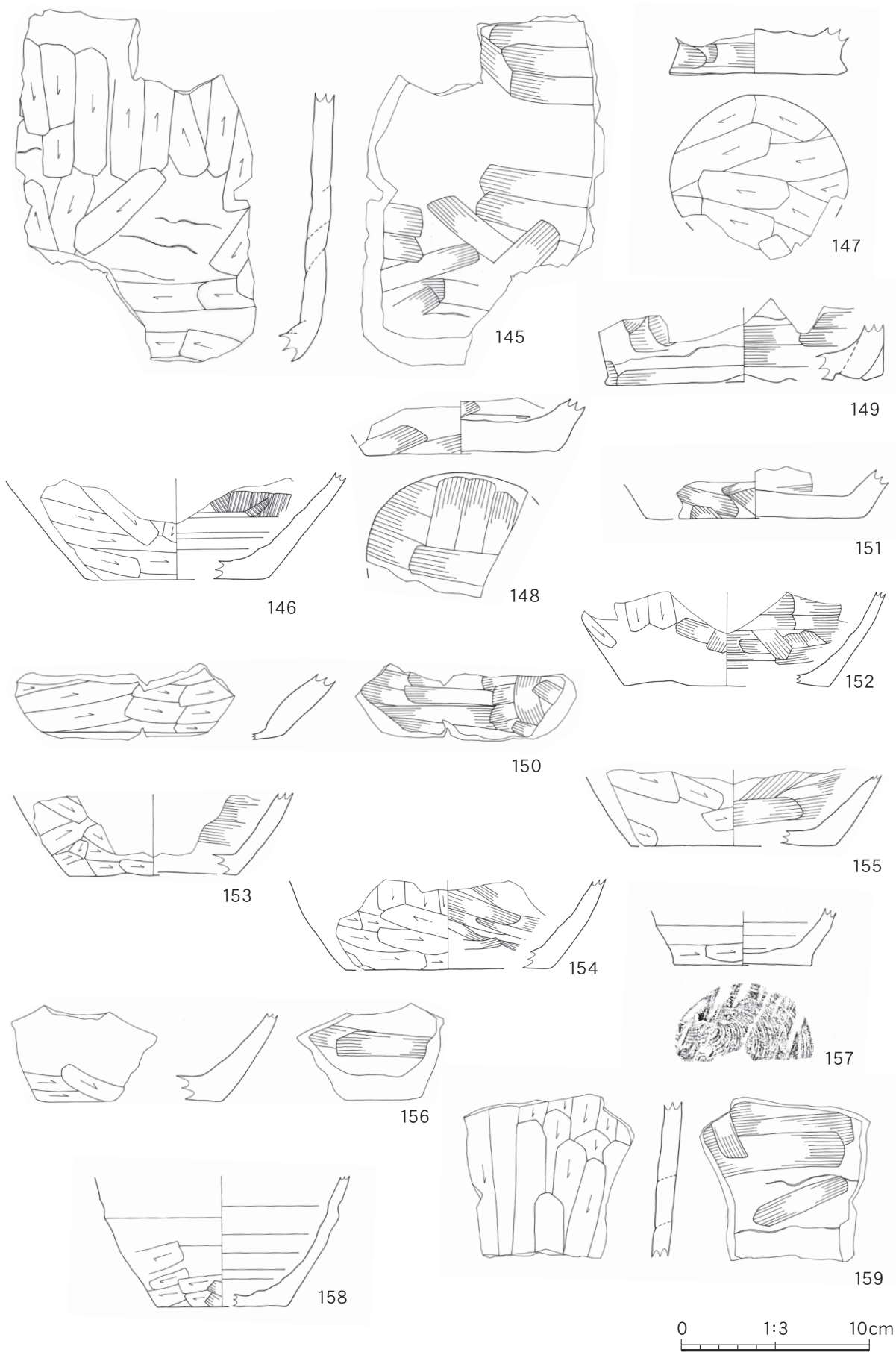
第 24 図 遺構外出土遺物 (4)



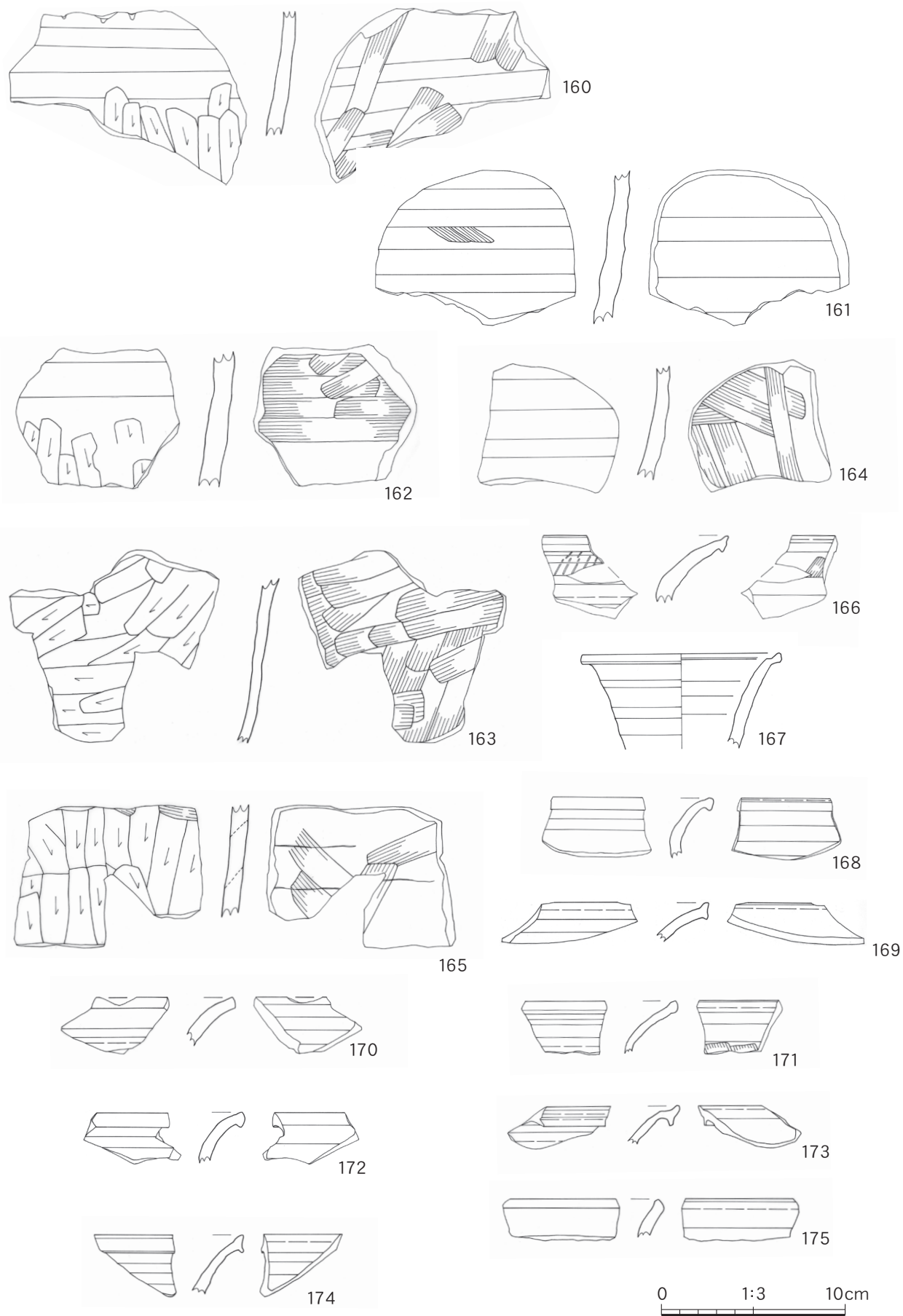
第 25 図 遺構外出土遺物 (5)



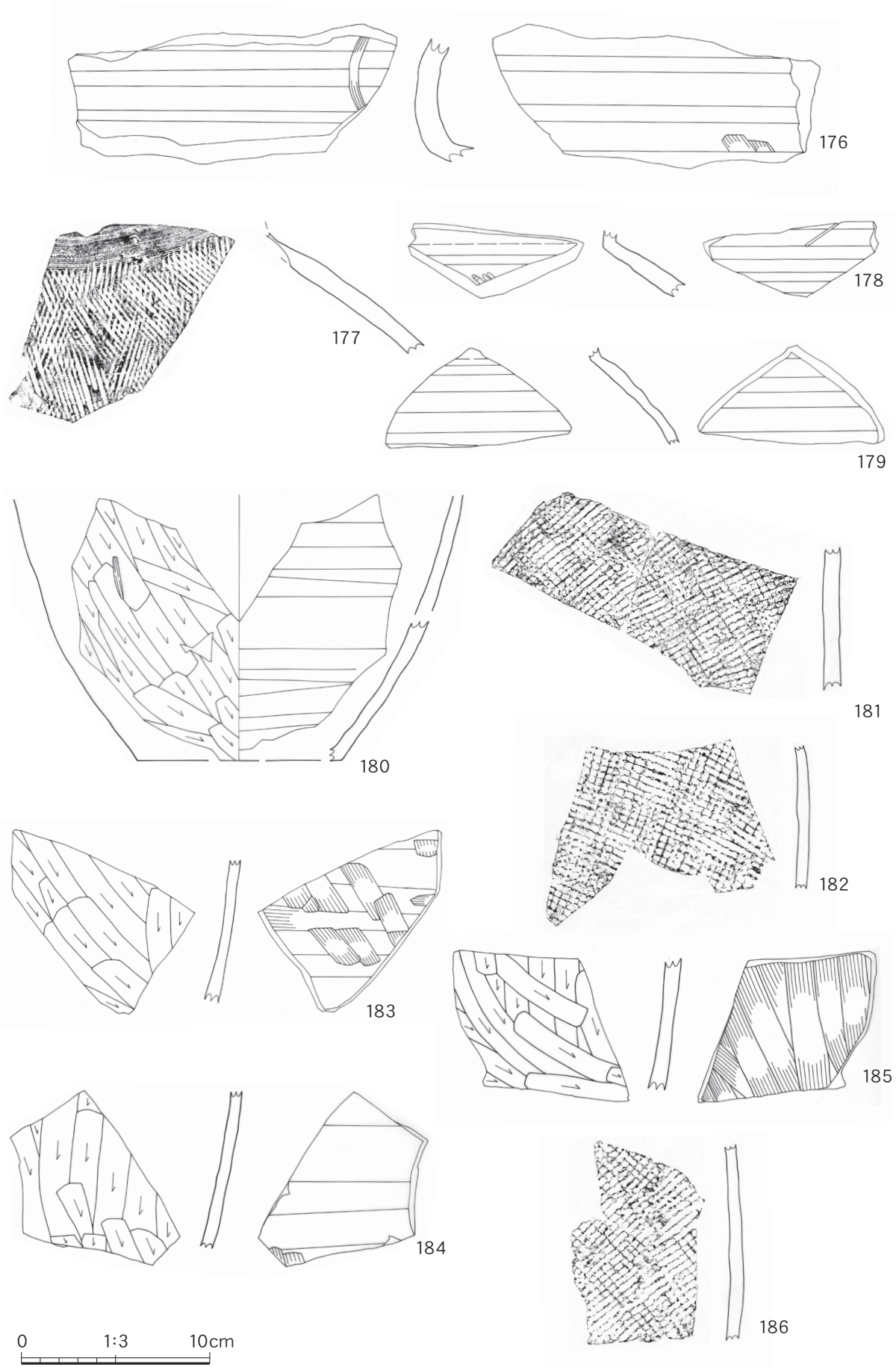
第 26 図 遺構外出土遺物 (6)



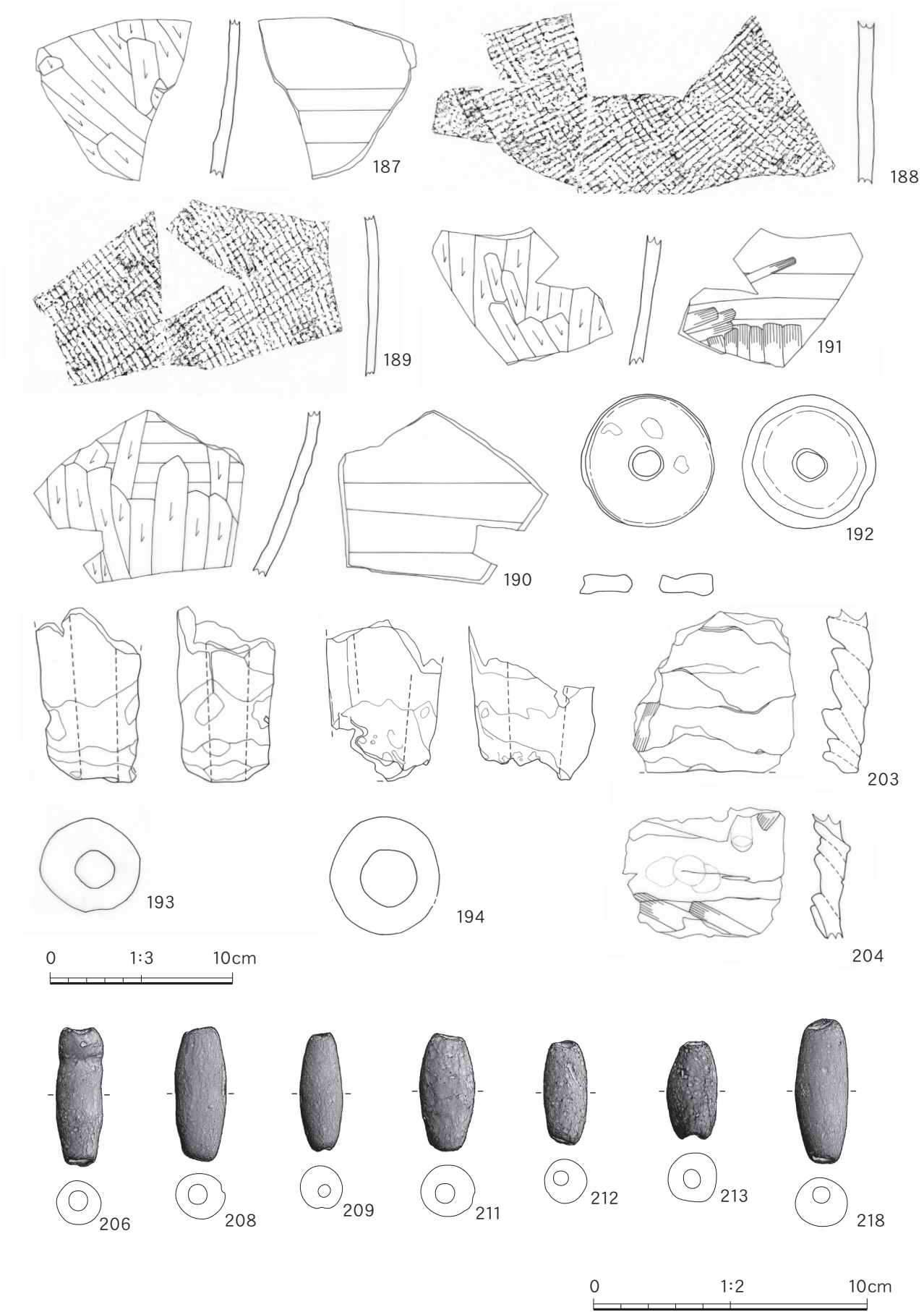
第 27 図 遺構外出土遺物 (7)



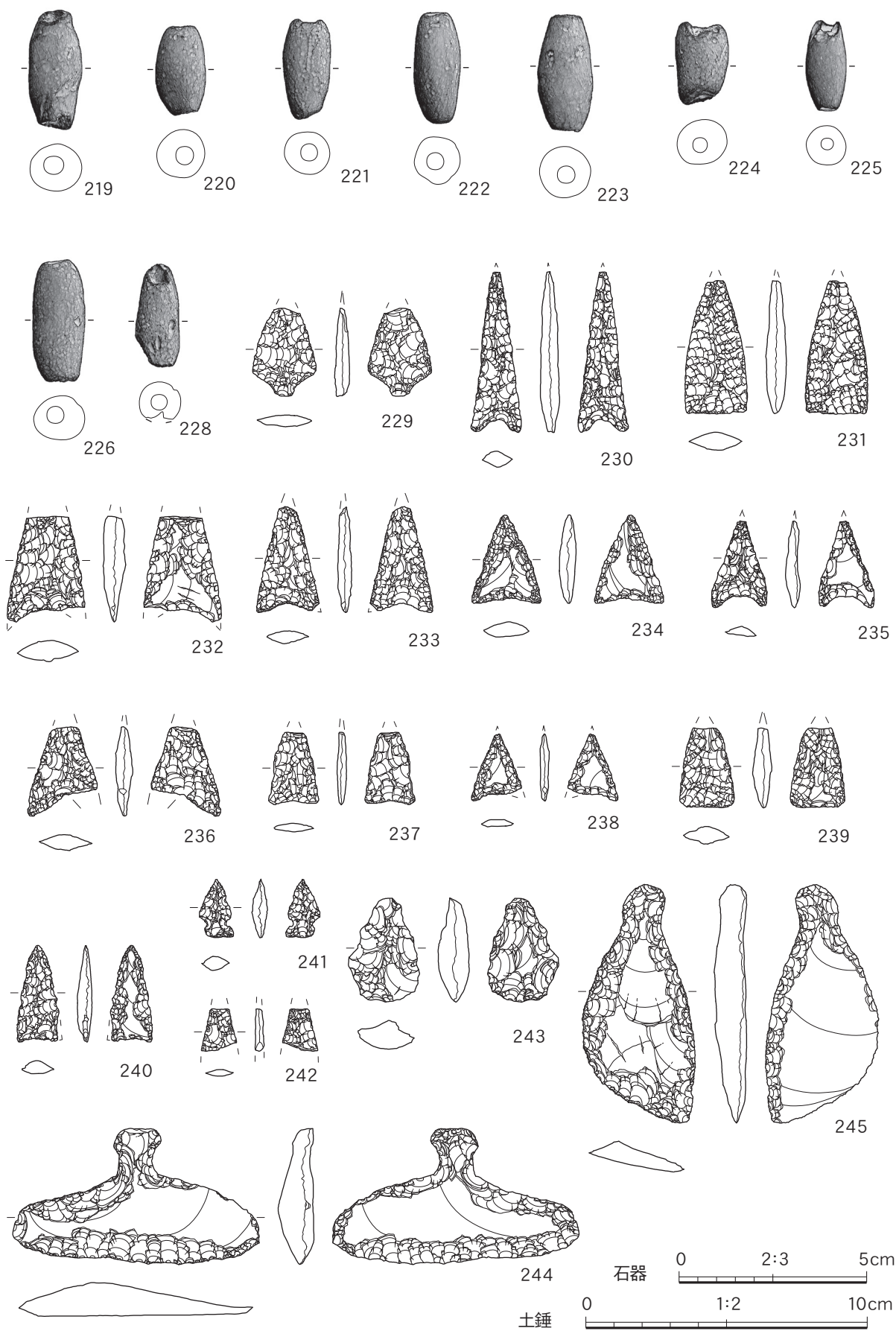
第 28 图 遺構外出土遺物 (8)



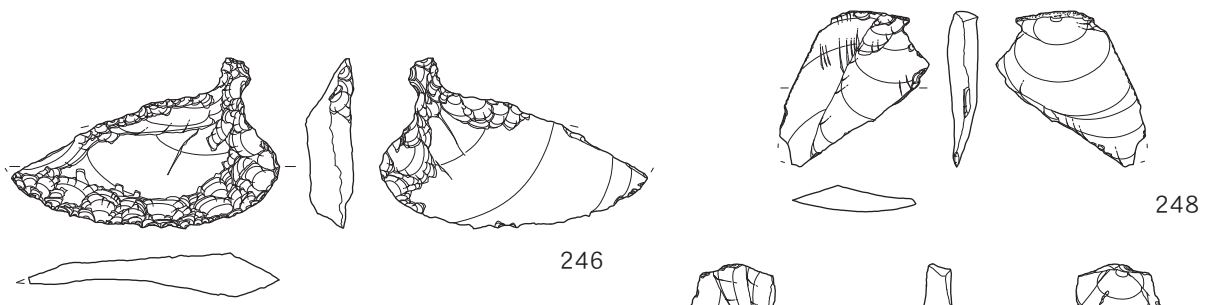
第 29 図 遺構外出土遺物 (9)



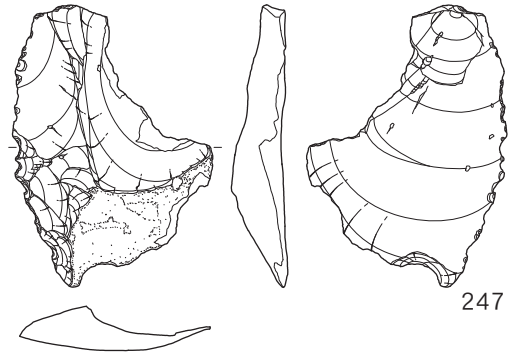
第 30 図 遺構外出土遺物 (10)



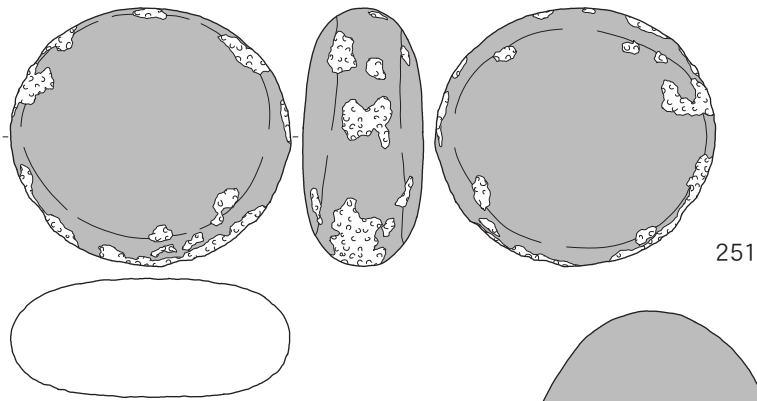
第 31 圖 遺構外出土遺物 (11)



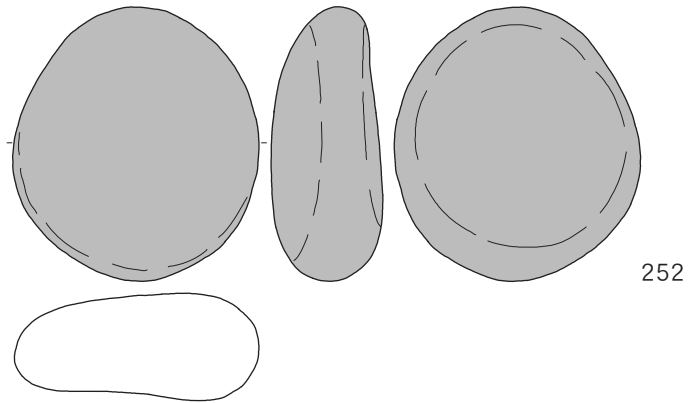
0 2:3 5cm



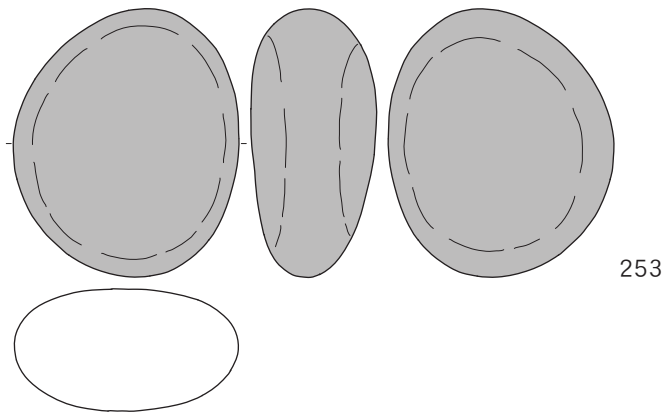
0 1:2 10cm



251



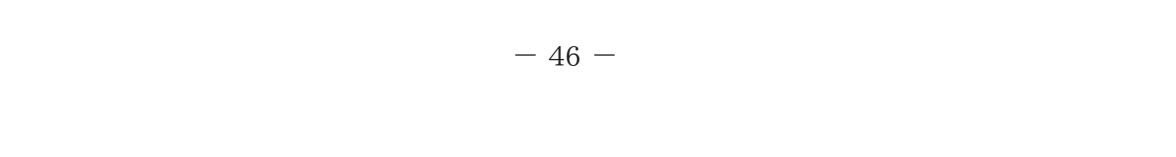
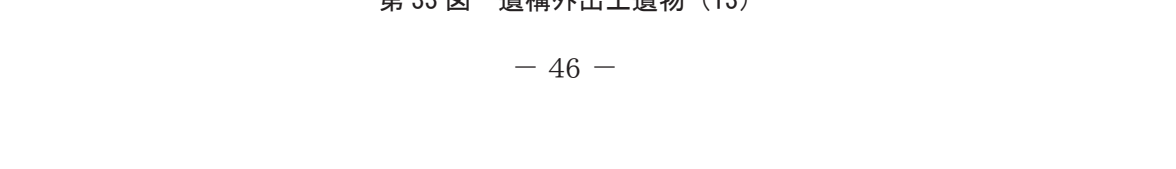
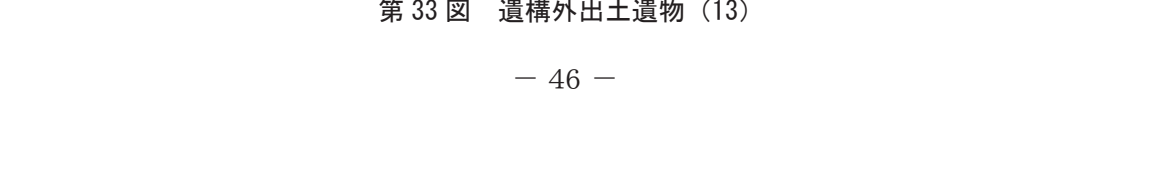
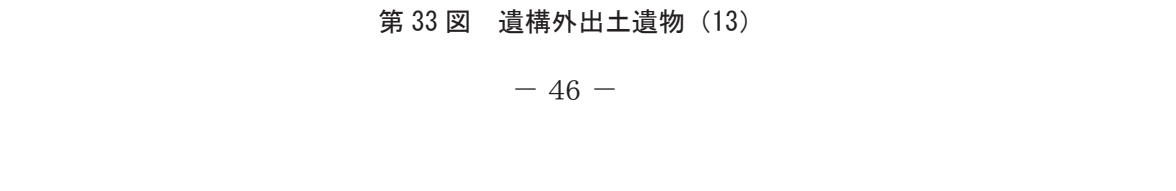
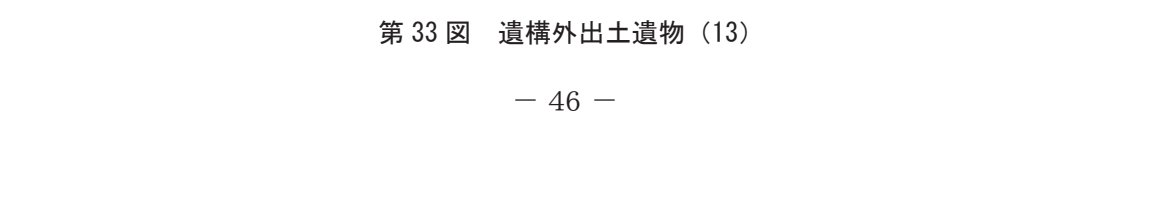
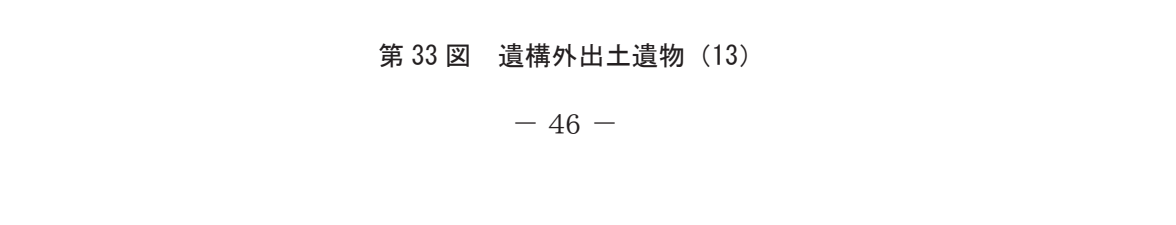
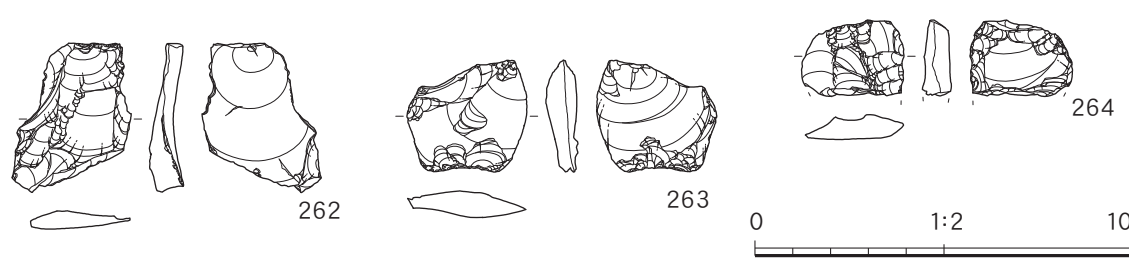
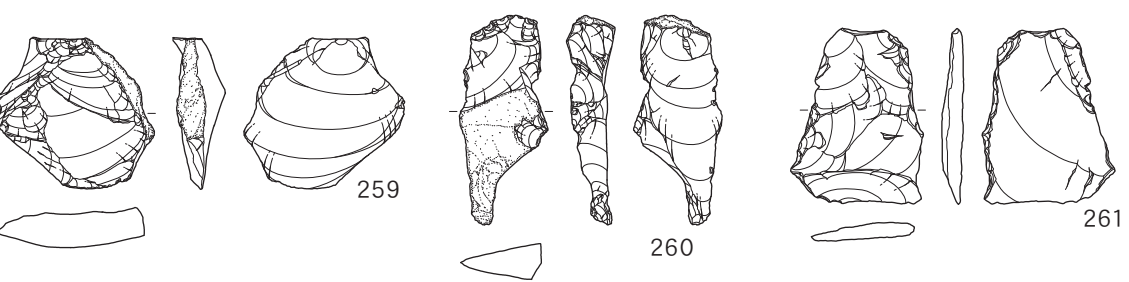
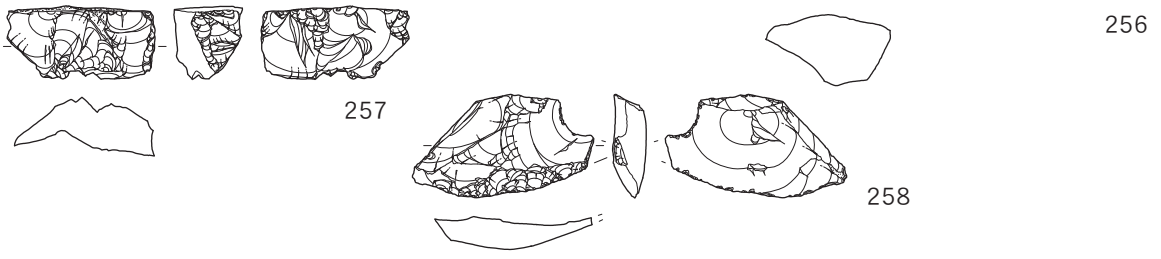
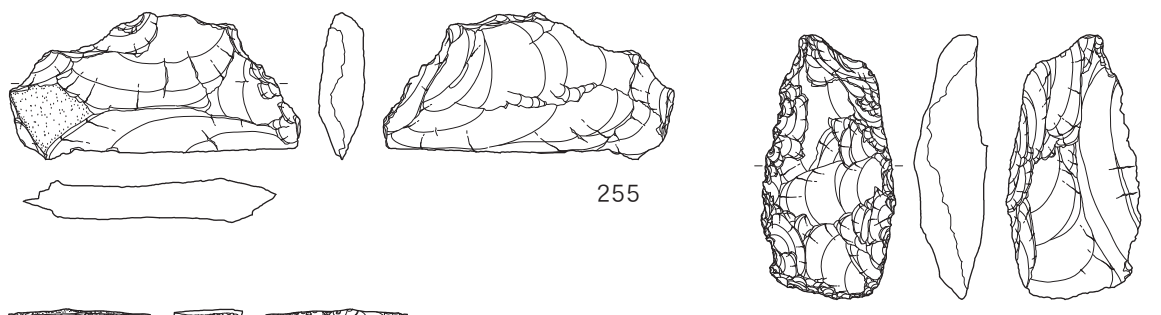
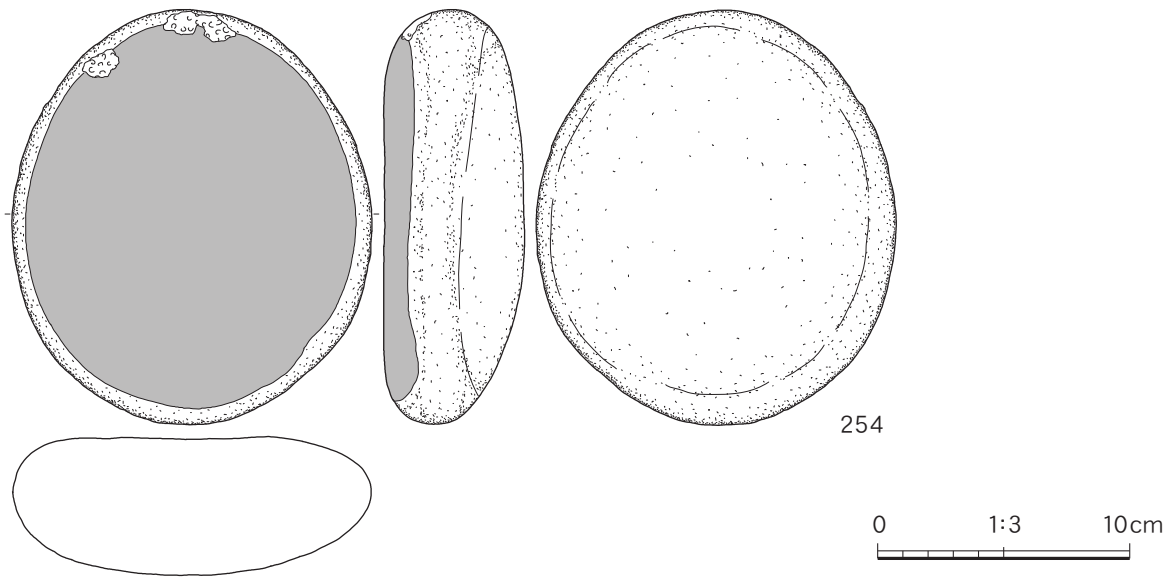
252



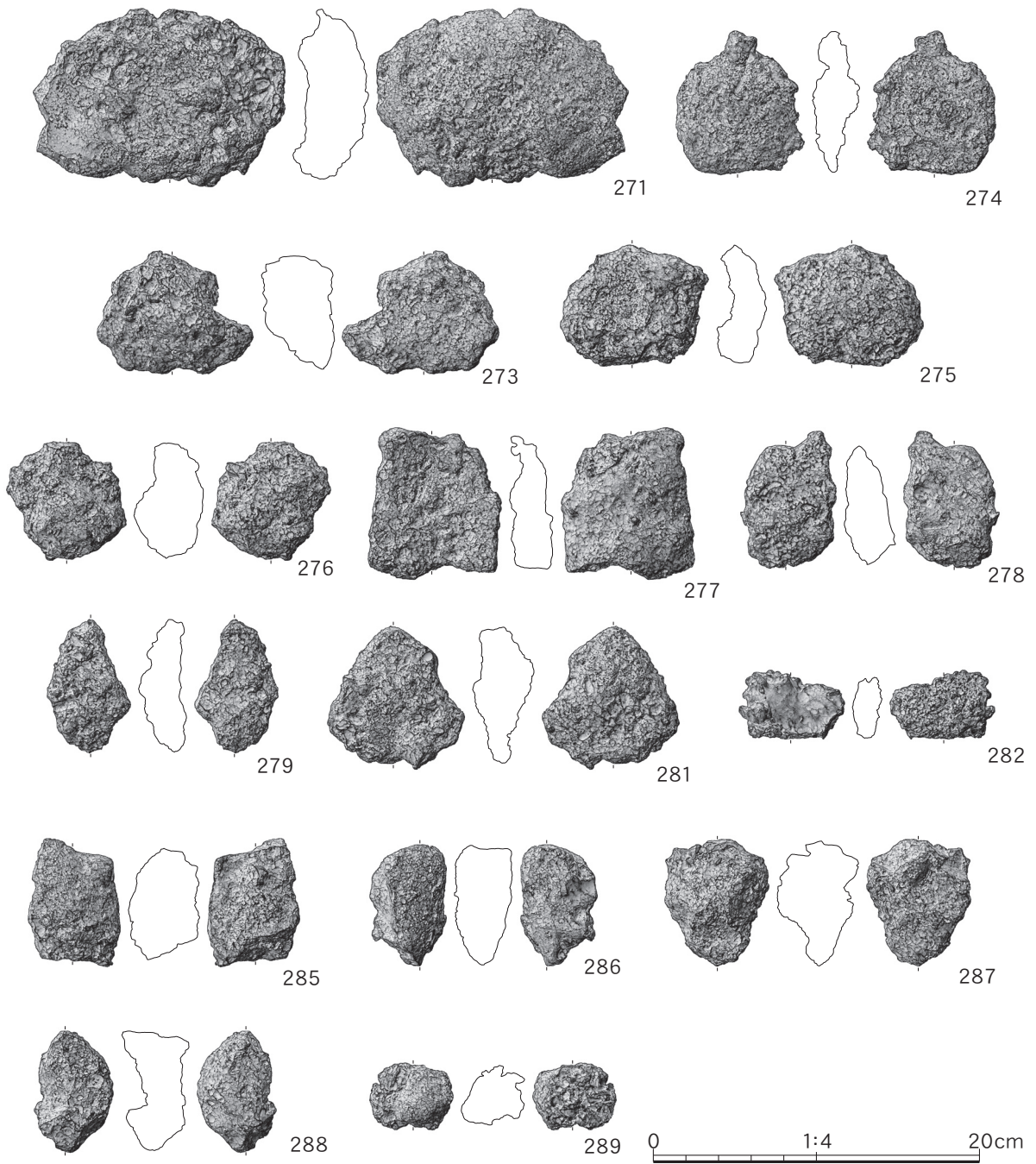
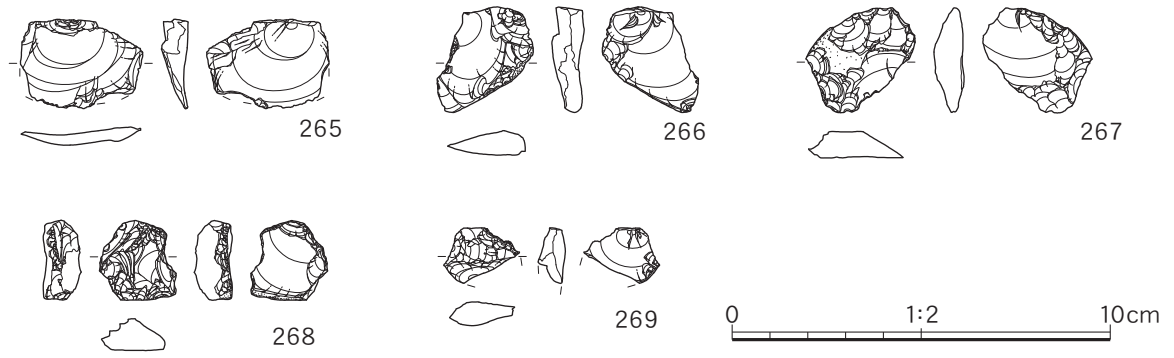
253

0 1:3 10cm

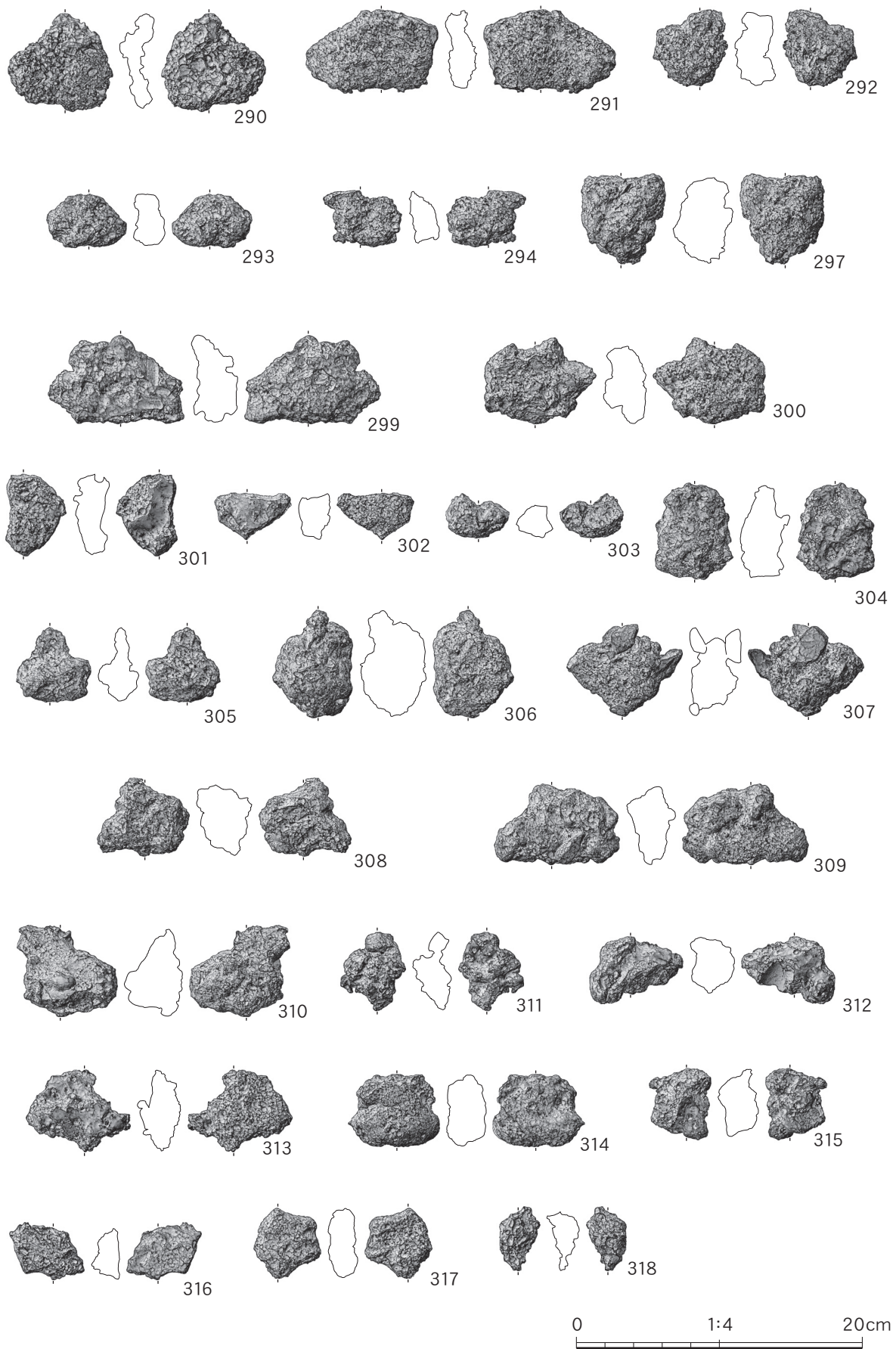
第 32 図 遺構外出土遺物 (12)



第 33 図 遺構外出土遺物 (13)



第 34 図 遺構外出土遺物 (14)



第 35 図 遺構外出土遺物 (15)

第3表 出土遺物(縄文土器・続縄文土器・弥生土器)

No.	出土地区	出土地点	種類	器種	地文・文様等	口径	底径	器高	備考
1	中央部 中央部南	SI01床面直上	縄文土器	深鉢	沈線、隆線+原体圧痕文?				大木6 No.7と同
2	東拡張部北	SI03床面直上	縄文土器	深鉢	単節(RL)、植物繊維含む				前期
3	中央部南	SX201 排土中	縄文土器	深鉢	口縁部に突起、隆線、沈線、隆線+刻み、単節(LR)				大木8a
4	中央部南 中央部	SX103	縄文土器	深鉢	ループ文(4段)RL、植物繊維含む	17.5	-	(10.0)	大木1
5	中央部南	4層、5層上面	縄文土器	深鉢	波状口縁、沈線、単節(RL)	(44.0)	-	(40.0)	後期前葉
6	南拡張部中央	4層、5層	縄文土器	深鉢	結束なしの羽状縄文(LR・RL)	-	7.3	(17.8)	晩期
7	中央部 中央部南		縄文土器	深鉢	波状口縁、結束なしの羽状縄文(LR・RL) 沈線、隆線+半竹管文、隆線+原体圧痕文?				大木6 No.1と同
8	南拡張部東		縄文土器	深鉢	波状口縁(小突起)、S字状連鎖沈文、隆線+押付文				大木2b
9	南拡張部東~東拡張部南		縄文土器	深鉢	波状口縁(小突起)、S字状連鎖沈文、隆線+押付文				大木2b
10	南拡張部中央	4層	縄文土器	深鉢	口縁部に突起、山型の貼付文、単節(LR)				大木5
11	東拡張部北		縄文土器	深鉢	波状口縁、隆線+半竹管文、ボタン状貼付文				大木6
12	南拡張部東		縄文土器	深鉢	複節(LR1)				
13	西拡張部南	4層	縄文土器	深鉢	波状口縁、ループ文(5段?)RL				大木1
14		4層	縄文土器	深鉢	波状口縁、ループ文(6段?)RL				大木1
15	東拡張部南		縄文土器	深鉢	波状口縁、刺突、結束縄文(RL)、植物繊維含む				大木2
16	東拡張部南		縄文土器	深鉢	S字状連鎖沈文				大木2b
17	北拡張部北		縄文土器	深鉢	単節(RL)、擦系?				弥生
18	東拡張部東 北拡張部北		縄文土器	深鉢	単節(RL)、擦系?				弥生
19	中央部		縄文土器	深鉢	単節(RL)				大木2a?
20	東拡張部南 南拡張部東~東拡張部南	4層	縄文土器	深鉢	S字状連鎖沈文				大木2b
21	中央部南~南拡張部中央		縄文土器	深鉢	複節(LR1)、植物繊維含む				前期
22	東拡張部南・東 東拡張部		縄文土器	深鉢	ござ目組み				
23	東拡張部中央 中央部南 南拡張部中央	5層	縄文土器	深鉢	複節(RLr)、植物繊維含む				前期
24	南拡張部中央		縄文土器	深鉢	複節(RLr)、植物繊維含む				前期
25	南拡張部中央	5層	縄文土器	深鉢	複節(RLr・LR1)、植物繊維含む				前期
26	南拡張部中央	5層	縄文土器	深鉢	複節(RLr)、植物繊維含む				前期
27	南拡張部中央 中央部南	4層	縄文土器	深鉢	結束なしの羽状縄文(RL・LR)、植物繊維含む				前期
28	中央部南 東拡張部北		縄文土器	深鉢	単節(LR)、植物繊維含む				前期
29	東拡張部北 南拡張部南		縄文土器	深鉢	単節(LR)、植物繊維含む				前期
30	東拡張部南		続縄文土器	深鉢	擬縄添付文、三角形刺突文、沈線文、帯縄文、単節(RL)				後北C2-D
31	東拡張部南・東 東拡張部 中央部東	4層 To-a火山灰	弥生土器	深鉢	口縁部に沈線・交互刺突文、体部に沈線、単節(RL) 補修孔あり	27.5	(10.0)	31.6	赤穴式

第4表 出土遺物（土師器・須恵器）

No.	出土地区	出土地点	種類	器種	成形	調整			測定値 (c m)			備考
						外面	内面	底部	口径	底径	器高	
32	中央部 南拡張部南	SI01-SK01	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転系切り	(15.2)	5.4	6.4	
33	中央部	SI01-SK01	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り	-	5.8	(2.7)	
34	中央部	SI01-SK01	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り	-	5.8	(2.9)	
35	中央部	SI01-SK01	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り	-	6.4	(1.4)	
36	中央部	SI01-SK01・SP02	土師器	甕		ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	-	(17.0)	-	(12.9)	
37	東拡張部 中央部	4層 SI01-SP13 SI01床面直上	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転系切り	(13.4)	5.9	4.7	
38	中央部	SI01-SP07	土師器	坏(高台)	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転ヘラ切り?	-	?	(2.7)	
39	中央部	SI01床面直上 SI01-SP08	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り	(14.6)	6.4	5.4	
40	中央部 中央部南	SI01石組周囲 3層、4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り	(14.0)	5.2	5.7	
41	中央部	SI01カマド周辺 SI01石組周辺 SI01床面直上 SI01上面	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り	12.0	5.4	3.9	
42	中央部	SI01	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ →(下端)ヘラケズリ	黒色処理、ミガキ	回転系切り	-	5.4	(2.2)	
43	中央部	SI01床面直上	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転系切り	-	(6.4)	(1.7)	
44	中央部	SI01床面直上	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ロクロナデ	回転系切り	(14.8)	4.2	(5.8)	
45	中央部	SI01	土師器	坏	ロクロ	ヘラケズリ	黒色処理、ミガキ	回転系切り	-	(5.2)	(1.2)	
46	中央部 南拡張部東	SI01床面直上 4層	土師器	坏	?	ヘラナデ?	黒色処理、ヘラナデ?	指押さえ?ヘラナデ?	-	(7.4)	(1.2)	
47	中央部	SI01床面直上	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転系切り	-	5.9	(2.2)	
48	中央部	SI01床面直上	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転系切り	-	6.4	(1.9)	
49	中央部	SI01	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転系切り	-	5.8	(3.0)	
50	中央部	SI01床面直上 SI01 4層	土師器	坏	ロクロ			回転系切り	-	5.9	(1.8)	
51	中央部 中央部 東拡張部	SI01石組周囲 SI01床面直上	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ →(下端)ヘラケズリ	ロクロナデ	回転系切り	-	(6.0)	(2.7)	
52	中央部 中央部南 南拡張部中央	SI01床面直上 4層 4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り	(14.2)	6.3	4.9	
53	中央部	SI01-SP14	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ミガキ	-	(14.4)	-	(4.2)	
54	中央部	SI01床面直上	土師器	坏(高台)	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理?	?	(17.0)	-	(5.5)	
55	中央部	SI01床面直上・埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(15.6)	-	(4.9)	
56	中央部 中央部	SI01埋土(カマド西) SI01床面直上	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(14.0)	-	(4.5)	
57	中央部	SI01床面直上	土師器	坏・耳皿	ロクロ	ロクロナデ?	ロクロナデ?	回転系切り	9.8	3.9	3.1	
58	中央部	SI01床面直上	土師器	坏(高台)	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	?	-	9.5	(3.3)	刻書
59	中央部	SI01床面直上	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(23.2)	-	(20.4)	
60	中央部	SI01埋土(北西隅)	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	(25.0)	-	(9.6)	
61	中央部	SI01-SP02	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(22.0)	-	(7.1)	
62	中央部	SI01床面直上	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	-	-	-	(5.1)	
63	中央部	SI01煙道内	土師器	甕		ヘラケズリ、ヘラナデ	黒色処理、ヘラナデ	木葉痕	-	8.4	(8.3)	
64	中央部 中央部 中央部	SI01煙道内下層 SI01床面直上 SI01カマド内下層	土師器	甕	ロクロ	ヘラケズリ・ヘラナデ	ロクロナデ	?	-	(10.2)	(7.2)	

No.	出土地区	出土地点	種類	器種	成形	調整			測定値 (c m)			備考
						外面	内面	底部	口径	底径	器高	
94	中央部 中央部	SI01 SI01北東区	須恵器	甕		タタキ	指ナデ?	-	-	-		
95	中央部 中央部南	SI01北東区 4層	須恵器	甕		ヘラケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	(10.2)		
96	中央部	SI01北西区 SI01-SP01	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	(9.3)		
97	中央部	SI01北西区	須恵器	甕	ロクロ	タタキ	ロクロナデ	-	-	-		
98	中央部 中央部	SI01埋土(北西隅) SI01北西区	須恵器	甕		タタキ	?	?	-	(8.8)	(6.6)	
99	中央部 中央部	SI01北西区 SI01床面直上	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラナデ	?	-	(9.4)	(6.6)	
100	中央部 東拡張部南西	SI01埋土(カマド西) 4層	須恵器	甕	ロクロ	回転ヘラケズリ? ヘラナデ	ロクロナデ	?	-	(9.0)	(5.8)	
101	中央部	SI02北西区床面直上	須恵器	甕		タタキ	アテ具	-	-	-		
102	中央部東 東拡張部南 東拡張部南 東拡張部南	SP108 4層 3層 4層	須恵器	甕		タタキ	ヘラナデ	-	-	-		
103	西拡張部		土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	(14.0)	6.5	5.5	
104	東拡張部 東拡張部南	3層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	-	5.6	(4.0)	
105	中央部		土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	(14.2)	6.2	4.0	
106	東拡張部		土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	(14.2)	6.2	5.3	
107	東拡張部南	3層	土師器	坏	ロクロ	黒色処理 ロクロナデ→ミガキ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	(16.4)	7.3	4.9	
108	南拡張部東 ～東拡張部南 南拡張部東 東拡張部南	4層 5層上面	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	-	(19.0)	-	(5.1)	
109	中央部南	4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	(16.4)	6.6	5.2	
110	中央部南	4層	土師器	坏		黒色処理、ミガキ	黒色処理、ミガキ	ミガキ	(12.0)	?	2.9	
111	南拡張部		土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り→指押さえ	-	(8.0)	(1.1)	
112	中央部南	4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	6.7	(2.1)	
113	中央部南	3層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理 ナデ?・ミガキ	?	-	-	5.3	
114	東拡張部	4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	(5.4)	(1.8)	
115	-	-	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	黒色処理、?	?	-	(4.6)	(1.6)	
116	中央部		土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	(6.0)	(1.5)	
117	中央部		土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	-	-	-	(6.0)	
118	南拡張部中央 中央部南	4層 4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	5.8	(1.8)	
119	東拡張部南	3層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	6.2	(1.4)	
120	東拡張部	4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	6.2	(0.9)	
121	東拡張部南	3層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	(6.6)	(1.8)	
122	東拡張部南 南拡張部南	3層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	(5.0)	(3.0)	
123	中央部南	4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	-	6.2	(1.9)	
124	南拡張部南半		土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	-	5.3	(2.6)	
125	中央部		土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	-	6.6	(2.3)	
126	東拡張部南	3層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	-	5.8	(1.4)	
127	東拡張部南 中央部南		土師器	坏		ヘラナデ?	ヘラナデ?	ヘラナデ	-	7.4	(2.0)	

No.	出土地区	出土地点	種類	器種	成形	調整			測定値 (c m)			備考
						外面	内面	底部	口径	底径	器高	
128	東拡張部南 南拡張部中央 中央部南 ～南拡張部中央	3層 4層 4層	土師器	坏	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	-	5.5	(1.6)	
129	中央部南 中央部	4層 4層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(26.6)	-	(13.4)	
130	北拡張部西 西拡張部南 -	3層 4層 4層	土師器	甕		ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラケズリ?	-	(8.8)	(27.5)	
131	中央部南 中央部南	3層 4層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(12.5)	
132	東拡張部南	3層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	-	-	-	(13.3)	
133	中央部南端	4層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(5.8)	
134	中央部南	4層	土師器	甕	ロクロ?	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	-	(6.9)	
135	中央部南 中央部	4層 4層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(5.7)	
136	東拡張部南 中央部南	3層 4層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(7.7)	
137	東拡張部南		土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(3.6)	
138	南拡張部東		土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(14.2)	-	(5.5)	
139	東拡張部南 中央部	3層 4層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(24.0)	-	(4.2)	
140	西拡張部		土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(3.9)	
141	中央部南 中央部 中央部南	4層 5層 5層	土師器	甕	?	ヘラケズリ						
142	中央部		土師器	甕		口縁折り返し	ヘラナデ					
143	中央部南 南拡張部中央 中央部南	3層、4層 4層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	黒色処理、ミガキ	-	-	-	(10.8)	
144	中央部 中央部南	4層 3層、4層	土師器	甕	ロクロ	ヘラケズリ	黒色処理 ロクロナデ、ミガキ	ヘラケズリ	-	(10.0)	(10.5)	
145	東拡張部南	3層	土師器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	-	(18.9)	
146	東拡張部南	3層	土師器	甕	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロナデ、ハケメ	ヘラナデ	-	(9.4)	(5.4)	
147	南拡張部中央	4層	土師器	甕		ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	-	9.5	(2.8)	
148	南拡張部中央	4層	土師器	甕		ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	-	(10.4)	(2.9)	
149	中央部南	3層、4層	土師器	甕		ヘラナデ	ヘラナデ	?	-	(14.0)	(4.5)	
150	南拡張部中央 中央部南	4層 3層	土師器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	?	-	-	(4.1)	
151	中央部南 東拡張部南	4層 3層	土師器	甕		ヘラナデ	ヘラナデ	?	-	(11.8)	(2.8)	
152	東拡張部南 中央部南	4層 3層	土師器	甕		ヘラケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ	?	-	(11.0)	(5.0)	
153	南拡張部中央	4層	土師器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	?	-	(9.0)	(4.4)	
154	南東部～東拡張部	To-a火山灰	土師器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	?	-	(11.0)	(4.8)	
155	東拡張部南	3層	土師器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	-	(11.0)	(4.1)	
156	中央部南	4層	土師器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	(5.2)	
157	東拡張部南	3層	土師器	甕また甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り	-	7.4	(2.9)	
158	東拡張部南 東拡張部南	3層	土師器	壺	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り	-	(7.0)	(7.0)	
159	東拡張部南	4層	土師器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	-	(8.8)	
160	-	4層	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(10.6)	
161	-	排土中	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ、一部ヘラナデ	ロクロナデ	-	-	-	(8.5)	

No.	出土地区	出土地点	種類	器種	成形	調整			測定値 (cm)			備考
						外面	内面	底部	口径	底径	器高	
162	中央部		土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	-	(7.8)	
163	東拡張部南	3層	土師器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	-	(10.6)	
164	-	-	土師器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ヘラナデ	-	-	-	(7.2)	
165	中央部南 中央部南	4層 3層	土師器	甕		ヘラケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	-	(7.9)	
166	南拡張部南		須恵器	甕	ロクロ	タタキ→ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(4.6)	
167	-	表採	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	(11.0)	-	(5.2)	
168	中央部南	3層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(3.3)	
169	西拡張部西		須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	?	-	-	-	(2.2)	
170	東拡張部南	3層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(3.1)	
171	東拡張部南	3層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(2.9)	
172	中央部南	4層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(2.8)	
173	中央部	4層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(2.3)	
174	南拡張部中央	4層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(3.4)	
175	南拡張部西	4層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(2.3)	
176	中央部 中央部北	4層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ、一部ヘラナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(7.6)	
177	南拡張部西	4層	須恵器	甕		ハケメ?、タタキ	ハケメ?、ヘラナデ?	-	-	-	-	
178	東拡張部北	4層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ	-	-	-	(4.0)	
179	中央部南	4層	須恵器	壺	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	(5.3)	
180	東拡張部南	3層	須恵器	甕	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロナデ?	?	-	-	(14.3)	
181	中央部南	4層	須恵器	甕		タタキ	指ナデ?	-	-	-	-	
182	中央部南 中央部南 東拡張部南	4層 3層 3層	須恵器	甕		タタキ	指ナデ?	-	-	-	-	
183	中央部		須恵器	甕	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラナデ	-	-	-	(9.9)	
184	東拡張部南	3層	須恵器	甕		ヘラケズリ	?	-	-	-	(9.3)	
185	中央部南	3層	須恵器	甕		ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	-	(8.1)	
186	中央部南 中央部南	3層 4層	須恵器	甕	ロクロ	タタキ	ロクロナデ	-	-	-	-	
187	中央部南 -	3層 4層	須恵器	甕	ロクロ	ヘラケズリ	?	-	-	-	(9.0)	
188	中央部南	4層	須恵器	甕	ロクロ	タタキ	ロクロナデ→指ナデ?	-	-	-	-	
189	東拡張部南	3層	須恵器	甕		タタキ	指ナデ?	-	-	-	-	
190	南拡張部東 東拡張部南	4層 3層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロナデ→ヘラケズリ	?	-	-	-	(9.6)	
191	中央部南	3層	須恵器	甕		ヘラケズリ	?	-	-	-	(7.6)	

第5表 出土遺物（土製品）

No.	出土地区	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
192	東拡張部	4層	紡錘車	7.4	7.4	1.3	57.8	
193	東拡張部		羽口	9.7	5.5	5.3	226.0	
194	中央部南	4層	羽口	8.9	6.0	6.5	217.0	
195	南東部～東拡張部 中央部南	3層 4層	羽口	7.8	(7.8)	-	132.0	
196	中央部	SI01カマド横	土製支脚	17.8	9.7	9.6	1245.0	
197	中央部南	SK107	土製支脚	10.2	9.6	-	532.0	
198	中央部南 中央部南～南拡張部中央	SK107 4層	土製支脚	7.3	10.0	-	261.0	
199	中央部南 中央部南	SK107	土製支脚	12.0	(9.2)	-	249.0	
200	中央部南	SK107	土製支脚	9.8	(9.4)	-	207.0	
201	中央部南	SK107	土製支脚	7.6	(9.0)	-	173.0	
202	南拡張部中央 中央部 中央部南	4層 SX103	土製支脚	14.8	(11.2)	-	564.0	
203	中央部南		土製支脚	9.0	(8.9)	-	235.0	
204	中央部南	4層	土製支脚	7.4	(9.0)	-	146.0	
205	中央部	4層	土製支脚	5.5	(7.4)	-	127.0	
206	中央部		土錘	5.0	1.7	1.6	11.5	
207	中央部	SI01床面直上	土錘	4.1	2.1	2.1	13.8	
208	南拡張部中央	4層	土錘	4.8	1.9	1.7	13.7	
209	東拡張部中央		土錘	4.3	1.5	1.6	8.4	
210	中央部	SI01	土錘	4.4	1.6	1.6	8.9	
211	南拡張部中央	4層	土錘	4.2	2.0	1.9	12.7	
212	東拡張部南	4層	土錘	3.8	1.6	1.6	9.0	
213	中央部南	4層	土錘	3.5	1.8	1.8	9.5	
214	中央部	SI01	土錘	3.6	1.7	1.6	7.3	
215	中央部	SI01-SP13	土錘	3.6	1.7	1.6	8.8	
216	中央部	SI01-SP13	土錘	3.3	1.6	1.4	6.1	
217	中央部	SI01北側周壁溝	土錘	4.5	1.8	1.8	12.2	
218	中央部南	4層	土錘	5.2	1.9	1.8	16.7	
219	中央部南	4層	土錘	4.2	1.9	1.7	10.6	
220	南東部～東拡張部	3層	土錘	3.1	1.8	1.7	7.7	
221	南東部～東拡張部	3層	土錘	3.5	1.7	1.6	7.7	
222	南東部～東拡張部	3層	土錘	3.9	1.6	1.7	9.4	
223	東拡張部南		土錘	4.1	1.9	1.9	11.2	
224	中央部	4層	土錘	2.9	1.9	1.6	7.8	
225	中央部	4層	土錘	3.2	1.4	1.4	5.1	
226	南拡張部中央	4層	土錘	4.3	1.8	1.6	11.4	
227	中央部	SI01	土錘	3.2	1.5	1.5	5.7	
228	東拡張部南		土錘	3.6	1.5	1.5	5.5	

第6表 出土遺物（石器）

No.	出土地区	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
229	中央部～南拡張部中央	5層	石鏃	(2.3)	1.6	0.3	1.0	
230	中央部南	3層	石鏃	(4.2)	1.3	0.5	1.9	
231	中央部東		石鏃	(3.5)	1.6	0.5	2.7	
232	中央部南		石鏃	(2.7)	(2.0)	0.6	3.0	
233	中央部南	3層	石鏃	(2.8)	(1.6)	0.4	1.2	
234	南東部～東拡張部南		石鏃	2.3	1.8	0.4	1.3	
235	中央部東	4層	石鏃	(2.3)	1.5	0.4	0.8	
236	中央部南		石鏃	(2.3)	(1.8)	0.4	1.2	
237	中央部		石鏃	(1.9)	1.3	0.2	0.4	
238	東拡張部南	To-a火山灰	石鏃	(1.2)	(1.3)	0.2	0.3	
239	南拡張部西	4層	石鏃	(2.1)	1.4	0.5	1.3	
240	中央部	4層	石鏃	2.6	(1.0)	0.4	0.8	
241	中央部		石鏃	1.5	0.8	0.4	0.4	アメリカ式
242	南拡張部	4層	石鏃	(1.1)	(0.9)	0.2	0.3	めのう
243	東拡張部	4層	石鏃	2.7	1.9	0.8	3.3	
244	中央部南～南拡張部中央	4層	石匙	3.6	6.6	0.9	13.5	
245	中央部		石匙	6.3	3.0	0.8	11.5	
246	南半部北	4層	石匙	3.3	(5.3)	0.9	10.4	
247	中央部東	5層	スクレイパー	7.5	5.3	1.4	31.9	
248	南東部～南拡張部東		スクレイパー	4.2	(4.0)	0.8	8.8	
249	中央部	SI01北東区	環状石斧	8.0	9.9	1.8	131.0	
250	中央部	SI01床面直上	磨石・敲石	8.1	8.0	7.2	606.0	
251	中央部		磨石・敲石	10.3	11.2	4.8	848.0	
252	中央部南		凹石	11.0	9.9	4.4	674.0	
253	中央部東		磨石	10.8	9.1	5.1	681.0	
254	南拡張部南		石皿	16.6	14.4	5.7	2198.0	
255	東部～東拡張部		剥片	3.8	7.7	1.2	36.8	
256	中央部南		剥片	7.0	3.6	2.0	41.7	
257	中央部東	4層	剥片	2.2	3.9	1.8	13.2	

No.	出土地区	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
258	南拡張部	7層	剥片	2.7	4.9	0.8	9.3	
259	中央部南		剥片	4.0	4.3	1.4	16.9	
260	南拡張部南		剥片	5.6	2.4	0.9	9.7	
261	中央部南	3層	剥片	4.6	3.5	0.5	8.6	
262	中央部東		剥片	4.0	3.2	0.9	7.0	
263	中央部東	5層	剥片	3.0	3.2	0.8	6.9	
264	東拡張部南	4層	剥片	(2.0)	2.7	0.8	4.9	
265	中央部東		剥片	2.4	(3.2)	0.7	3.2	
266	中央部南～南拡張部中央	4層	剥片	2.8	2.6	0.8	4.0	
267	中央部南	4層	剥片	2.8	2.9	0.8	5.1	
268	東拡張部南	3層	剥片	2.1	2.1	1.0	4.4	
269	東拡張部南		剥片	(1.5)	(2.0)	0.7	1.3	

第7表 出土遺物 (鉄滓)

No.	出土地区	出土地点	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
270	中央部	SI01床面直上	鉄滓	11.5	15.2	6.3	1177.0	
271	東拡張部南		鉄滓	10.9	15.4	5.5	1059.0	
272	中央部	SI01-SP02	鉄滓	9.0	12.2	6.0	709.0	
273	東拡張部	4層	鉄滓	9.6	7.6	4.6	408.0	
274	東拡張部	4層	鉄滓	8.8	7.8	3.0	161.0	
275	東拡張部南東	4層	鉄滓	7.5	9.1	3.8	304.0	
276	中央部南	3層	鉄滓	7.3	7.3	4.7	285.0	
277	東拡張部	4層	鉄滓	9.3	8.1	4.0	312.0	
278	南拡張部東	4層	鉄滓	8.4	5.8	3.3	169.0	
279	南拡張部東	4層	鉄滓	8.2	5.1	3.9	128.0	
280	中央部	SI01床面直上	鉄滓	6.5	7.0	3.5	126.0	
281	東拡張部南	4層	鉄滓	8.8	8.4	4.1	250.0	
282	東拡張部南	4層	鉄滓	4.2	6.4	3.1	38.4	
283	中央部南	SX102	鉄滓	8.0	5.6	5.6	224.0	
284	中央部南	SX102	鉄滓	4.6	5.8	2.6	66.4	
285	東拡張部南	3層	鉄滓	7.8	5.6	4.6	269.0	
286	東拡張部南	3層	鉄滓	7.4	4.7	4.7	195.0	
287	東拡張部南	3層	鉄滓	7.8	6.4	4.8	285.0	
288	東拡張部南	3層	鉄滓	7.4	4.8	4.1	180.0	
289	東拡張部南	3層	鉄滓	4.1	5.1	3.9	65.9	
290	中央部南	3層	鉄滓	6.8	7.3	3.1	111.0	
291	中央部南	3層	鉄滓	5.8	9.2	3.2	135.0	
292	中央部南	3層	鉄滓	5.3	5.2	3.6	101.0	
293	中央部南	3層	鉄滓	3.7	5.6	3.0	45.0	
294	中央部南	3層	鉄滓	3.9	5.5	2.5	44.4	
295	中央部	SI01床面直上	鉄滓	4.3	8.8	4.7	143.0	
296	中央部南	SX102	鉄滓	5.5	8.0	4.9	197.0	
297	南拡張部中央	4層	鉄滓	6.4	5.9	4.1	196.0	
298	中央部南	SX103	鉄滓	3.7	7.6	2.4	81.4	
299	中央部南	4層	鉄滓	6.2	9.5	4.1	203.0	
300	中央部南	4層	鉄滓	6.0	7.8	3.7	149.0	
301	中央部南	4層	鉄滓	5.8	4.3	2.6	73.6	
302	中央部南	4層	鉄滓	3.3	5.4	2.3	45.7	
303	中央部南	4層	鉄滓	3.2	4.4	2.6	33.0	
304	東拡張部		鉄滓	6.7	5.4	3.6	152.0	
305	東拡張部南	3層	鉄滓	5.2	5.2	2.9	62.0	
306	中央部南	3層	鉄滓	7.5	5.6	4.9	237.0	
307	中央部南	3層	鉄滓	5.9	6.6	3.5	161.0	
308	中央部南	3層	鉄滓	5.2	6.5	4.3	159.0	
309	中央部南	3層	鉄滓	5.6	8.8	3.7	169.0	
310	中央部南	3層	鉄滓	7.0	6.4	5.1	210.0	
311	中央部南	3層	鉄滓	5.5	4.6	3.5	53.3	
312	中央部南	4層	鉄滓	4.7	6.5	3.9	66.2	
313	中央部南	4層	鉄滓	5.8	7.3	3.4	73.7	
314	中央部南	4層	鉄滓	5.0	6.4	3.3	131.0	
315	東拡張部南		鉄滓	4.9	4.3	3.0	28.9	
316	南拡張部中央	4層	鉄滓	4.0	5.2	2.3	52.3	
317	東拡張部南	4層	鉄滓	4.9	4.7	2.1	52.8	
318	中央部南	4層	鉄滓	4.5	2.8	2.3	26.7	
319	中央部東	SP108	鉄滓	2.8	3.6	2.4	20.9	

V 総括

1. 愛宕下Ⅱ遺跡出土の後北式土器について

出土遺物の中で注目されるものとして、続縄文時代の土器が1点出土している。

この土器に関する検討を行うに当たって、まず、続縄文時代について、触れておきたい。

本州で、弥生時代・古墳時代の生活が営まれていた頃、北海道には、鉄の道具は、伝わったが、稲作文化は伝わらなかった。また、縄文時代と同じような漁撈・狩猟・採集生活を続けていた。

つまり、続縄文時代とは、北海道における時代の呼び方で、鉄の道具は伝わったが、縄文時代と同じような生活様式を続けていた時代ということができる。

続縄文時代は、道南部から道央部にかけての地域では、「恵山式」⇒「後北式」⇒「北大式」の概ね3つの時期に分けられている。

後北式とは、「後期北海道薄手式土器」の略で、「北海道式薄手縄文土器群」の時期を、2つに分けた場合、前期の「隆起線を欠くもの」を「前北式」と呼び、後期の「隆起線のあるもの」を「後北式」と呼んでいる。



図 36 東北地方における北海道系土器の分布状況

「芳賀英実 2003」より抜粋(一部改変)

後北式は、「江別式」または「坊主山式」と呼ばれることもある。

後北式(江別式)は、土器の形や文様によって、A・B・C・Dの4つのタイプに細分され、さらに、C式は、C1式とC2式に分けられる。注口土器の出現までが、C1式で、出現以降が、C2式としている。現在では、時期的には、C2式とD式が同じ時期と考えられており、C2-D式という呼び方をしていることが多い。

分布範囲は、時期によって変化するが、道央部の石狩平野を中心に分布している。

A式⇒B式⇒C1式⇒C2-D式へと分布範囲が拡大していく。A式の頃には、石狩平野周辺のみであったが、B式の頃には、北海道のほぼ全域に広がり、さらに、C1式の頃には、本州の青森県まで分布範囲が拡大していく。最も拡大した後北C2-D式の頃には、北海道の全域と東北地方全域に広がり、北は、樺太半島や千島列島まで、南は、本州の新潟県や福島県で出土例が確認されている。図36は、東北地方における北海道系の土器の分布状況を示している。この中には、後北式土器だけでなく、後続する時期の北大式土器も含まれている。

大沼忠春氏によると、後北C2-D式土器の変遷について、概ね、4つの時期に細分されると考えられている。(図37:『文献 大沼1982』)

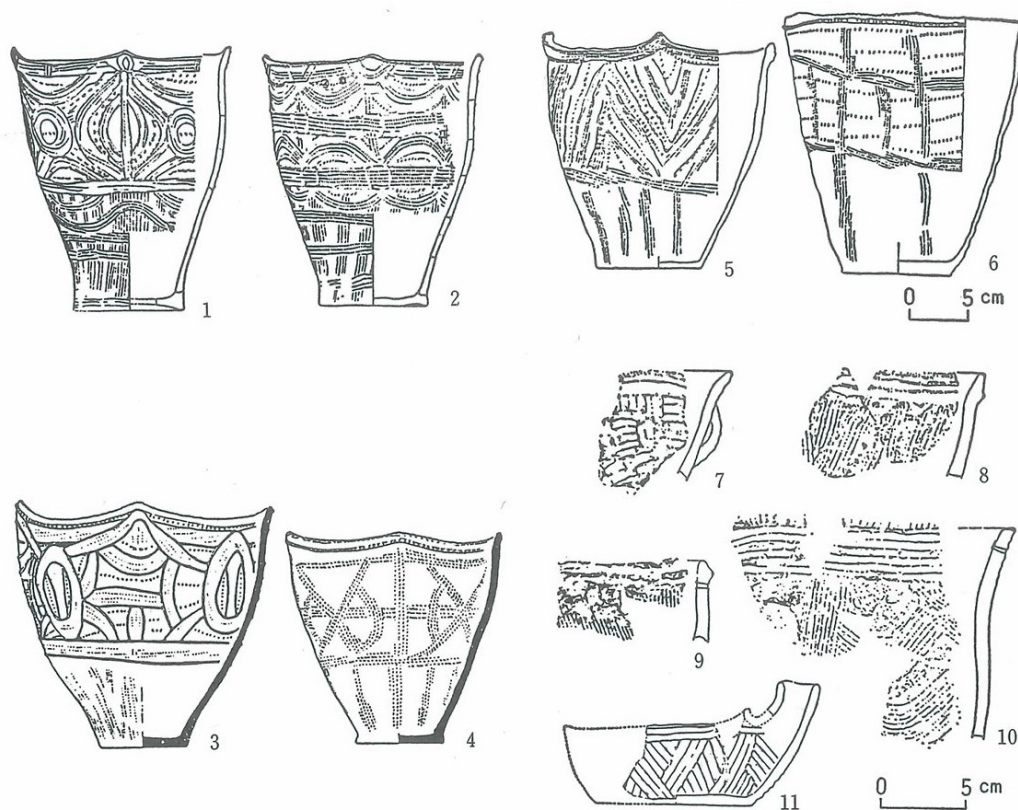


図37 後北C2-D式土器の変遷

「大沼1982」より抜粋(一部改変)

- 1・2 (C2式初: 聖山)、3・4 (一般的なC2-D式: 坊主山)
- 5・6 (C2-D式後葉: ワッカオイ)、7・8 (C2-D式末: ふか場)
- 9 (C2-D式末: ウサクマイC)、10・11 (北大式: ウサクマイC)

まず、「後北C2式初」期は、体部下半の縦方向の縄文の上に重ねて、横方向の帯状縄文を施すものが見られる。(図37の1・2)

次の「一般的なC2-D式」期では、弧線文や円形文を縦横の区画に配置したのがあり、初期で見られた地文として、体部下半の縦位、上半部の横位の帯状縄文は消滅する。また、体部下半の縄文も処々にたれ下がるものとなり、装飾的な文様も底部付近あるいは体部下半には施されなくなる。(図37の3・4)

C2-D式の新段階では、体部下半の縄文は認められず、体部上半に直線的な帯状縄文を組み合わせて構成するものが多くなり、三角形刺突文も見られないものがある。また、口縁部に隆起線を2条巡らし、その間に円形の刺突を行い、内面に突瘤を形成するものもある。(図37の5~9) 今回出土した後北C2-D式の土器の特徴としては、次のとおりである。

- ① 体の器形としては、おそらく4個の山形突起をもつ深鉢と考えられる。
- ② 口縁部とその少し下に、刻み目をつけた断面三角形の貼り付けの突帯(擬縄貼付文)を2条めぐらせている。
- ③ 「三角形点状文列(三角形刺突文)」と呼ばれている三角形の小さな刻みが点状に並ぶ文様が見られる。
- ④ 「縞縄文」または「帯状縄文(帯縄文)」と呼ばれている、数条が単位となった縞状(帯状)の縄文が見られる。
- ⑤ 通常は、縞縄文を区画するように、細い粘土紐を貼り付ける微隆起線文が見られるが、この土器については、それが沈線文で表現されている。
- ⑥ 土器の胎土が全般的に白っぽい色をしているが、焼きが良くないためと考えられ、本来はもう少し茶色に近い色調であった可能性がある。

体部下半の状態が不明であるが、体部上半部の弧線文の形状や三角形刺突文を施している点等から見て、「一般的なC2-D式」期に相当する可能性が高いと考えられるが、他の個体や共伴する遺物がないことから、現時点では、断定することは難しい。

2. S I 01 出土の土製支脚について～東北地方における土製支脚の分布に関する予察～

土製支脚とは、古代の竪穴住居等において、カマドで土器を火にかける際に、その土台として用いた用具の一つである。

土製支脚は、一般的には、外形が棒状で、中実であるタイプのもので、広く知られている。しかしながら、古代の東北地方では、様々な形態をもつものが確認されている。

柏木大延氏が論文(柏木 2013)で、古代の東北地方及び北海道地方から出土した土製支脚を、A類・B類・C類の3つのタイプに大別している。(図38)

A類は、「円筒状支脚」で、粘土紐の巻き上げで筒状に形成される形態のものである。

A類は、天井部の形態によって、3つに細分している。天井部が作出されない開放形態をAⅠ類、天井部が全体に覆われる全覆形態をAⅡ類、天井部の周縁部のみ作出される庇形態をAⅢ類

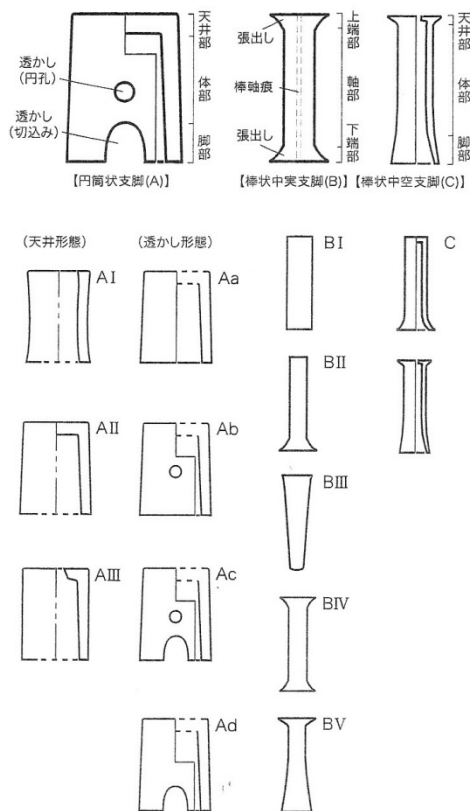


図 38 土製支脚の形式分類

「柏木 2013」より抜粋

としている。

さらに、A類には、体部に円孔をもつものや、脚部に切れ込みをもつものが見られる。これらを総じて、透かしと呼称し、透かしの形態によって、4つに細分している。円孔と切れ込みがいずれもない形態をAa類、円孔のみがある形態をAb類、円孔と切れ込みがある形態をAc類、切れ込みのみがある形態をAd類と細分している。

これらの天井部の形態と透かしの形態の組み合わせによって、A Ia類～A III d類まで細分をしている。

B類は、「棒状支脚(棒状中実支脚)」で、粘土塊を伸ばすか、棒を中心に粘土紐を巻き付けて細長く成形する形態のものである。立面形態によって5つに細分している。

B I類は、軸部が直線的か極めてわずかに端部が広がる円柱形態のもの、B II類は、下端部のみが外に張り出す円柱形態のもの、B III類は、三角錐に類する形態のもの、B IV類は、軸部が曲線的に強く括れるか、直線的ながらも上下端部が外に張り出す円柱形態のもの、B V類は、上端部のみ外に鋭く張り出し、下部は緩やかに広がる多角形形態のものである。

C類は、「棒状支脚(棒状中空支脚)」で、粘土紐の巻き上げで、細長く、薄い器壁で中空に成形される形態のものである。現段階では、類例は少ない。

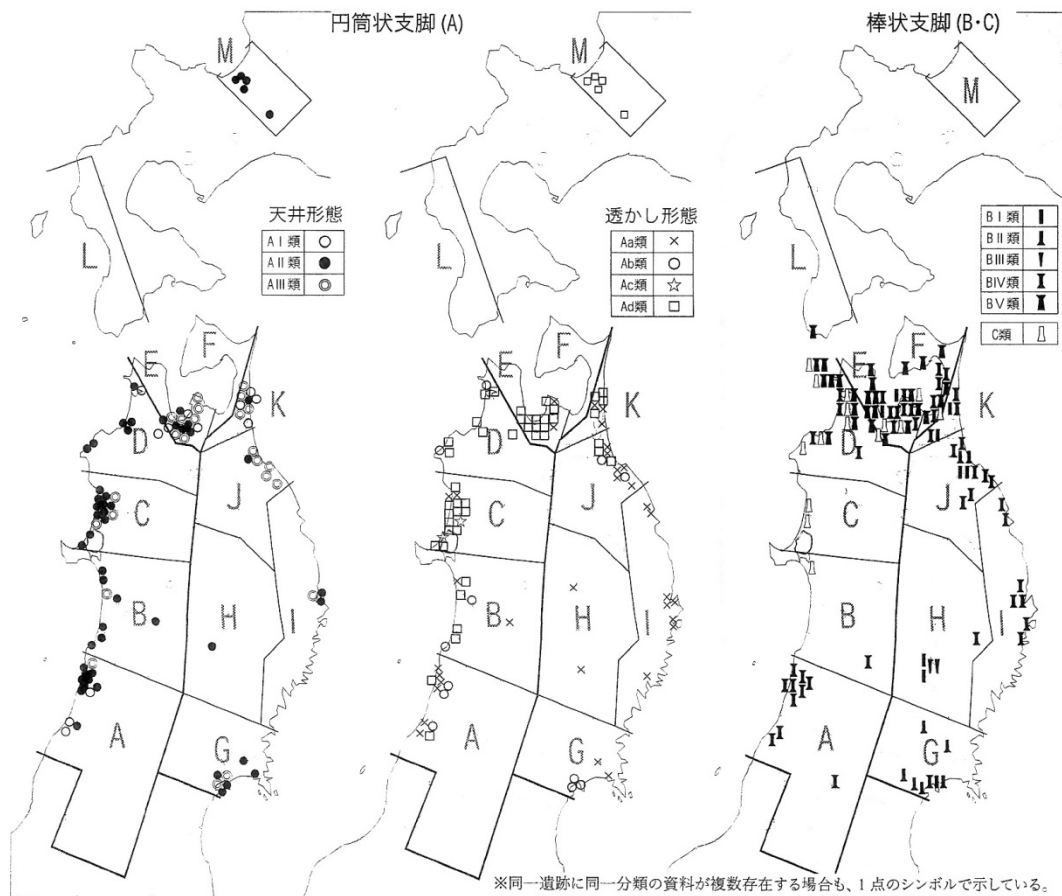


図 39 土製支脚の分布状況

「柏木 2013」より抜粋

愛宕下Ⅱ遺跡のS I 01から出土した土製支脚は、円筒状支脚で、天井部の形状については、明確ではないが、円孔及び切れ込み等の透かしをもたないところから見て、柏木氏分類によるA I a類または、A III a類に相当すると考えられる。

円筒状支脚に注目した場合、各形態の分布状況について見てみることにする。(図 39)

天井部の形態から見ると、天井部をもたないA I類は、本州の日本海側と陸奥湾沿岸部、青森県の太平洋側に散見される。天井部をもつA II類は、日本海側に圧倒的に多い傾向がみられるが、三陸沿岸部にも、若干存在する。庇形態のA III類は、青森県から岩手県にかけての太平洋側に多く見られ、陸奥湾沿岸部や本州の日本海側にも見られ、三陸沿岸部にも、若干存在する。

一方、透かしの形態から見ると、円孔・切れ込みのいずれもないもの(A a類)は、岩手県から宮城県にかけての太平洋側、いわゆる三陸沿岸部と北上川流域に見られる。円孔を有するもの(A b類)は、山形県北部から青森県にかけての日本海側や岩手県の沿岸部と仙台平野の沿岸部に見られる。円孔・切れ込みのいずれも有するもの(A c類)は、秋田県の沿岸部に若干見られる。切れ込みを有するもの(A d類)は、渡島半島の日本海側、山形県から青森県にかけての日本海側、

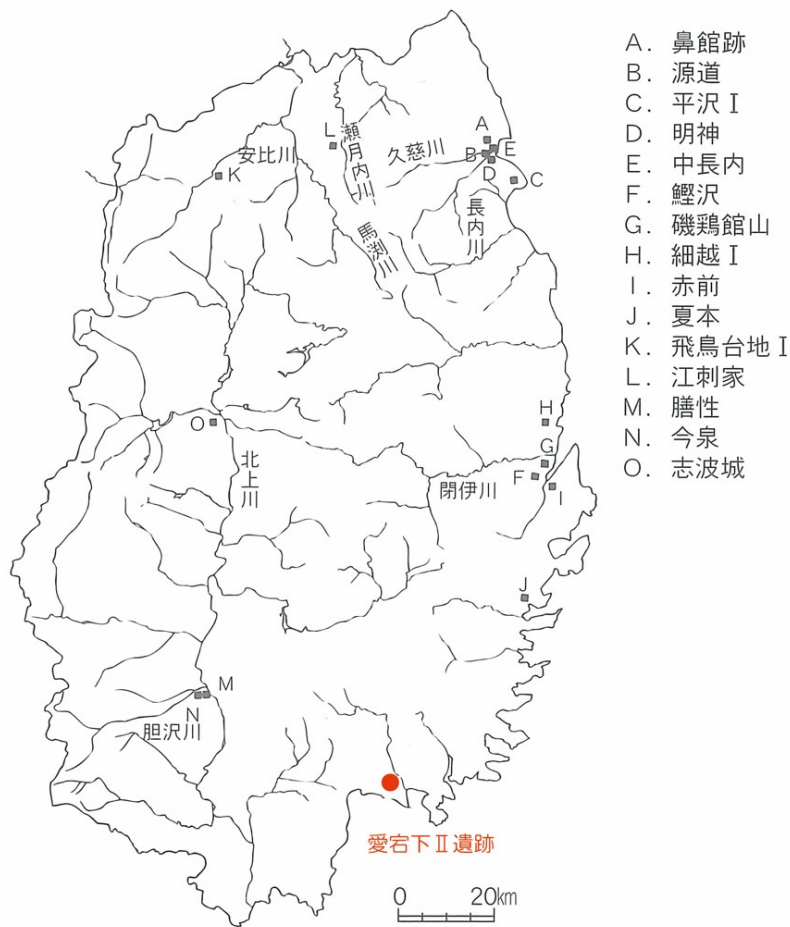


図 40 岩手県内における土製支脚が確認された遺跡

「濱田 宏 2000 より抜粋」(一部改変)

陸奥湾沿岸部、青森県の太平洋側に見られる。

愛宕下Ⅱ遺跡のS I 01 から出土した土製支脚は、円筒状支脚で、天井部の形状については、明確ではないが、円孔及び切れ込み等の透かしをもたないところから見て、柏木氏分類によるA I a類または、A III a類に相当すると考えられる。

もしも、A III a類であるならば、三陸沿岸部に特徴的な形態をもつものと言えるであろう。

また、A I a類であるならば、陸奥湾沿岸部または日本海側の特徴に通じるものが認められることとなる。

岩手県内における分布状況を見てみると、三陸沿岸部と北上川流域に多く見られ、特に、久慈市と宮古市の沿岸部に集中している。(図 40)

三陸沿岸部及び北上川流域における土製支脚は、一般的な棒状支脚(B類)が多く、円筒状支脚(A類)は、大勢を占めていない。愛宕下Ⅱ遺跡の今回の調査で、一般的な棒状支脚が出土していない点は注目されよう。さらに、細かい特徴を見てみると、粘土紐を巻き上げて成形する際に、

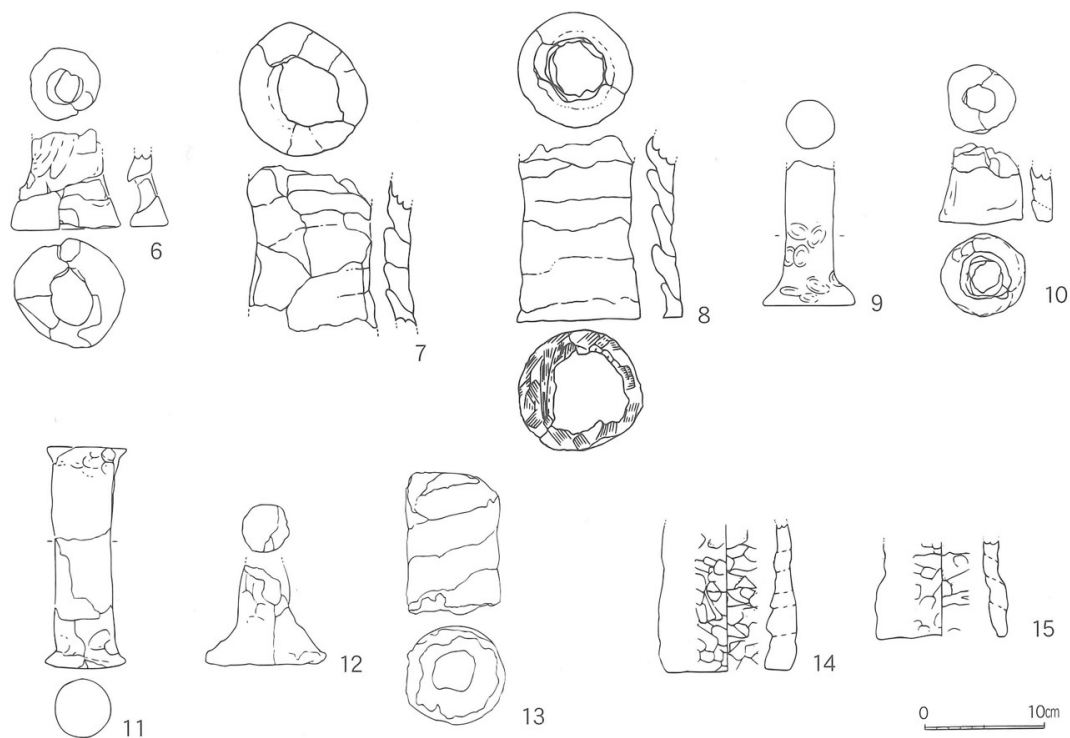


図 41 岩手県内出土の土製支脚

6～12：久慈市・源道遺跡、13：久慈市・平沢Ⅰ遺跡、14・15：久慈市・明神遺跡

内面の器面調整が荒く、段状の凹凸が見られる。また、外面のナデ調整が荒く、巻き上げ痕跡が明瞭に残っている。

これらの点から見て、久慈市・源道遺跡や同市・明神遺跡出土の土製支脚と同様の特徴をもつものと考えられる。(図 41 の 7・8、14・15)

参考・引用文献

・縄文土器に関する文献

阿子島香編 2015『東北の古代史 1 北の原始時代』吉川弘文館

岩手県立博物館 1982『岩手の土器』

大船渡市立博物館 1999『気仙の遺跡Ⅱ－陸前高田市・住田町の各遺跡の出土品－』

渡辺信夫編 1984『宮城の研究 第1巻 考古学篇』清文堂

・統縄文土器に関する文献

秋田県教育委員会 1988「寒川Ⅱ遺跡」『一般国道 7 号線八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』(秋田県文化財調査報告書第 167 集) 秋田県教育委員会

阿部義平他 2003「岩出山町木戸脇裏遺跡における北海道系土壌墓と出土遺物の研究」『宮城考古学第 5 号』宮城県考古学会

天野哲也・小野裕子 2011『〈改訂版〉北大エコキャンパス読本—考古学編—遺跡群から見た北大キャンパスと周辺域の歴史』北海道大学教育 G P・北海道大学総合博物館

石井淳 1994「東北地方北部における統縄文土器の編年的考察」『筑波大学先史学・考古学研究 5』

石井淳 1997「北日本における後北 C 2-D 式期の集団様相」『物質文化 No.63』物質文化研究会

- 石附喜三男 1973 「“江別式土器”の終末年代と所謂“北大式土器”(一)」『札幌大学教養部・札幌大学女子短期大学紀要5』札幌大学女子短期大学部
- 石附喜三男 1985 「弥生時代の北方文化」『考古学ジャーナルNo.248』(6月号)ニュー・サイエンス社
- 石巻市教育委員会 1997 「平成9年度発掘調査報告」『石巻市文化財だより第22号』石巻市教育委員会
- 泉明・児玉準 1984 「若美町牛込遺跡の土器について」『男鹿半島研究No.13』男鹿地域研究会
- 宇田川洋 1977 『北海道の考古学1』(北海道ライブラリー10)北海道出版企画センター
- 宇田川洋 1977 『北海道の考古学2』(北海道ライブラリー11)北海道出版企画センター
- 宇田川洋 1995 『北海道の考古学』(北方新書001)北海道出版企画センター
- 江別市郷土資料館編 2010 『甦る縄文文化—かえてきた土偶たち—』(平成22年度江別市郷土資料館特別展リーフレット) 江別市教育委員会
- 大館郷土資料館 2013 『大館郷土資料館展示図録』大館郷土資料館
- 大沼忠春 1982 「後北式土器」『縄文土器大成5 続縄文』講談社
- 大沼忠春 1989 「続縄文土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 加藤晋平他編 1994 『縄文文化の研究6 続縄文・南島文化』雄山閣
- 菊池徹夫 1978 「恵山式と江別式—続縄文文化編年試論—」『北奥古代文化第10号』北奥古代文化研究会
- 木村高 1994 「東北地方—後北C2・D式土器、北大I式土器の周辺—」『北海道考古学第30輯』北海道考古学会
- 木村高 1999 「東北地方北部における弥生系土器と古代土師器の並行関係—続縄文土器との共伴事例から—」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要第4号』青森県埋蔵文化財調査センター
- 興野義一 1983 「宮城県における黒曜石製小型円形削具と共伴して北大式土器を出土する遺跡について」『北奥古代文化第14号』北奥古代文化研究会
- 工藤研治 1994 「続縄文時代」『北海道考古学第30輯』北海道考古学会
- 小坂町町史編さん委員会 1975 『小坂町史』秋田県鹿角郡小坂町
- 小林克 1991 「農耕社会に南下した狩猟採集民—秋田県能代市寒川II遺跡の事例—」『考古学ジャーナルNo.341』ニュー・サイエンス社
- 小林克 1993 「江別C2式土器の本州分布をめぐって—「東北続縄紋式」の視点から—」『先史考古学研究第4号』阿佐ヶ谷先史学研究会
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『大日向II遺跡発掘調査報告書—第2次～第5次調査—』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第225号)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 齋藤邦雄 1993 「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学第5号』岩手考古学会
- 佐藤信行 1968 「宮城県岩出町木戸脇裏遺跡 所謂北大式土器の分布とその意義」『北海道考古学第11輯』北海道考古学会
- 佐藤信行 1976 「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 佐藤信行 1983 「宮城県内の北海道系遺物」『北奥古代文化第14号』北奥古代文化研究会
- 鈴木信 2009 「①続縄文文化と弥生文化」『弥生時代の考古学I 弥生文化の輪郭』同成社
- 高瀬克範 2014 「続縄文文化の資源・土地利用 隣接諸文化との比較にもとづく展望」『国立歴史民俗博物館研究報告第185集』国立歴史民俗博物館
- 高倉純 2009 「北海道東部の続縄文時代石器群」『北方人文研究第2号』
- 高橋昭治他 1982 「岩手県における後北式文化」『北奥古代文化第13号』北奥古代文化研究会
- 高橋信雄 1982 「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器の対比」『北奥古代文化第13号』北奥古代文化研究会
- 高橋信雄 1993 「東北北部の古墳文化と続縄文文化」『二十一世紀への考古学 櫻井清彦先生古稀記念論文集』櫻井清彦先生古稀記念会
- 滝沢規朗 2014 「続縄文土器と土師器の共伴事例からみた併行関係—越後の事例を中心に—」『第19回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 田才雅彦 1983 「北大式土器」『北奥古代文化第14号』北奥古代文化研究会
- 千代肇 1978 「弥生時代における恵山文化」『北奥古代文化第10号』北奥古代文化研究会
- 築館町教育委員会 1992 『伊治城跡—平成3年度発掘調査報告書—』(築館町文化財調査報告書第5集) 築館町教育委員会

- 津嶋知弘他 1997『永福寺山遺跡－昭和40・41年発掘調査報告書－』盛岡市教育委員会
- 中村五郎 1973「北海道南部の縄文土器編年」『北海道考古学第9輯』北海道考古学会
- 中村五郎 1978「東部・西部弥生式土器と縄文土器の編年－福島県の資料を基準として－」『北奥古代文化第10号』北奥古代文化研究会
- 中村五郎 1982「縄文土器編年をめぐる諸問題」『北奥古代文化第13号』北奥古代文化研究会
- 中村五郎 1992「古式土師器・縄文土器編年めぐって」『北海道考古学第28輯』北海道考古学会
- 納谷信広 1987「後北式土器の研究」『秋田考古学第39号』秋田考古学会
- 新潟県教育委員会 1983「内越遺跡」『国道116号線埋蔵文化財調査報告書』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第33号）新潟県教育委員会
- 野村崇 1988『日本の古代遺跡40 北海道Ⅰ』保育社
- 野村崇 1997『日本の古代遺跡41 北海道Ⅱ』保育社
- 芳賀英美 2003『新金沼遺跡 三陸自動車道路建設に伴う発掘調査報告』（石巻市文化財調査報告書第11集）石巻市教育委員会
- 平山久夫編 1975『北奥の古代文化－北海道と東北地方における古代文化交流の謎－』学生社
- 藤沢敦 2014「古墳文化と縄文文化の相互関係」『第19回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 藤沢敦編 2015『東北の古代史2 倭国の形成と東北』吉川弘文館
- 松田宏介 2014「資料集成：縄文期の住居址」『日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料集』
- 三浦陽一編 2005『盛岡市遺跡の学び館常設展示図録』盛岡市遺跡の学び館
- 水澤幸一 2014「縁辺の古墳と在地社会－城の山古墳を中心にして」『第19回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 吉谷昭彦・高橋誠明 2001「宮城県における縄文系石器の意義と石材の原産地同定」『宮城考古学第3号』宮城県考古学会

・弥生土器・土師器に関する文献

- 石川日出志 2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学第120号』
- 上野秀一 1992「北海道における天王山式系土器について」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学論集』
- 岡田康博 1984「青森県内の弥生時代終末期の土器について」『遺址第4号』
- 草間俊一 1978「岩手県の弥生文化」『北奥古代文化第10号』北奥古代文化研究会
- 工藤竹久 1978「東北北部における弥生時代の諸問題」『北奥古代文化第10号』北奥古代文化研究会
- 興野義一 1978「宮城県大穴遺跡の弥生式土器」『北奥古代文化第10号』北奥古代文化研究会
- 芳賀英実 1995『田道町遺跡』（石巻市文化財調査報告書第7集）石巻市教育委員会

・土製支脚に関する文献

- 青森市教育委員会 2000『平成11年度 市内遺跡発掘調査報告書』（青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第53集）青森市教育委員会
- 秋田県教育委員会 1985『カウヤ遺跡発掘調査報告書』（秋田県文化財調査報告書第123集）秋田県教育委員会
- 秋田県教育委員会 1998『湯ノ沢谷遺跡－県営ほ場整備事業水沢地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』（秋田県文化財調査報告書第273集）秋田県教育委員会
- 柏木大延 2013「古代東北・北海道における土製支脚の系譜とその意義」『物質文化93』物質文化研究会
- 柏木大延他 2004『K445遺跡』（札幌市文化財調査報告書75）札幌市教育委員会
- 春日真実「考古資料から考える大宝二年の越中国四郡分割」（越後国域確定1300年リレー講演会・第8回資料）新潟県教育委員会
- 北林八洲晴 1973「陸奥湾沿岸における土器製塩」『北奥古代文化第5号』北奥古代文化研究会
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第120号）(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第125号）(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989『夏本遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第134号）(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989『源道遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第138号)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1991『明神遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第150号)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1992『鼻館跡遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第171号)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『大芦 I 遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第306号)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 柴田陽一郎 1993「秋田県内における土製支脚について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第8号』
秋田県埋蔵文化財センター
- 柴田陽一郎 2010「東北地方における土器製塩」『石川県埋蔵文化財情報第23号』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 徳網克己 2005「カマドに伴う円筒形土製品について」『龍谷大学考古学論集 I』龍谷大学考古学論集刊行会
- 濱田宏 2000「岩手県内出土の土製支脚—古代土器製塩の実証に向けて—」『紀要XIX(平成11年度)』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 森淳 2004「南部地域の古代製塩土器について」『研究紀要第9号』青森県埋蔵文化財調査センター
- ・その他の文献
- 丸山浩治他 2004「十和田 a テフラ(To-a)堆積確認遺跡の集成(1)」『紀要XXIII(平成15年度)』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 丸山浩治他 2005「十和田 a テフラ(To-a)堆積確認遺跡の集成(2)」『紀要XXIV(平成16年度)』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 陸前高田市史編集委員会編 1995『陸前高田市史 第2巻 地質・考古編』

附編 陸前高田市愛宕下Ⅱ遺跡のテフラ分析

(株) 加速器分析研究所

はじめに

岩手県陸前高田市に所在する愛宕下Ⅱ遺跡では、平安時代とされる遺物包含層が確認され、土坑などの遺構も検出されている。発掘調査では、平安時代の遺物包含層を覆う灰白色の堆積物が確認され、その検出状況や遺構、遺物との関係などから、平安時代に噴出した火山灰である十和田 a テフラであると推定されている。

本分析調査では、平安時代の遺物包含層を覆う灰白色の堆積物を対象としてテフラの検出同定、屈折率測定を行い、その特性を明らかにすることで、この堆積物が十和田 a テフラであるか否かを確認する。

1 試料

試料は、愛宕下Ⅱ遺跡の調査区内で採取された堆積物 1 点（「十和田 a サンプル 2014.06.05」）である。この堆積物は厚さ 2～5cm ほどを有し、全体的に灰白色を呈する細粒の碎屑物から構成され、平安時代の遺物包含層をおおよそ 6m×6m の範囲で覆うとされる。分析時の観察では、試料は緩く固結した灰白色を呈する砂質シルトである。

2 分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

3 結果

結果を表 1 に示す。処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスと微量の軽石から構成される。火山ガラスのほとんどは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものも混在する。また、微量の無色透明のバブル型も認められる。軽石は、最大径約 1.2mm であり、白色を呈し、発泡はやや良好～やや不良である。火山ガラスと軽石の他には、斜長石や斜方輝石、単斜輝石などの遊離結晶や安山岩と思われる灰色の岩石片などが、いずれも微量認められる。

火山ガラスの屈折率測定結果を図 1 に示す。レンジは $n_{1.504}$ – $n_{1.510}$ であり、 $n_{1.507}$ 付近にモードがある。

4 考察

処理後の砂分はほぼ細粒の火山ガラスにより構成され、前述した調査区内における産状から、試料が採取された灰白色の堆積物は火山ガラスを主体とするテフラの降下堆積物であると考えられる。これまでに研究

表1. テフラ分析結果

試料名	スコリア	火山ガラス		軽石		
	量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
十和田aサンプル 2014.06.05	—	++++	cl・pm>>cl・bw	+	W・sb,W・sg	1.2

凡例 —:含まれない. (+):きわめて微量. +:微量. ++:少量. +++:中量. ++++:多量.

W:白色.

g:良好. sg:やや良好. sb:やや不良. b:不良. 最大粒径はmm.

cl:無色透明. bw:バブル型. pm:軽石型.

された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984)、Arai et al. (1986)、町田・新井(2003)など)と、上述した火山ガラスの形態および屈折率、検出された状況、愛宕下Ⅱ遺跡の地理的位置などから、検出されたテフラは十和田 a テフラ(To-a)に同定される。

To-a は、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか, 1981)。

また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦 915 年とされている。なお、n1. 502 以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとされている(町田ほか, 1981)。愛宕下Ⅱ遺跡の地理的位置を考慮すれば、今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まない To-a に相当するものと考えられる。

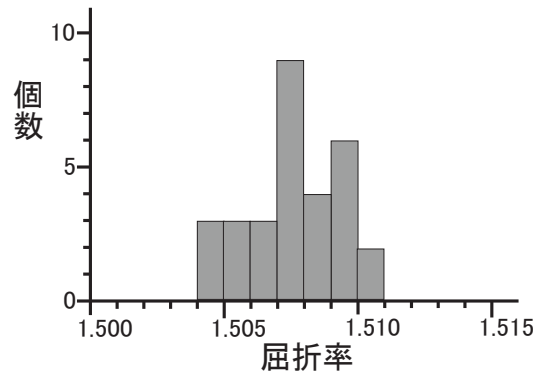


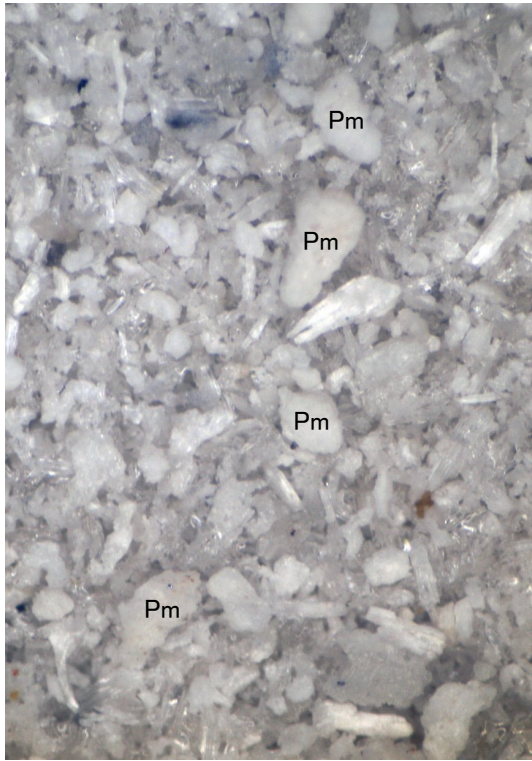
図 1. 火山ガラスの屈折率 (十和田aサンプル 2014.06.05)

文献

- Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyuchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II—Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido—. *Geographical reports of Tokyo Metropolitan University* No. 21, 223-250.
- 古澤明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. *地質学雑誌*, 101, 123-133.
- 早川由紀夫・小山真人, 1998, 日本海をはさんで 10 世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—. *火山*, 43, 403-407.
- 町田洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 町田洋・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. *科学*, 51, 562-569.
- 町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—. 渡辺直経(編) *古文化財に関する保存科学と人文・自然科学*. 同朋舎, 865-928.

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図版1 テフラ



1.軽石と火山ガラス
(十和田aサンプル 2014.06.05)
Pm:軽石.



2.火山ガラス(十和田aサンプル 2014.06.05)

